

飯山市埋蔵文化財調査報告 第53集

上野Ⅷ・柳町遺跡

UE NO

YANAGI MACHI

SITE

1996.3

長野県飯山市教育委員会

飯山市埋藏文化財調査報告 第53集

上野Ⅷ・柳町遺跡

UE NO

YANAGI MACHI

SITE

1996.3

長野県飯山市教育委員会

第1編 上野遺跡

序

飯山市教育委員会
教育長 岩崎 彌

飯山盆地の中央を悠々と流れる千曲川は、太古の時代より多くの恵みをわたくしたちに与えてくれています。とくに常盤地区上野・大倉崎の丘陵や対岸の瑞穂地区関沢周辺の千曲川河岸には数多くの古代遺跡が存在し、往時より千曲川と密接な関係を有していたことがわかっています。

昭和63年・平成元年に実施された小沼・湯滝バイパス建設に伴う調査では、一帯に旧石器時代から中世まで連続して生活が営まれていたことが明らかとなりました。ことに上野遺跡では、南北500m以上にも及んで痕跡が確認され、以降数次にわたる調査によって飯山市でも第一級の大遺跡であることが判明しています。

平成6年9月、上野遺跡の一角で個人による住宅兼店舗建築に伴う確認調査が行われました。その結果、多くの遺物と共に住居跡などの痕跡を確認したため本調査の必要が生じました。調査は平成7年4月から5月に行われ、方形周溝墓をはじめとして貴重な発見があいつぎました。本書はその成果の記録をまとめたものです。

ここに所期の目的が達成できましたことは、調査団長の高橋桂先生をはじめとする調査団関係者、発掘調査の実施について物心両面からご協力いただいた施主の山本達夫氏および多くの皆様のご協力の賜と深く感謝申し上げます。

最後となりましたが、本報告書が埋蔵文化財保護に対する理解を一層深める上で役立つことを念願して序といたします。

平成8年2月5日

例 言

- 1 本書は、長野県飯山市大字常盤字中道3571-11番地ほかに所在する上野遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 今回検出された遺跡は、旧石器・縄文・弥生・古墳・平安の各時代であるが、中心は弥生時代の集落址と、古墳時代の方形周溝墓群である。
- 3 調査は個人による住宅兼店舗の建築工事に伴う発掘調査で、飯山市教育委員会が平成7年4月20日から5月31日まで実施した。
- 4 上野遺跡は過去に7回の調査報告がなされている（飯山市教育委員会『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』1989・同Ⅱ1990・同『上野遺跡』1991・同『上野遺跡Ⅳ』1994・同『上野遺跡Ⅴ』1994・同『上野遺跡Ⅵ』1995・同『上野遺跡Ⅶ』1995）。本報告は上野遺跡Ⅷとして報告する。
- 5 発掘調査は国庫補助事業を受けて実施し、一部については施主である山本達夫氏に協力をいただいた。
6 発掘調査は以下に掲げる組織で実施した。

飯山市遺跡調査会

顧問	小山邦武	市長
会長	滝沢藤三郎	市教育委員会委員長
副会長	水野光雄	市社会教育委員会
委員	高橋 桂	市文化財保護審議会会長
	藤巻泰雄	市議会総務文教委員長
	高橋英吉	市民館長
	小川幹夫	市教育委員会委員長職務代理
	岩崎 彌	市教育委員会教育長
	月岡保男	市教育委員会教育次長
事務局長	山崎賢太郎	市教育委員会生涯学習課長
事務局次長	町井和夫	市教育委員会生涯学習課社会教育係長
事務局員	望月静雄	市教育委員会生涯学習課社会教育係

地元関係者

常盤公民館長	鈴木達男
上野区長	万場喜三郎
同副区長	小出 治
平用水	木内広美・小林佑幸
上野の森の会	中原道雄・中原 信・富岡太重
道路委員長	小出保夫
隣接地権者	小出大暎・小出平吉・小出一男・小出幸一郎・丸山淳一

調査団

団 長	高橋 桂
調査主任	常盤井智行（常盤）

調査員 小林新治(飯山) 田村澁城(外様) 梶井伊都子(上倉)

作業参加者(順不同)

小出まさ子・万場義秋・小出えい(上野) 鈴木ため(大倉崎)
北條辰男・小林経雄・樋山 巖・石沢悦次・藤沢和枝(戸狩)
滝沢きよえ(柳新田) 土屋久栄(五位野) 宮澤 豊(南町)

整理参加者

小林みさを(柏尾) 小川ちか子(大深) 藤沢和枝(戸狩)

- 7 本書で使用された方位は真北であり、地区割りは国土産標第8系に準じている。
- 8 本書に掲載した平安時代の土器・陶器のスクリーントーンは、黒色処理および灰軸施軸部分を表わす。また断面黒塗りは須恵器を、断面アミ目は灰軸陶器を示す。
- 9 本書の編集は常盤井が主体となり、望月が補佐し、高橋が統括した。文責は目次に記した。
- 10 発掘調査の図面・出土品は、市内大深の市埋蔵文化財センター(旧三中寄宿舎)で保管している。

目 次

巻頭図版画 1・2	
序	
例言	
第1章 調査経過	4
1 調査に至る経過ならびに事務経過	(望月 静雄) 4
2 調査経過	(常盤井智行) 4
A 発掘調査	4
B 層 序	5
C 調査日誌抄	6
第2章 遺跡の概要	(小林 新治) 7
1 遺跡の位置と環境	7
A 地理的環境	7
B 歴史的環境	7
2 上野遺跡の概要と過去の調査	9
第3章 旧石器時代	(望月 静雄) 17
1 異物の出土状態	17
A 層序と文化層	17
B 地点分布	18
2 遺物	22
A 第11地点出土石器	22
B 第13地点出土石器	22
C その他の地点出土石器	26
D 小括	26
第4章 弥生時代	(常盤井智行) 29
1 遺構	29
A 竪穴住居址	29
B 掘立柱建物址	29
C 木棺墓・土塚墓	30
2 遺物	36
A 土器	36
B 土製品	39
C 石器	39
第5章 古墳時代	42
1 遺構	42
A 方形周溝墓	42
2 遺物	44
A 土器	44
第6章 縄文時代・平安時代	45
1 縄文時代の遺物	45
2 平安時代の遺物	46
第7章 結語	(高橋 桂) 47

第1章 調査経過

1 調査に至る経過ならびに事務経過

上野遺跡の発掘調査は過去6回行われている。詳細は別項で触れるが、今回の調査が第7次の調査となった。国道バイパス通過によるその後の開発によって、それまで静かに眠っていた上野の大遺跡のほとんどすべてが食い潰されようとしている。

平成6年7月、東大阪市在住の山本達夫氏より、個人住宅兼店舗建設に伴う上野遺跡の保護について照会があった。該当地は、平成元年に調査したバスパスルートに接した地点で、方形周溝墓や弥生・平安時代の竪穴住居址等が検出されており、その続きとして遺構の存在が予想される地点であった。ただし、地権者の小出大暎氏によれば開墾によりかなり掘り返したとの話であった。そのため、地下の状況を確認するために、平成6年9月19日より29日まで試掘調査を実施した（飯山市教委 1995 上野遺跡Ⅶ）。その結果、弥生時代中期住居址1軒、方形周溝墓4基、独立柱建物址2棟を確認し、対象地に遺構がかなり濃密に分布していることが判明した。そのため、山本氏には正式な発掘調査の必要性を説明し、あわせて店舗建設部分についての費用の負担についても協力をお願いした。幸いにも深いご理解をいただくことができた。また、住宅等の部分相当額については国庫補助事業として実施することとした。

なお、調査は平成7年5月末までに現地での調査を完了することで合意された。

12月12日 平成7年度文化財補助関係事業計画を提出する。

平成7年

3月30日 山本氏より法第57条の2第1項による届け出が提出される。

4月1日 文化庁長官宛法第98条の2第1項による発掘通知を提出する。

4月8日 山本氏より『発掘調査の依頼』が提出され、4月15日付けで契約を締結した。

5月8日 県教育委員会教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」の通知がある。

6月7日 県教育委員会教育長より、「平成7年度文化財関係国庫補助事業について」の通知がある。

6月8日 調査終了とともない拾得届・保管証・終了届を各関係機関に提出。

6月20日 文化庁長官宛「平成7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書」を提出する。

6月27日 県費分について「文化財保護事業補助金申請書」を提出する。

7月3日 県教育委員会教育長より「埋蔵物の文化財認定について」の通知がある。

9月27日 県教育委員会より「国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書」の通知がある。

2 調査経過

A 発掘調査

今回の発掘対象地は、個人の住宅兼店舗の建設予定地で、上野遺跡の南端部に当たる。地目は畑でアスパラが栽培されていた。地主の話によれば古くは塚状の高まりがあったとのことで、方形周溝墓の盛土のなごりをとどめていたのかもしれない。

発掘面積は市道部分を除いた約870㎡。平成7（1995）年4月20日から5月31日まで発掘調査を行った。排土処理の関係で、東西半分ずつ調査することとした。用水路を堺に西半分をまず調査し東半分に排土を置き、のちそ

の逆を行った。重機による表土はぎの回数が増すことと、全景写真撮影に難点がある。

大地区割については、平成4（1992）年の発掘調査のときに設定した100m方眼で50区画の大地区割を用いた（図1）。今回は、39区と44区内で調査を行った。

また、大地区内の地区割についても前回に従い5m方眼とし、南から北へ1～20、西から東へA～Tの番号を付した。従って調査日誌抄の中では、各グリットをA-1またはT-20というふうに記した。

調査方法は、原則として表土剥ぎ、精査、写真撮影、遺構掘り、測量、遺物の取り上げの順で行った。遺構の掘り下げは移植ゴテを用い慎重に掘り下げを実施した。写真撮影は白黒フィルム35ミリとカラースライドフィルム35ミリフィルムで適時撮影した。測量は、遺構全体図は40分の1平板測量図を作成した。また住居址など主要遺構とともに、土器・礫群の出土遺物についても適時に10分の1または20分の1の微細図を作成した。

遺構番号は前回までの付番の次の番号から通番とした。遺構の略称については、土坑はSK、掘立柱建物にはSBとし、竪穴住居址は弥生時代のものをY〇号住居址、方形周溝墓はSDとした。遺物の取り上げは、遺構出土のものは遺構毎に、また、包含層のものは各グリット毎に取り上げたが、石器・礫・縄文土器については1点毎に位置と高さを測って取り上げた。

B 層序

上野遺跡の基本的な層序は、上位からI茶灰色土（表土厚さ約20cm）、II黒色土（厚さ約30cm）、III茶褐色土（漸移層厚さ約10cm）、IV黄色粘質土（ソフト厚さ約10cm）、V黄褐色粘質土（下層に近づくに従い褐色味と硬さが増す・厚さ約25cm）、VI黄褐色粘質土（上部より黄味が強く硬い。また、粘性も強く所々ブロック状となっている）である。（図）

今回の調査地は丘頂部にあたる。丘頂部のF～H区では耕作土直下が漸移層の茶褐色土であり、西への傾斜に伴い、黒色土の厚みが増す。西端での黒色土は厚さ約30cmである。方形周溝墓・木棺墓の切り込み面は黒色土中であり、検出面は漸移層より約5cm上の黒色土がやや色薄になるあたりである。

旧石器・礫の出土層位は黄色粘質土の上部から漸移層にかけてである。

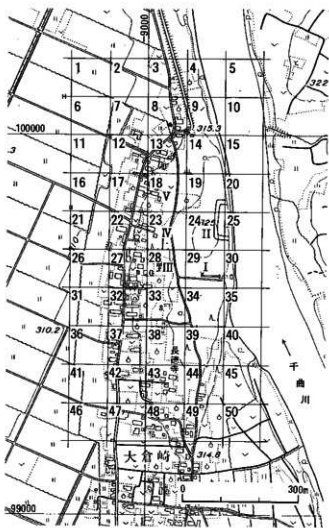


図1 上野遺跡大地区割 1:10,000

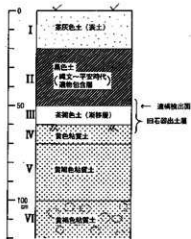


図2 土層模式図

C 調査日誌抄

4月14日 調査地内のアスパラの処理、雪で倒れた松の伐採、範囲杭の確認等の事前準備。夕方上野公民館にて排土処理、道路の使用・発掘工程などについての地元説明会を行う。調査地内日陰に残雪あり。

4月17日 コンテナハウスの設置・道具の整理等の発掘準備。

4月20日 発掘開始。西半分の重機による表土はぎと並行して器材の搬入、ジョレンがけ精査を開始。周囲の山の残雪白い。

4月21日 基準杭を昨年調査した揚水機場予定地南の山林中の杭から計り出してもってくる。トランシット・スチールテープによる作業で、水平距離計算を行わなかったため厳密な精度は期しがたい。ジョレンがけ続行。

4月24日～25日 ジョレンがけ精査続行。黒色土下層で方形周溝墓SD8・SD9の土面輪郭検出。D-18区で黒色土中から弥生中期の壺検出。後にSK154の東甬にあたることわかる。

4月26日 ジョレンがけ続行。ほぼ漸移層上面まで下がる。方形周溝墓以外の遺構見え始める。弥生土器集中箇所は住居址の可能性が高い。常盤小学校6年生約20名担任の先生と見学。

4月27日 方形周溝墓SD8・SD9上面検出状態写真撮影。午後から掘り下げ開始。

4月28日 遺構掘り下げ続行。C・D-1区SD9・SD8に切られて弥生時代中期の竪穴住居址を検出。Y13号住居址と命名。側溝から安山岩石細片多く出土。周山の雪が消え千曲川辺の柳の芽吹きが美しい。

5月2日 SD9ほぼ完掘。C・D-19区で弥生時代中期の竪穴住居址を検出。Y14号住居址と命名、B-18区で黒色土の落ち込みあり、自然地形の落ち込みらしい。

5月8日 B・C-19・20区で掘立柱建物址検出、SB23と命名。SD8北辺内墓城から高環様の供献土器出土。

5月9日 公民館と共催の現地見学会を12日に行うこととし、チラシを作る。上野区長見学。

5月10・11日 遺構掘り下げ続行。

5月12日 SD8・Y14住ほぼ完掘。午後4時から小雨の中現地見学会開催。参加者30名。

5月15～17日 雨が続き現地作業を中断することが多く、作業はかどらず。

5月18日 SD8・9土層実測。SD9北辺溝内墓城土器出土状態微細図作成。Y14住遺物出土状態写真撮影。

5月19日 調査地西半分の掘り下げをほぼ完了。全景写真撮影。

5月20日・22日 土層観察用セクションの土層図作成、柱穴の完掘、遺物のとり上げと並行して、40分の1遺構全体図を作成し西半分の調査を完了。期限が近く小雨についての作業であった。

5月23日 調査地東半分の重機による表土はぎ。排土をまず西半分に移動し、その土を填圧しながらの作業のため時間がかかる。表土はぎと並行して東北隅からジョレンがけ精査を開始。市道東のJ-18・19区で平成元(1989)年調査時検出の方形周溝墓SD3の東隅を検出。上面輪郭写真撮影ののち完掘。

5月24日 重機による表はぎ午前中続行。ジョレンがけ精査、基準杭・地区割杭打ち。I-19区で礫群検出。10号礫群と命名。

5月25・26日、ジョレンがけ精査、遺構掘り下げ続行。G・H-17・18区で弥生時代の木棺墓検出。そのうち2基は礫床木棺墓らしい。

5月29日 SD7・SD10完掘。西半分で検出したSD8・9に比べ浅い。掘立柱建物址続々と検出。礫床木棺墓実測開始。

5月30日 東半分ほぼ完掘。全景写真撮影。遺構個々の写真撮影。礫床木棺墓の実測のみを残して、遺構全体図作成・器材の搬取を行う。午後5時から上野公民館で地主・区長等関係者とともに発掘終了式を行う。

5月31日 礫床木棺墓の実測終了。四分割の断ち割りを行ったのち完掘。地区割杭の引きぬき、器材の搬取を行い、現地作業を終了。

第2章 遺跡の概要

1 遺跡の位置と環境

A 地理的環境

上野遺跡は、長野県飯山市大字常盤字外和柳ほかに所在している(図3)。

長野市からJR飯山線で、千曲川沿いに下り、飯山駅を通過して二つ目のところが信濃平駅で、この駅の東側平坦部一帯が千曲川の氾濫堆積物によって形成された常盤平である。一面に水田が広がり、外様平と並びこの地方最大の穀倉地帯で、飯山盆地の中央に位置する。西側には遺跡群・古墳群を有する長峰丘陵が南北に走り、これを越えると外様平が開け、更に盆地の西縁は駒倉山(1288.6m)等比較的低い関田山地となり、越後との国境である。この山地には「塩の道」と呼ばれる幾筋かの交易道がブナ・雑木林の中に存在する。

常盤平の東側は千曲川の悠久の流れを擁し、更に飯山盆地東縁にあたる毛無山(1640.98m)等三国山脈の山なみが聳え、南は飯山市街地、北は大深の集落で囲まれ、この平の東端部に千曲川に添う形で上野遺跡の所在する上野丘陵(この地方では、上野の森とも呼んでいる)がある。

この丘陵は、南北1.5km、東西0.5kmの細長い残丘状を呈し、東側は千曲川の浸蝕により断崖となり、西側は、ゆるやかに傾斜し常盤平に広がり、上野区の集落が点在している。

この丘陵上に広がる上野遺跡は、大倉崎遺跡(縄文時代)の北側にあたり、丘陵全体が遺跡と考えられている。標高約332mの小丘陵には、ブナ・ナラ等の大木が林立、森を形成して低地には見られない山ゆり・リンドウなどが植生している珍しい場所といえる。また、西斜面の所々に湧水が認められ、山菜やヤブコウジの赤い実が、住む人の気持ちを和らげるとともに、自然の恵みを太古から人々に与えてくれたところでもある。

平成4(1992)年国道117号線の開削により、緑と遺跡が半減するなどその姿が大きく変わりつつあることは、地域発展の道路のこととはいえ、誠に残念と言うほかはない。近い将来に於て、この上野の森の景観保持、植生への影響調査、加えて遺跡保存など積極的な対策が待たれるところである。

B 歴史的環境

この遺跡の所在する上野丘陵周辺には、数多くの遺跡が存在している。分布については、必ずしも明確に把握している訳ではないが、以下明らかなものについて時代別に述べてみることにする(図3)。

(1) 旧石器時代

この地域は、関沢(14)、太子林(15)など旧石器時代の遺跡が、飯山地方では最も多く分布することが認められているところである。特に昭和63年調査の日笠遺跡からは、この時代の良好な石器群が検出されている。

河岸段丘上に分布していることからしても千曲川との密接な関係をうかがい知ることができる。

なお、西の長峰丘陵上の大塚(31)、尾崎南(38)もこの時代の遺跡である。

(2) 縄文時代

この時代における飯山地方初期の遺跡は、北竜湖遺跡で、上野遺跡東方約2.5km地点に所在し、草創期・早期に位置づけられる表裏縄文土器が出土している。

前期の遺跡には、大倉崎(5)、太子林(15)、瀬付(6)、岡峰(24)などがあり、中期では、蓮華文などを特徴とする北陸系の土器片が採集されている上、原遺跡が挙げられる。

また、後期の遺跡として重要なのは、宮中遺跡(11)で、昭和55年調査の際石棺蓋23基が検出されている。なお、飯山盆地西縁の関田山地東麓には、中・晩期の柳沢A(41)、をはじめ晩期の遺跡が点在している。

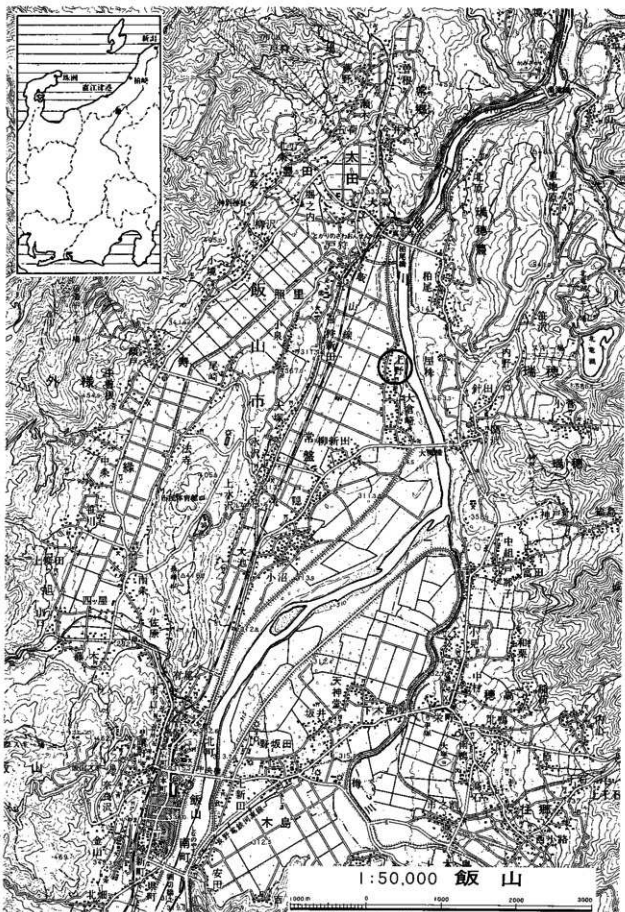


図3 上野遺跡の位置

(3) 弥生時代

この地方において、長峰丘陵上の諸遺跡(24~40)はこの時代の遺跡として著名である。特に小泉遺跡(35)からは、過去3次の発掘調査の際弥生中・後期の大集落跡や、中期の木棺墓群などが検出されている。

上野遺跡でも住居址や土器片なども出土しているとともに、照丘遺跡(27)からは中期の粟林式土器や木製品等が出土している。

(4) 古墳時代

現在、上野古墳(3)をはじめ、向峰古墳群(16)・長峰丘陵上の古墳群(27・28・32)が確認されている。上野遺跡では北陸系の土器を伴った前期の竪穴住居址と方形周溝墓が検出されている。

(5) 古代・中世(奈良時代以降)

飯山地方においては、奈良時代に比定できる遺跡は発見されていない。平安時代の遺跡は屋棟(17)、大倉崎Ⅱ(4)などがあげられる。また、関田山地東麓に柳沢(44)をはじめ多くの遺跡が点在しているが、平安時代末から中世にかけては判然としない部分が多い。

ここ上野遺跡では、集落跡や墓址などが検出されている。

城館跡については、対岸の瑞穂地区と関田山地東麓に多く点在している。その中において千曲川にのぞむ位置にある大倉崎館跡(2)は注目されるところである。

参考文献

飯山市教育委員会 1986『飯山の遺跡』

飯山市教育委員会 1990『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

飯山市・飯山市誌編集委員会 1991『飯山市誌自然環境編』

飯山市教育委員会 1994『上野遺跡Ⅳ』

2 上野遺跡の概要と過去の調査

上野遺跡は、常盤平の東端部にあたり標高約322m、東西に約500m南北に約1,500mの上野丘陵上において、丘陵全体にその広がりを見せている。

千曲川左岸に接するこの丘陵東側は比高10~15mの段丘崖を有し、西側は緩やかに傾斜し常盤平(旧沓原)に接している。この緩斜面にある畑地の表面に遺物が散布していることや、丘頂に古墳のあることは、古くから知られており、また、丘陵北端部に雄大な濠を巡らした「お城跡」(大倉崎館跡)のあることも『村史ときわ』などに紹介されている。古墳は丘陵のほぼ中央で1基確認されている。なお、平成元(1989)年の発掘調査により、複合遺跡であることが確認された。

この遺跡は、市内の遺跡でも第一級と目されていたが、昭和63年から平成3年にかけての国道117号線(小沼・湯滝バイパス)建設工事によって、東西に分断されてしまったのである。

以下、調査年次を追いながら過去の調査について記す(図5)。

昭和63(1988)年 大倉崎館跡の発掘調査が実施され、幅10m以上深さ5m以上の雄大な空壕を有する鎌倉・室町時代(14・15世紀)の館であることを確認。出土遺物の中には輸入磁器の食器類、越前・珠洲焼の大甕、瀬戸・美濃系の香炉、風炉などや銭貨もあり、県内でも貴重な中世の館跡であることが判明し、中世史を解明する上で重要な資料が得られた。

平成元(1989)年 国道117号バイパス路線約500m間の発掘調査を行い、全面から旧石器から平安までの各時代にわたる遺構・遺物が検出され、複合遺跡であることが確認された。

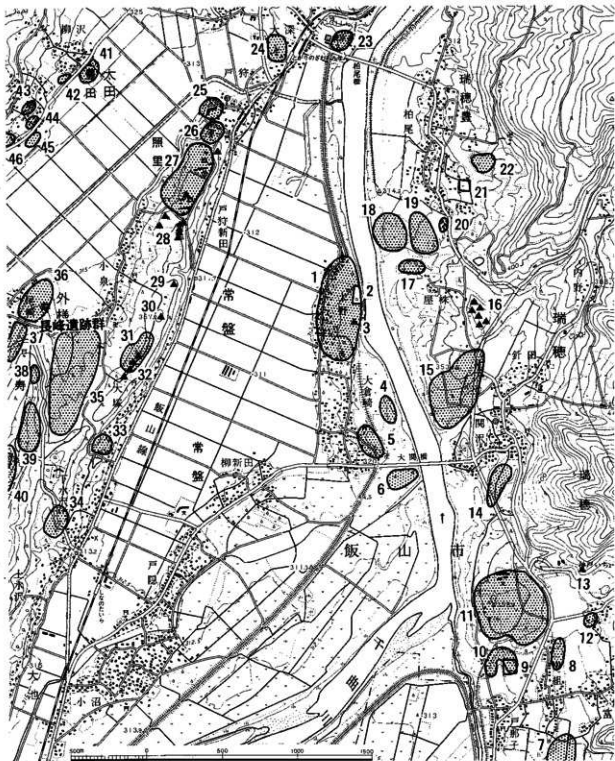


図4 周辺の遺跡分布図(1:25,000) 平成2年修正測量

1. 上野 2. 大倉崎館 3. 上野古墳 4. 大倉崎Ⅱ 5. 大倉崎 6. 瀬附 7. 尾崎 8. 城の前 9. 犬飼館
10. 千苅11. 宮中 12. 猿飼田 13. 飯綱堂古墳 14. 開沢 15. 太子林 16. 向峰古墳群 17. 屋株 18. 日焼 19. 南原
20. 塚ノ沢 21. 柏尾南館 22. 上ノ原 23. 真宗寺 24. 岡峰 25. 旧照里小学校 26. 光明寺前 27. 照丘
28. 照里古墳群 29. 30. 茶臼山古墳群 31. 大塚 32. 大塚古墳群 33. 水沢 34. 下水沢 35. 小泉 36. 柳町
37. 山崎 38. 尾崎南 39. 東長峰群 40. 西長峰 41. 柳沢A 42. 柳沢B 43. 鶴屋敷 44. 桜沢 45. 小境 46. 押出

〈遺構・遺物の検出概要〉

旧石器時代 石器集中地点5箇所・玉髄製品など。

縄文時代 溝状土坑、深鉢形土器など。

弥生時代 中・後期の竪穴式住居址、木棺墓群、掘立柱建物、甕・壺など。

古墳時代 前期の竪穴式住居址・方形周溝墓（北陸色の極めて強い土器を伴っていた）ほか。

平安時代 住居址、土坑墓、鍛冶遺物など。

平成2（1990）年 この丘陵のほぼ中央を東西に横断する市道7-335号線の拡幅改良に伴う調査がなされ、旧石器時代のナイフ形石器、石核、弥生時代の掘立柱建物や弥生式土器、平安時代の竪穴式住居・土師器などが検出された。

平成4（1992）年 戸狩工業団地への取付道路として、市道7-334号線の拡幅改良工事並びに国道117号線バイパス拡幅工事のための発掘調査が実施された。ここにおいても旧石器・縄文・弥生・平安各時代の遺構・遺物が検出されている。

平成5（1993）年 国道117号線環境整備事業（チェーン着脱場建設）に伴う調査を行い、旧石器時代の標群、弥生時代の木棺墓群、平安時代の竪穴住居址や桁行をそろえて並ぶ大型掘立柱建物址などが検出された。

平成6（1994）年 揚水機場建設に伴う調査がなされ、旧石器時代の礫群、弥生時代後期の竪穴住居址、平安時代の大型掘立柱建物址や溝が検出された。特に平安時代の木棺墓は灰釉陶器の壺・皿を副葬する2段掘りの立派なもので注目される。

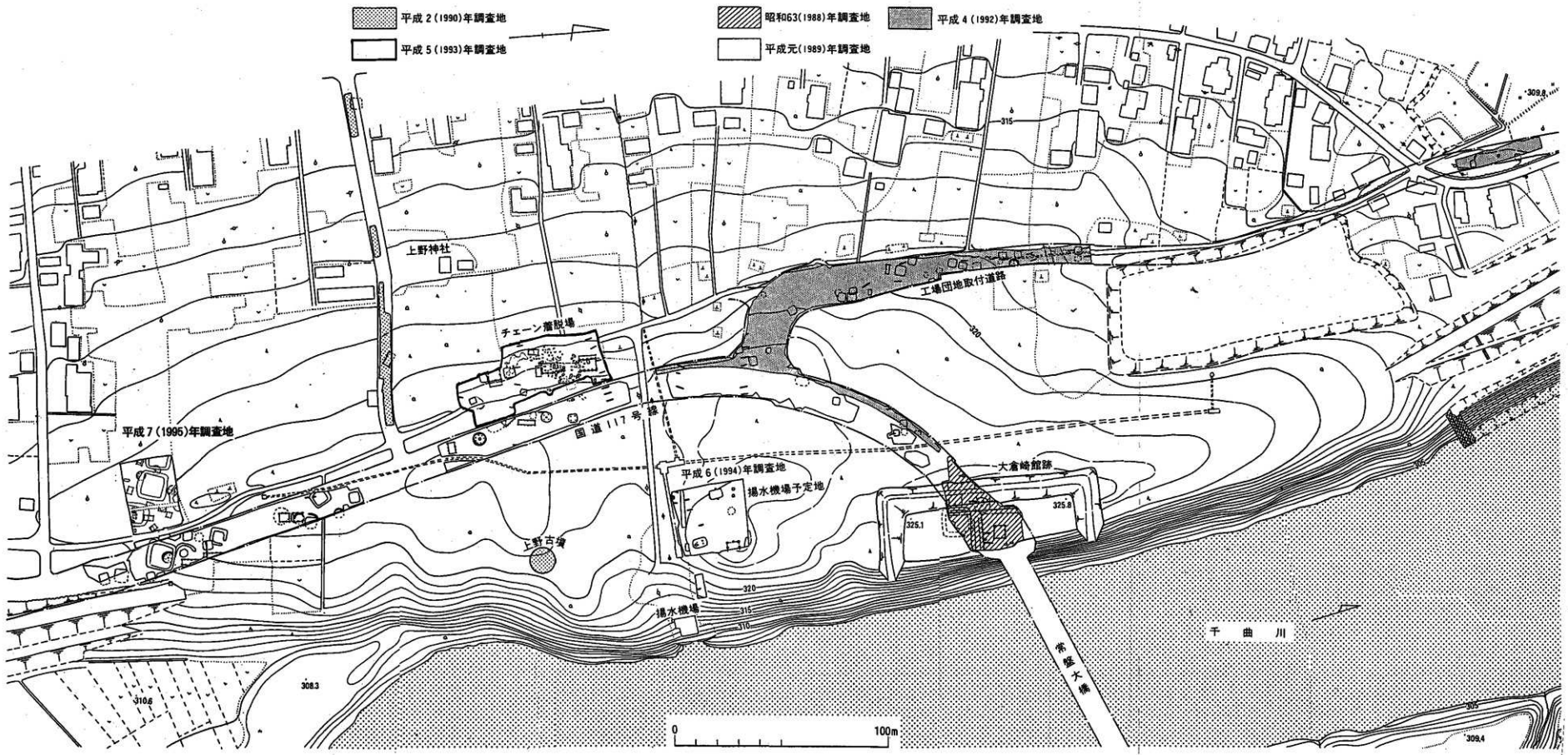


図 5 調査地周辺の地形 1 : 1,500

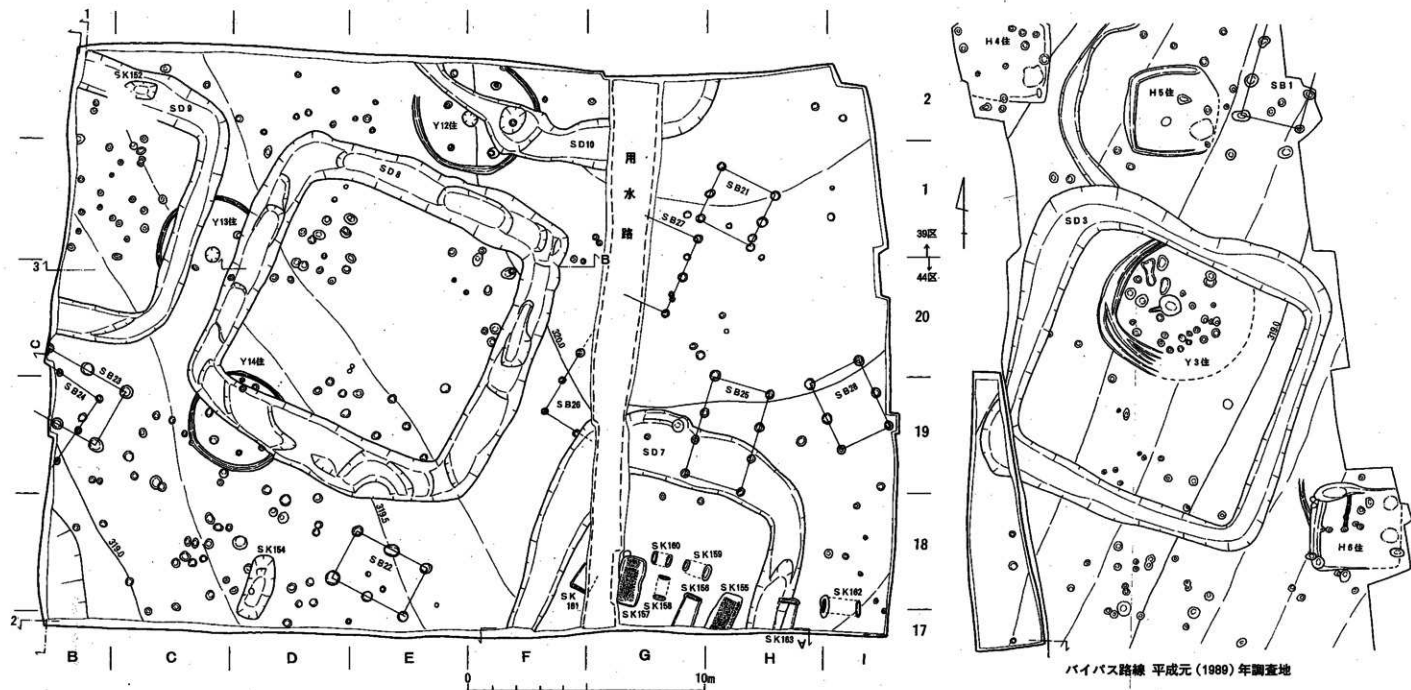


図6 調査地全体図 1:160

第3章 旧石器時代

1 遺物の出土状態

A 層序と文化層

1) 過去における土層調査

上野遺跡が立地する丘は上野・大倉崎丘陵と呼ばれ、比較的新しい年代に離水したと考えられている。平成元年の調査時に段丘形成年代について調査を実施し、その成果が明らかにされているので（早津・小島 1990）、それを引用しながら触れていくことにする。

上野・大倉崎丘陵の最高位である館跡地点での柱状図によれば（図7 A）、下位から礫層（層厚2 m以上）→砂とシルト～粘土の互層（約4.5 m）、褐色風化テフラ層（20～30 cm）→黒色腐食土層（数10 cm）となっている。そして、褐色風化テフラ層内より約2.5万年前の始良Tn火山灰（AT）が混交した状態で産出する。また、旧石器第5地点の層序では（図7 B）、褐色風化火山灰層の下位には乾裂とみられる不規則な割れ目がみられ、AT層は褐色風化テフラ層の下部やその下位の乾裂の割れめの間により多く含まれる傾向があり、褐色風化テフラ層の下限にATの降下があったことをしめしているとされている。

以上のような状況により、第5地点の離水時期は、水成堆積物であるシルト～粘土層の上に堆積される乾陸成の褐色風化テフラ層の下限の年代だということになり、ATの降下直前、約2.5万年前ころと推定されている。第5地点の石器群は玉髄製の搔器が多量に出土しこれに尖頭器が伴うもので、層位的には黒色土直下の褐色風化テフラ層最上部で出土している。平成元年度調査時における旧石器時代石器群の出土層位はすべてテフラ層最上部であった。なお厳密には、テフラ層の上位に数cmの漸移層が認められ石器群はこの層からテフラ層上部にかけて出土している。

2) 今回の調査区の層序

今回の調査地点は、第5地点に近接しており、基本層序も同様である。すなわち褐色風化テフラ層の最上部が文化層として捉えられ、指標テフラのATが褐色風化テフラ層下部に位置づけられるとすればかなりの隔たりがある。また、過去における旧石器時代文化層と今回の出土層準とは一致しており、層位面からは相違しない。

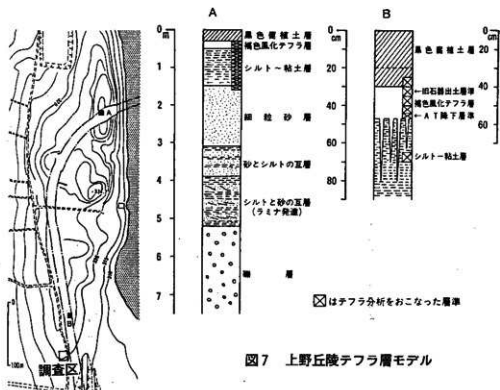


図7 上野丘陵テフラ層モデル

B 地点分布

今回の調査区においては、壑穴住居址・掘立柱建物址・方形周溝墓・木棺墓など弥生・古墳時代の遺構が密集して発見されており、旧石器時代の遺構・遺物はそれらによって影響されなかった部分および影響を受け攪乱された状態での出土であった。したがって、ある程度のまとまりを地点分布として捉えたが、本来的な出土状態とは異なり、かなり変化しての出土状態と考えられる。

上野遺跡では、今までの発掘調査において確認した旧石器時代の遺構について、遺物群のまとまりを第○地点、雑群を○号雑群として通し番号で呼称してきた。今回も基本的にそれを踏襲するが、前記したように攪乱を受けていることから大まかなまとまり（集合＝クラスター）として捉え、第○地点として雑群も含めて報告することとした。今回確認されたまとまりを第10地点～13地点とした。

(1) 第10地点（図9）

44G・H-18・19に位置する。SD7（第6号方形周溝墓）によって大半が破壊されており、全体でひとつのまとまりを有するものかどうかについても不明である。まとまりは礫を中心として散在して出土しているが、安山岩製の剥片も若干出土している。平成6年度の確認調査においてはG・H-19区において8点の礫のまとまりが確認されており、今回の出土位置と一致するところから十数点以上の礫で構成されていたことになる。

なお、第11地点にも近接しており、本来的にはひとつのまとまりであったかもしれない。

(2) 第11地点（図11）

44H・I-18・19に位置する。SB28・SD7・SK162など一部破壊されているが、おおむね8×6mの楕円形を呈するものである。北端には約35点の礫で構成される規模1.5×1mの礫群がある。この礫群を構成していたと思われる礫が南側の石器群の中にも分布することから同一地点として把握することとした。

石器群は約30点発見されている。石核・石器・剥片などで構成されている。石材はすべてが安山岩である。

(3) 第12地点（図12）

44I-20に位置し、9点の礫によって構成されるまとまりである。第11地点内雑群とは明確に分離されているため（図8）、本稿では分離した。ただし、その間にSB28が構築されているため同一であった可能性もある。接合関係は認められなかった。

(4) 第13地点（図13）

39G-1および44G-20に位置する。西側に用水暗渠が構築されており破壊されている。また、分布域内にはSB21・27のピットがあり、部分的に壊されている。

遺物は約30点の安山岩製剥片で構成されている。製品と考えられる石器は認められない。

(5) その他の地点

前記のように地点として捉えられるもののほかに、方形周溝墓等の遺構覆土より混在した形で旧石器時代の石器が出土している。それらには頁岩・玉髓・黒曜石製の製品が多く含まれており、前記地点出土石材が安山岩が多く占めることと対称的である。これらが今回確認された第10～13地点との関係については明確でない。

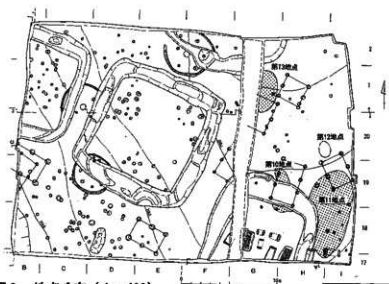


图8 地点分布 (1:400)

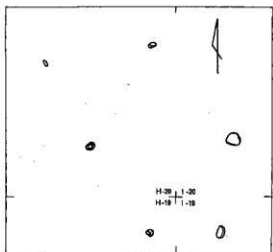


图9 第10地点 (1:40)

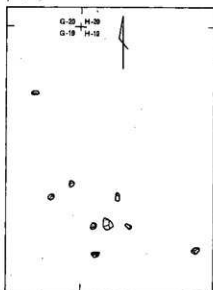


图10 第12地点 (1:40)

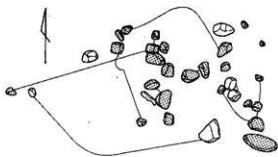


图11 第11地点内碟群 (1:40)

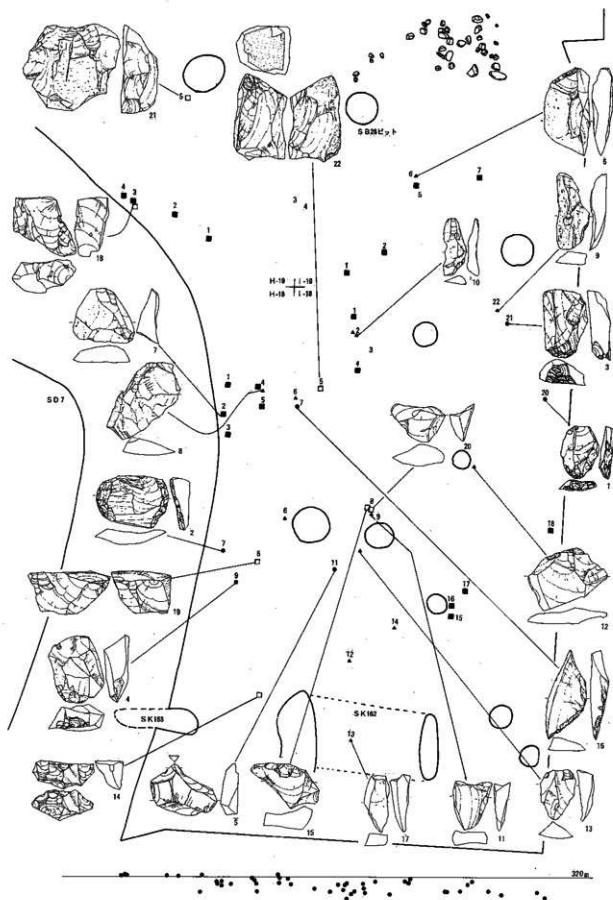


図12 第11地点遺物分布図（1：40）（地点の数字は遺物台帳番号、石器の番号は実測図掲載番号）

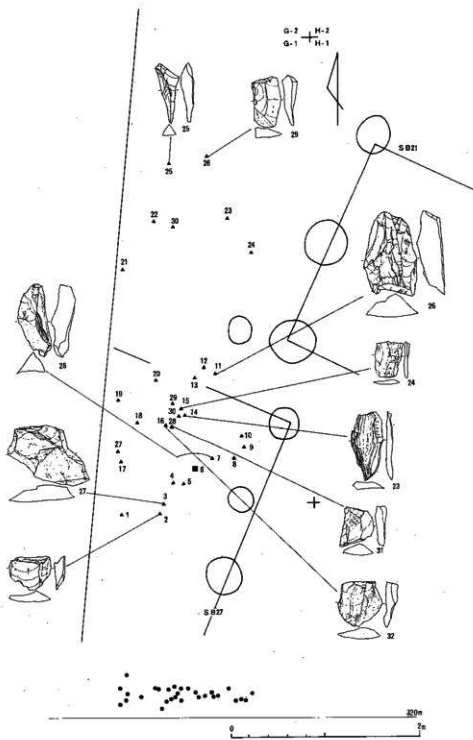


図13 第13地点遺物分布図（1：40）（地点の数字は遺物台帳番号、石器の番号は実測図掲載番号）

2 遺物

A 第11地点出土石器 (図14~16図1-25)

(1) 掻器 (1~4)

剥片の端部に厚形整形を施した石器で、4点出土したがいずれも安山製である。1は、打面調整の施されない石核から作出された縦長剥片を素材とし、先端部に厚形整形を施したエンド・スクレイパーである。2は横長の剥片を用い、両縁辺に刃部を作出したもので、複刃掻器と呼ばれているものである。下端は節理面で破損しているが、加工状況により素材の段階からの形態と考えられる。3は横長の剥片の一端を折り取り、縦長にしてその端部に刃部を作出している。刃部には再生を意図した加工がみられ、オーバーハングしている。4も不定型な剥片を素材とし、基部側の一端に刃部を作出している。素材の打面は自然面をとどめている。

(2) ドリル (5)

微細な加工のため、これを二次加工とするか否かについては躊躇する面もあるが、素材を両端対称に1回の刃部作出と思われる加工が認められることからドリルと認定した。安山岩製である。

(3) サイド・スクレイパー (6・16)

6は、自然面が残されているもので、基部側には明確な加工痕がある。16は旧石器時代であるかや疑問であるが、出土位置等については他の旧石器時代石器と相違するところはない。欠損しており、全体の形態は不明である。いずれも安山岩製である。

(4) 石斧 (20)

両刃状の鋭い刃部をもった打製石斧と考えられるもので、刃部のみで全形が不明のため明確ではない。ここでは、石斧の可能性が大きい石器としておきたい。石質はやや軟質であるが安山岩であろうと思われる。

(5) 剥片 (7~13・17・18・23~25)

石核調整剥片や目的剥片などがあるが、いずれも刃器状剥片あるいは石刃などと呼べるような縦長剥片は認められない。打面調整は多くの場合行われている。

(6) 石核 (14・15・18・19・21・22)

石核と考えられるのは6点であり、いずれも安山岩製である。14は小さな残核で、一見舟底状の形態を呈している。最終的に作出された面が正面右端部に認められるが、長さ約2cm、幅約1.8cmの小型の剥片と思われ、石器のブランクとなり得たか疑問である。15・18は石核の一部であろう。19は円錐形と円筒型の間形態を取り、片方の縁辺より順次剥片剥離を行う技法で、石刃技法の範疇で捉えられる。何回も打面作出を行ったためかやや短めの剥片が作出されている。そのためより長い剥片を目的としたのか、かなり鋭角な角度で作出している剥離面も存在している。21は加工が少なく、母岩の形態が残されている。節理などの亀裂があり、石器作出石材としては不適であったためか、ブランクが作出された形跡はない。22は円筒形を呈する石核であるが、打面調整はなされず、また、ほとんど剥片も作出されていない。

B 第13地点出土遺物 (図1626~32)

(1) 剥片 (26~32)

出土したすべてが剥片であり、安山岩製である。26は大型で重量のある剥片で、先端部側は節理面で欠損する。27ハ、扁平な不定型剥片で、裏面先端部にわずかな加工痕が認められる。28は断面三角形で石核後付剥片とすれば、初期の調整剥片と考えられる。29~32はやや寸詰りの縦長剥片で、打面の観察できる29・32は打面調整がなされている。

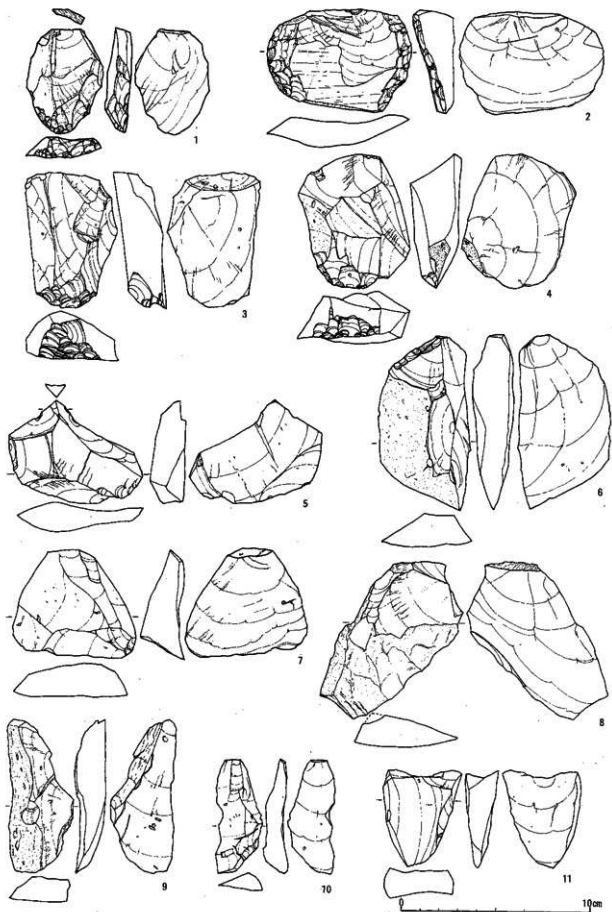


図14 旧石器時代の石器1 (第11地点 1 : 2)

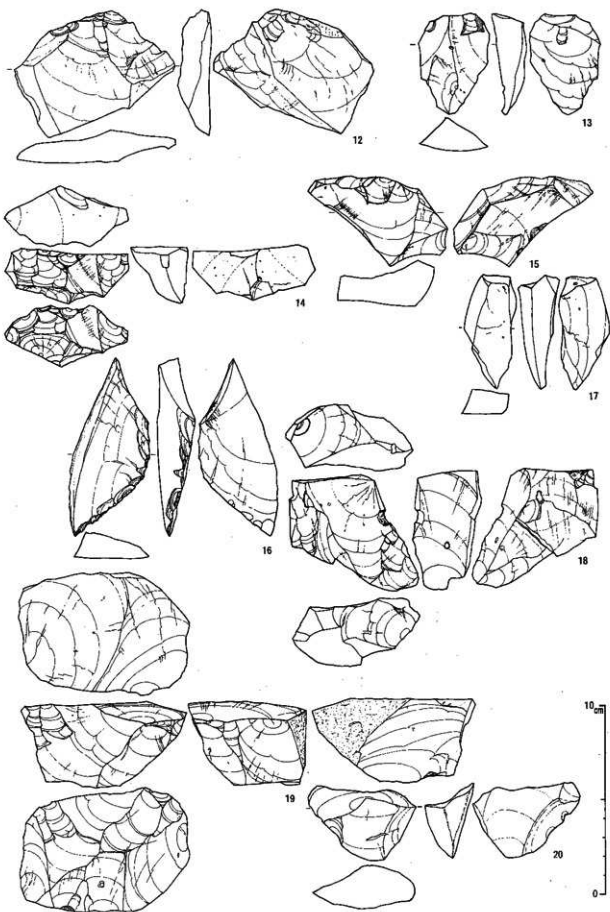


図15 旧石器時代の石器2 (第11地点 1 : 2)

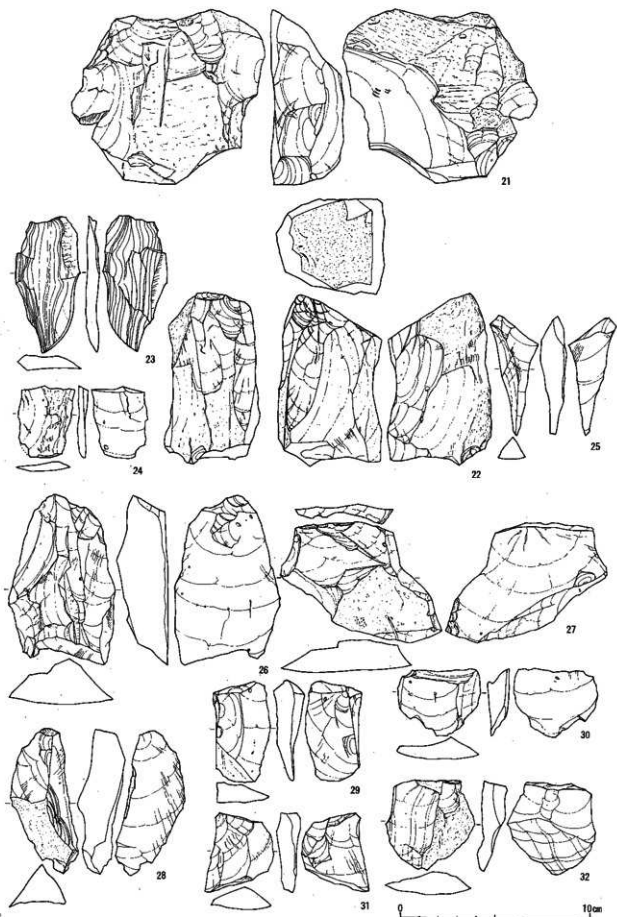


図16 旧石器時代の石器3 (第11地点 21・22 第13地点23~32 1 : 2)

C その他の地点出土石器 (図17)

弥生・古墳時代の遺構覆土やグリットで単独的に出土したものを一括して報告する。各地点出土石器がほとんど安山岩であったのに比較し、それと相反するように黒曜石や玉髄・頁岩などの製品が多く出土している。なお、図示していないが他に安山岩製の剥片も多く出土している。

(1) 掻器 (33~37)

いずれも縦長剥片を素材としたエンド・スクレイパーで、33と37が玉髄、他は黒曜石製である。33は打面調整のされた石核より剥離された縦長剥片を用い、端部に入念な加工を施して刃部を作出している。先端部はややオーバーハングする。縁辺の整形は右側縁が基部まで、左側縁はほぼ中央まで施される。34~36は基部側を破損している。34は平行な縁辺には加工を施さず、先端部のみに急斜な刃部作出加工を加えている。37も34とほぼ同様な石器形態であるが、刃部の形状は丸みを帯びている。36は周縁部及び端部に加工を加える。37は分厚い先端部に急斜な加工を施して刃部としている。基部側の両縁辺の一定の場所にはそれぞれ細かな剥離痕が観察でき、これは着柄部との関係があるのではないかと推定される。

(2) 削器 (38~42)

縁辺に加工を施して刃部とした石器で、サイド・スクレイパーと呼称されるものを一括した。38は正面に表皮を多く残す剥片を素材とし、片側に細かな加工を加えて刃部としている。39は基部側を欠損するが正面左側縁先端部側に刃部を作出している。一部は焼けたためか白濁色となっている。40は左側縁が欠損している。41は安山岩製で、平面三角形を呈する。鋭い先端部に加工を施している。42は基部側を欠損する。左側縁に自然面を残し、鋭い右側縁に浅い加工を施して削器としている。

(3) 彫器 (43)

ファシットを有していることから彫器とした。下端部にスクレイパー様の加工を施して刃部とし、上端部にはソケット状の形態を意図するように何回かの加工を施している。正面左側の加工は、素材に対して約90度の角度で槌状の剥離を加えている。調整のためのファシットと理解したい。頁岩製である。

(4) 小剥離痕を有する剥片および剥片 (44~54)

「小剥離痕を有する剥片」とは意識的に二次加工とは認められない微細な剥離痕をとどめ、使用により残された想定される剥片をいう。こうした剥片は、黒曜石に多く認められる (44・45・48・51・53)。46は安山岩、47は頁岩、52は玉髄、他は黒曜石である。

D 小括

今回の調査によって検出された石器群について、二点ほど所見を述べることにする。

ひとつは、地点として捉えた石器群とその他の地点 (二次的に移動して出土した) 出土石器との関係である。地点出土の石器群は安山岩で占められ、第11地点出土の4点の掻器以外特徴的な石器は見当たらない。一方、その他の地点からは、黒曜石や玉髄・頁岩といった豊富な石材と、刃器技法により作出された掻器や削器、縦長剥片など指標的な石器が多い。11地点出土の掻器は、縦長剥片を用いたものというより不定型な剥片を加工して掻器にしたという感が強い。したがって、石材の差や剥片剥離技術からみれば両者には大きな隔たりを感じてしまうのである。この点については、かつて何回か触れてきているが、以下の理由により現在のところ同時期の所産であると考えておきたいと思う。

上野遺跡を代表する石器群は第4地点出土石器群である (注1)。玉髄製の掻器 (エンド・スクレイパー) を多出し、尖頭器を伴う石器群である。他の石材には安山岩や黒曜石などがあり、剥片はすべて安山岩製であるが、製品は逆に少ない。その少ない安山岩製の掻器をみると優美な縦長剥片を用いているものも存在するものの、第

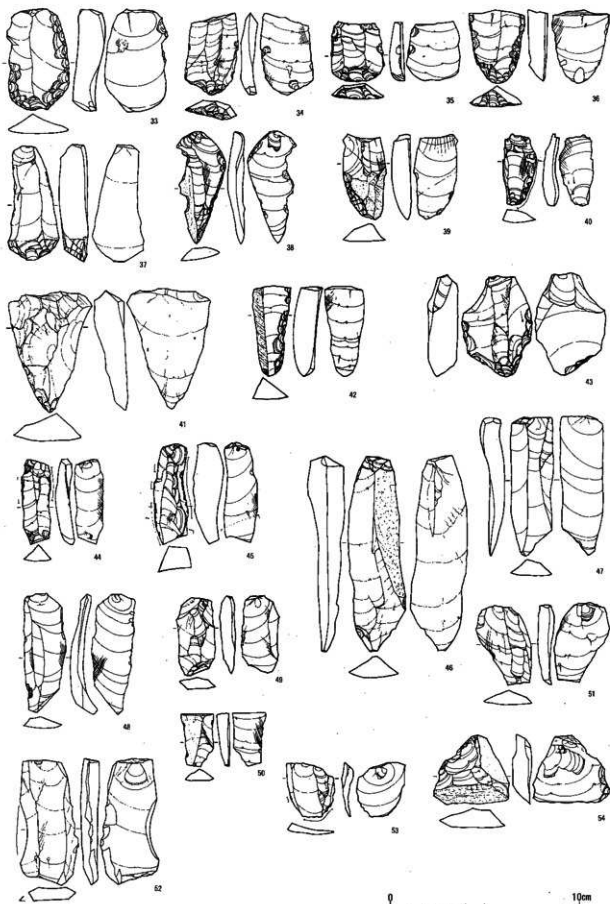


図17 旧石器時代の石器4（その他の地区出土 1：2）

11地点出土採器のように不定型な剥片を用いたものも存在している。そして、安山岩製はむしろ不定型な剥片が多いのが実態である。第4地点ではそれら各種の石材がまとまって出土している。したがって、石材選択に集団の差があるのか否かについては保留しておくが、剥片剥離の差は石材によるところが大であって、時間的な差ではないものと考えられる。

二つ目は、石器石材の遺跡内への搬入状況についてである。今まで数次に亘る調査によって、旧石器時代の地点分布や石器が多く確認され、それと共に使用石材が地点毎に相違する場合や製品及び剥片の頻度に大きな差があることがわかってきた。今回の調査においてもそうであるが、石器製作を頻繁に行った形跡が認められるのは安山岩であり、黒曜石・頁岩・玉髓についてはほぼ製品のみである。このことについては、かつてトノ池南遺跡において安山岩と頁岩について分析を行ったことがある(注2)。すなわち、飯山地方に産出する安山岩については、転石をそのまま遺跡内に持ち込み、石核調整から剥片作出まで一貫して行われるが、他の石材一特に頁岩・玉髓については製品で搬入されることが一般的であったと推定されるのである。

これら二点について今後とも究明したいと考えている。

注1 1990 飯山市教育委員会 『小沼湯滝バイパス関係遺跡調査報告Ⅱ-上野・大倉崎遺跡』

2 1991 飯山市教育委員会 『国営飯山農地開発関係遺跡調査報告Ⅰ-新堤・トノ池南遺跡』

第4章 弥生時代

1 遺構

A 竪穴住居址 (図18)

中期の竪穴住居址が3基、いずれも方形周溝墓周溝と重複して検出されている。3基とも直径約5m以下の小型住居址である。

Y12号住居址

E・F-1、2区にあり、SD10に切られる。プランは北西-南東が5.2m、北東-南西が5.0mの若干偏平な円形である。土層観察から黒色土から掘り込まれていることがわかり、深さは確認面から約20m。西半分は試掘調査時に地山の黄色粘質土面まで重機で掘削した後の検出のため浅く、周溝も北の一部は検出していない。

中央ビットP1はすり鉢状に浅く掘り込まれている。土器が出土した他に、炭・焼土等の顕著な出土はない。

主柱穴はP2～P5の6本で、深さ約60cmをはかる。円形には配されず、東西にせまい六角形を呈している。棟方向を意識しているのかもしれない。

埋土から大破片の土器が多く出土している。

Y13号住居址

C・D-20・1区にあり、SD8・SD9に切られる。南の3分の1は昨年試掘時の重機による掘削で削平され検出していない。

円形プランで、周溝から推定される規模は直径約4.8mとなる。深さは確認面から約20cm。

中央ビットP1はすり鉢状に掘り込まれ、底は堅く締まり赤く焼け、底に接して約2cmの厚さで炭が堆積していた。炉として使用されたかの。

主柱穴はP2～P4の3本が検出されている。深さは50～60cm。配置をみると4本柱であったかのように並んでいる。柱間は1.85m。

多量の土器が埋土中から出土している。また西側周溝近くを中心に安山岩の剥片およびチップが床面直上から多量に出土している。

Y14号住居址

C・D-19・20区にあり、SD8に切られる。北西-南東が4.2m、北東-南西が4.0mの若干楕円に近い円形プランで、深さは確認面から約13cm。

主柱穴はP1～P7の7本が考えられるが、P1・P2は外側に寄りすぎている感がある。深さはP2・P5が20～25cmと浅く、他は50～70cmと深い。配置をみると1～1.2m間隔で円形に並ぶ様にみえるが、浅いP5をはずせば、Y12号住居址のように棟方向を意識した配置にも復元できる。

埋土中からの遺物の出土は少ない。

B 掘立柱建物址 (図19)

徹基にはすべてが弥生時代に比定できる根拠がないが、柱穴のプランが円形で、当遺跡の平安時代の掘立柱建物址の柱穴プランが隅丸方形であることと異なること、古墳時代の方形周溝墓と重複するものがあること、規模が似ていることなどの点から、今回検出した掘立柱建物址を一応弥生時代のものと比定しておいた。

S B21

H-1区にある。主軸を丘陵尾根方向の北北東-南南西にとる1間(2.6m)×2間(2.5m)の建物址である。

プランは各隅が90°にならずややいびつである。柱間寸法は東西2.65mと2.40m、南北が東側柱列が北から1.25mと1.15mをはかる。柱穴プランは円形で直径30~40cm、深さは検出面から30~50cm。弥生時代中期の土器小片が出土している。

S B22

D・E-18区にある。主軸を丘陵尾根方向に直交する1間(2.25m)×2間(3.4m)の建物址である。桁行の柱間寸法は1.7m間隔である。柱穴プランは円形ないし楕円形で直径約50cmとやや大きい、深さは検出面から20~30cmと浅い。出土遺物はごく少ない。

S B23

B・C-19・20区にあり、西部は調査地外へ延びる。主軸を丘陵尾根方向に直交する、1間(2.6m)×2間(3.8m)以上の建物址である。桁行の柱間寸法は1.9m間隔である。柱穴プランは円形で直径50~60cmをはかりやや大きい。深さは検出面から約40cm。S B24と重複する。

S B24

B-19区にあり、西部は調査地外に延びる。主軸を丘陵尾根方向と平行すると推定される1間(2.0m)×2間(3.2m)以上の建物址である。桁行の柱間寸法は1.6m間隔である。柱穴プランは円形で直径25~35cmと小さい。深さも検出面から25cmと浅い。

S B25

G・H-19区にあり、方形周溝基周溝S D 7と重複するが、切り合い関係は明らかではない。主軸を丘陵尾根方向に平行する1間(2.5m)×3間(4.4m)の建物址である。四隅は直角とならず少しずれている。桁行の柱間寸法は東側柱列が1.43mの等間隔で、西側柱列は北から1.65m、1.25m、1.5mと不揃いである。柱穴プランは円形で、直径35~40cm。深さは検出面から25~40cmだが、西側柱列の1本のみ70cmと深い。

S B26

F-19・20区にあり、東部は用水路に切られている。主軸を丘陵尾根方向と平行する1間(1.8m)×2間(2.9m)以上の建物址である。桁行の柱間寸法は南から1.5mと1.4m。柱穴プランは円形で直径約30cm。深さは検出面から20~30cm。

S B27

G-20・1区にある。西側柱列は用水路に切られているものとし、1間(2.2m以上)×2間(3.5m)の主軸を尾根方向にもつ建物址と推定した。桁行の柱間寸法は1.75m等間である。柱穴プランは円形で、南端の1個のみ隅丸方形の上段部をもつ。直径は30~40cm、深さは検出面から30~40cm。

S B28

H・I-19・20区にある。主軸は北北西から南南東で、他の丘陵尾根方向に主軸をとるものとは「ハ」の字形を呈する。1間(2.3m)×2間(3.1m)の建物址で、桁行の柱間寸法は北から1.6m・1.5mである。柱穴プランは円形で直径約40cm。深さは検出面から25~40cm。

C 木棺墓・土塚墓(図20・21)

調査地東南部で木棺木口板を立てたと推定される穴(以下木口坑)をもつ木棺墓群が検出されており、少し離れたD-18区で土坑墓が1基検出されている。確実に遺構に伴う遺物は検出されていないから、当遺跡での類別から弥生時代中期のものと考えている。竪穴住居址や竪立柱建物群と同時期とすれば、両者は明確な境界をもたずに共存していたこととなる。

(1) 礎床木棺墓

木棺墓群内で2基の礎床をもつものが検出されている。礎床である点をのぞけば、礎床をもたない木棺墓との

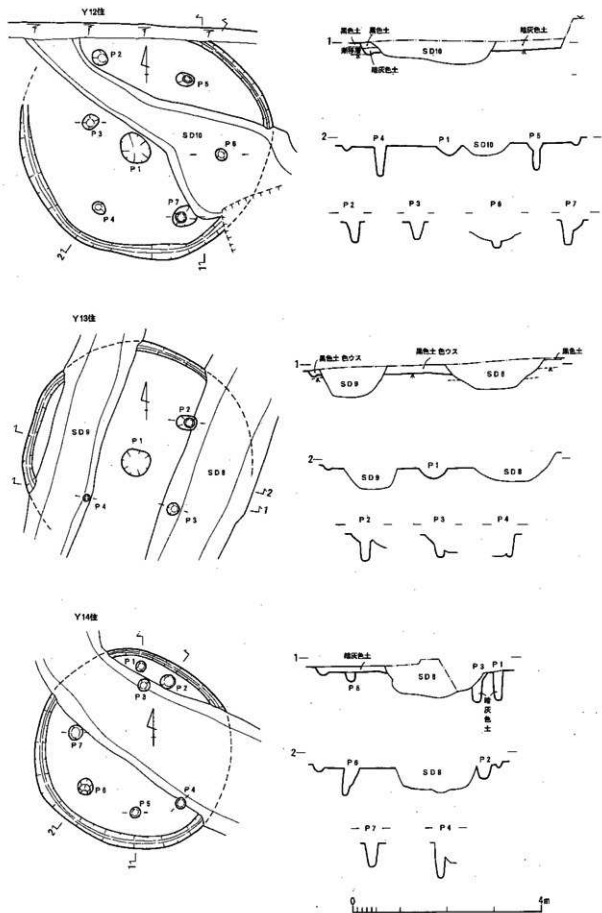


図18 弥生時代の竪穴住居址 1 : 80 水糸レベル Y12住320.20 他は319.6

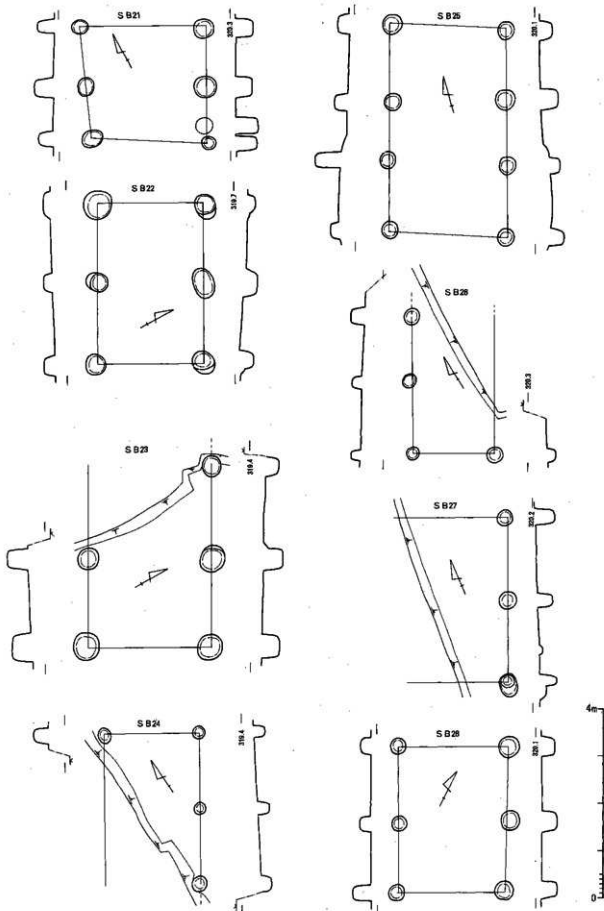


図19 弥生時代の掘立柱建物址 1 : 80

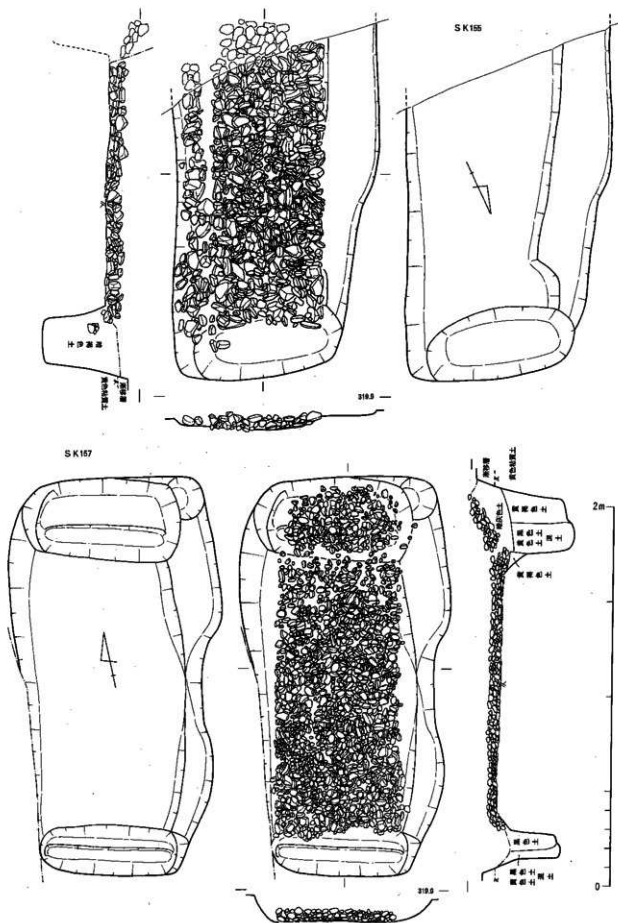


図20 弥生時代の石床木棺墓 1 : 20

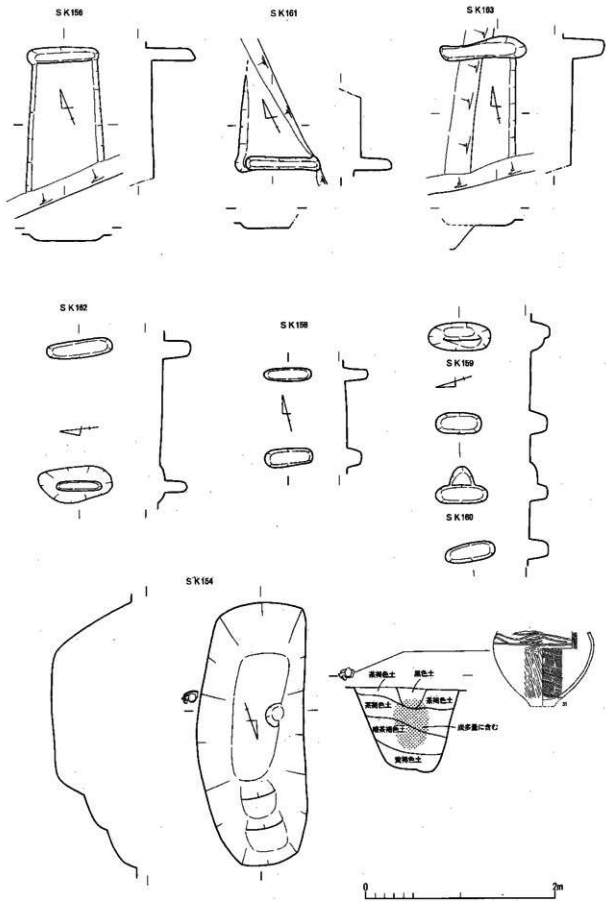


図21 弥生時代の木棺墓・土塚墓 1 : 40

差はない。

SK155 主軸が丘陵主軸に平行する隅丸長方形プランの木棺墓で、南端は調査地外へ延びる。墓坑掘り方の規模は長軸190cm以上、短軸は90～110cmで推定頭位の南がより広い。

礫床上面までの深さは、検出面の漸移層から5cm未満と浅い。南壁の土層観察から黒色土から掘り込まれていることがわかり、深さが約10cmとなるものの棺を埋めるには浅すぎる。土まじゅう様の盛土があったものと考えている。

礫は、東北部がやや乱れているが長方形にきっちりと敷かれており、棺の内側に敷かれたかのようなものである。東側には側板を置いた痕跡と推定される礫のない所があり、その外側にも礫を置く。

中央の礫床の範囲は幅58cmで、確認長150cm。推定頭位の南が広いわけではない。礫は2～3段敷かれ、叩き締められており、最下段の礫は坩底にくい込んでいた。

礫は河原石で、直径5～15cm。後述のSK157のものより大ぶりである。

調査地外の南端を調査終了後確かめてみたところ、SK157と同様状況に礫が高まっていた。

北端で礫床の下から木口坑が検出されており、礫床であることをのぞけば礫床のない木棺墓と形態は等しい。木口幅を木口坑下端で測ると礫床幅にほぼ等しい60cmである。

副葬品・供献品ともに検出されていない。

SK157 主軸が丘陵主軸と平行する隅丸長方形プランの木棺墓で、墓坑西端は用水路に切られている。墓坑掘り方の規模は長軸210cm、短軸は100～110cm。推定頭位の北が少し広い。検出面から礫床上面までの深さは約10cm。

礫床は145cm×65cmの長方形で、その北に枕状の高まりがある。そこまで含めた長さは180cm。枕状の礫の高まりは木口坑との直上にある。ただし土層観察から、木口坑を埋めた後に枕状の礫を敷いたことがわかる。北側は木口板を立てなかったのであろう。木口坑下端幅は礫床幅とほぼ等しい65cmである。木口坑心々間は168cm。

礫は川原石で、直径5cm未満がほとんどである。強く叩き締められていることもSK155と同じ。

副葬品・供献品ともに検出されていない。

(2) 木棺墓

SK156 主軸は丘陵主軸と平行する。南は調査地外へ延びる。確認長157cm、幅70～82cmで南がより広い。北の木口坑は下端幅62cm、深さ50cm。

SK181 主軸は丘陵主軸と平行する。北東部は用水路で切られている。確認長100cm、幅90cm。南の木口坑は下端幅65cm、深さ35cm。

SK183 主軸は丘陵主軸に平行する。南は調査地外へ延び、西は方形周溝墓周溝SD7に切られる。確認長140cm。北木口坑下端幅は77cm。

SK182 主軸は丘陵主軸に直交する。木口坑のみの検出で、木口坑心々間は145cm、下端幅は東が58cm、西が42cm。西の木口坑は2段に掘り込まれている。

SK158 主軸は丘陵主軸に平行する。木口坑のみの検出で、木口坑心々間は90cmと小さい。幅は両者ともに42cm。

SK159-180 4基の木口坑が丘陵主軸と直交して並び、木口坑の組み合わせについては北端と北から3番目、南端と南から3番目の組み合わせも考えられるが、規模が小さいことから隣どうし組み合わせものと考えた。

SK159は東側のもので、木口坑心々間が96cm、下端幅は東が30cm、西が38cm。

SK160は西側のもので、木口坑心々間が64cm、下端幅は東が44cm、西が42cm。

(3) 土塚墓

D-18区から1基検出されている。供献品と推定される土器が東肩から出土しているので土塚墓と考えた。

SK154 主軸は丘陵主軸と平行する。隅丸長方形プランで長軸276cm、短軸約100cm。北は段をもって掘り込ま

れている。深さは検出面から85cm。埋土は黒色土が最上部に一部認められるのみで、茶褐色土が主体となる。また1cm角未満の木炭が埋土中央部に集中していた。

東冨出土の土器は中期の壺で底部と肩から上を欠いている。

2 遺物

弥生時代の遺物は3軒の竪穴住居址およびその付近と、木棺墓群のあるG・H-18区を中心に出土している。

A 土器 (図22・23)

(1) Y12号住居址出土土器 (図22 1~15)

1・2は口縁の閉きが小さく、頸の細い壺である。文様は口縁端部の縄文と頸部の沈線のみでシンプルである。
3・4は懸垂文をもつ頸の太い壺である。4は図上復元のため頸部形態に多少の誤差があると思われるが、1・2とはプロポーシオンが大きく異なる。口縁部は受け口状になるタイプと思われる。頸部から胴上半部にかけて、沈線文、押し引きの爪形文、縄文、櫛描文、刺突文を飾る。

11~13は、頸部および胴部片で、11・12は横走る沈線文の区画の中に押し引きの爪形文、櫛描文を配する。13はやや特異なもので、へら沈線で波状文風の文様を描出している。

5・6は短く外反する口縁部と胴の張らない体部をもつ壺で、口縁端に縄文を、胴上半に櫛描羽状文をめぐらす。両方とも完成品に近く、口縁部を外に折り返すという特色がある。

7は口縁部が受け口状となる小型の壺で、口縁外面に縄文を、胴上半部に櫛描文をめぐらす。台付壺か。

8・9は口縁部に刻み目文をめぐらす壺である。8の形態は珍しい。

14は縦および横方向の櫛描直線文を交互に配する。15は縦方向の櫛描直線文と横方向の櫛描波状文を交互に配しその下に刺突文をめぐらす。

10は鉢ないし高環の坏部である。赤彩はなく、胎土も精良ではない。

(2) Y13号住居址出土土器 (図23 16~24)

16・17は壺で、大型の16には文様が密に施され、小型の17は文様がシンプルである傾向はY12号住居址に等しい。

18・19は口縁端部に縄文を、胴上半部に櫛描羽状文をめぐらす壺である。Y12号住居址例と基本的に等しい。

20~24は沈線と縄文による「工」字文風の文様や、波状文を描出する壺の破片である。21は受け口状の口縁部片で壺かもしれない。

(3) Y14号住居址出土土器 (図23 25~30)

Y14号住居址出土の遺物は総量が少ない。

25は唯一完形に近く復元された小型の無頸壺で縄文や押し引き爪形文で飾られる。口縁近くの相対する2か所に2孔の小孔がある。蓋を伴うものか。

26~29は沈線と櫛描波状文、刺突文を配する壺の破片である。

30は壺で口縁端外面に刻み目をめぐらす。

(4) その他の地点出土土器 (図23 31~39)

31は土坑墓SK154東冨から出土した壺で、底部を欠くか胴下半部は一周する。へら沈線による不規則な波状文をもつ。ていねいなミガキで器壁は平滑。

32~37は木棺墓群のあるG・H-18区出土品である。33~35は壺で、33は櫛描文を縦位に施した間に縄文を配

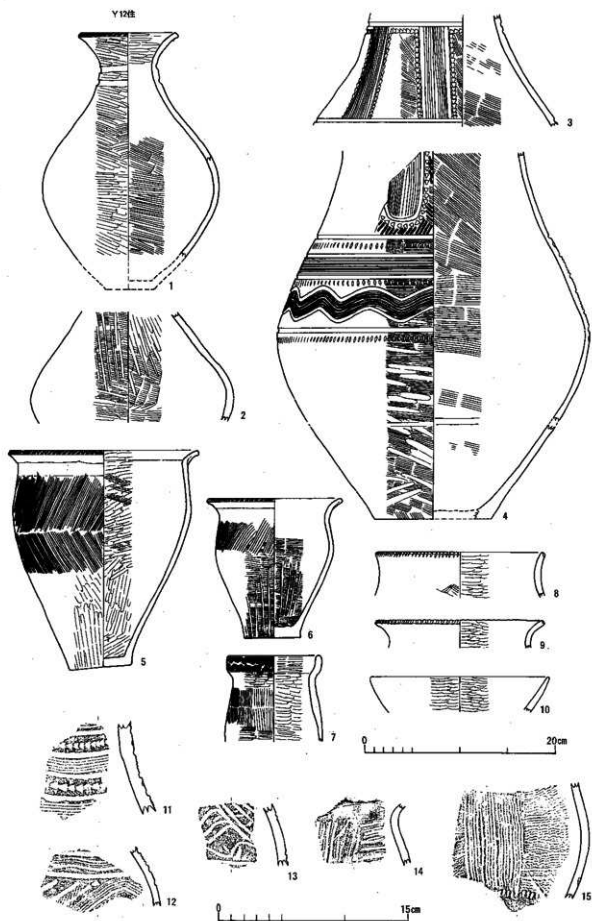


図22 弥生時代の土器 1 : 4

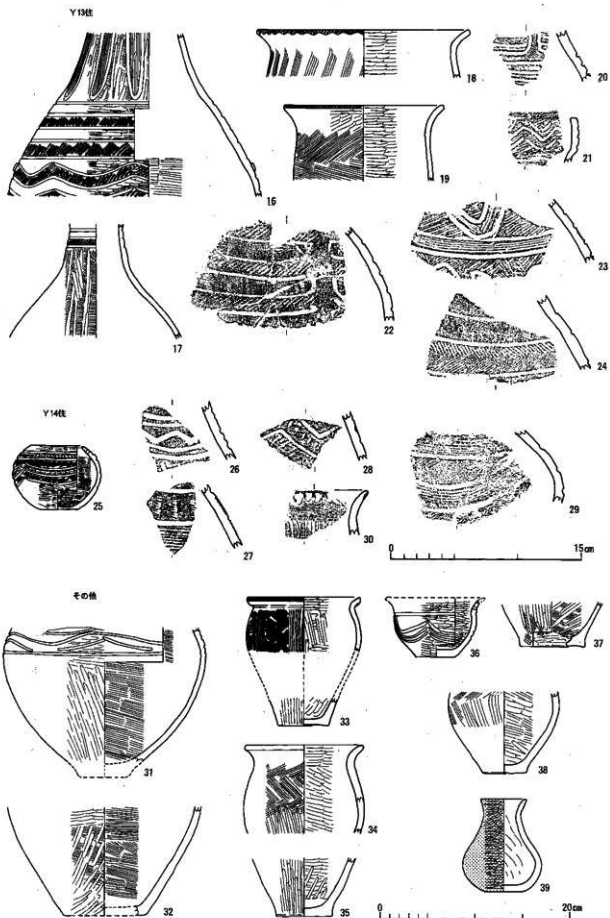


図23 弥生時代の土器 2 1 : 4

する。口縁部が外方に折り返される作りはY12号住居址例に等しい。

36は小型の鉢、34は焼成後穿孔のある底部である。

38はC-20区出土。櫛描羽状文をもつ甕で、胴がやや丸味を帯びている。

39はI-17区出土のミニチュアの甕で、完形品。外面は赤彩されている。

(5) 小鉢

述べてきた3基の竪穴住居址を中心とする土器群は共通する要素が多い。1つには細頸甕の文様が頸部のみであること。2つには太頸甕は懸垂文が目立ち、胴上半部を文様でうめていること。3つには甕の形態が、短く外反する口縁部をもち、胴部の張りが少なく直線的に底部に向かって細くなるということが共通し、口縁部を外に折り返すような技法も共通していること。そして施文も口縁端の縄文と胴上半に櫛描羽状文を配することが共通する。遺構群はほぼ同時期と考えられる。編年的には中期後半、栗林式の古い段階から新しい段階へ移行する頃と考えている。

B 土製品 (図24)

紡錘車が5点ある。1~3がY13号住居址出土、4がC-2区、5がF-19区出土。1が壺体部片、3が壺ないし甕の底部片を使用する。他は甕体部片を使用。5は未製品である。重さは1が10.4g、2が3.3g、3が11.7g、4が5.5g、5が14.5gである。

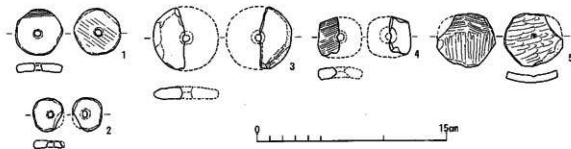


図24 弥生時代の紡錘車 1 : 3

C 石器 (図25)

石器には石鏃・打製石斧・磨製石斧・砥石・細み物石等があり、弥生時代竪穴住居址の他に方形周溝墓・グリット等から散在的に出土したものである。縄文時代に位置付けられる石器も含まれているが、大半は弥生時代の所産と考えられることから本項で一括して報告する。

(1) 石鏃 (1~9)

石鏃およびその未製品と思われるものを一括した。1は無茎で石材にはチャートを用いていることから、唯一縄文時代の石器と考えられるものである。全長22mm、幅14mm、厚さ3mmで、H-18より出土している。2は先端部および胴部から基部にかけて欠損する。安山岩製で、Y-12号住居より出土している。3は先端部と有茎の舌部をわずかに欠損する。現存長32mmを測り、安山岩製である。Y-13号住居出土。4・7~9は、石鏃の未製品と考えられるもので、いずれも安山岩を用いている。4はH-18、7はSD10、8はH-18、9はSD9よりそれぞれ出土している。5は完形品で、全長16mm、重さ1.8gを測る。安山岩製で、E-1出土。6は茎を欠損する。全体的にずんぐりした形態を呈し、厚さは6mmを測る。

(2) 打製石斧 (11, 12)

11は先端部側を欠損する。薄い平石を素材とし、表裏・基部側および右側縁の一部には自然面を残している。安山岩製で、Y14号住居址の出土である。12は、基部側及び先端部に自然面を残す。機能部の先端部は鋭角であるものの裏面側に若干の加工を施しただけにとどまっており、正面側の加工が認められないことから全体的には未製品であるように思われる。安山岩製でY-13号住居址の出土である。

(3) 縞み物石 (10)

砂岩製の河原石で、格別加工は認められない。全長11cmで、重量130gを測る。Y13号住居址出土。

(4) 砥石 (13)

所属時期は不明であるが、Y12号住居址の出土であり、弥生時代の砥石の可能性もある。不定型を呈し、断面三角形で数面の磨り面が認められる。砂岩製。

(5) 磨製石斧 (14)

刃部の一部のみで全形は不明であるが、おそらく大型給刃石斧と思われる。蛇紋岩製で、SD8より出土している。

なお、図示した以外多くの剥片が出土している。いずれも安山岩製であるが、中には旧石器時代の石核や剥片を再加工した痕跡も多く確認されている。それらはパティナにより明確に相違していることから判断されるものである。当該地区には旧石器時代の石器群も発見されており、その付近においての掘り起こしに際して発見されたものを再利用していたと考えられる。

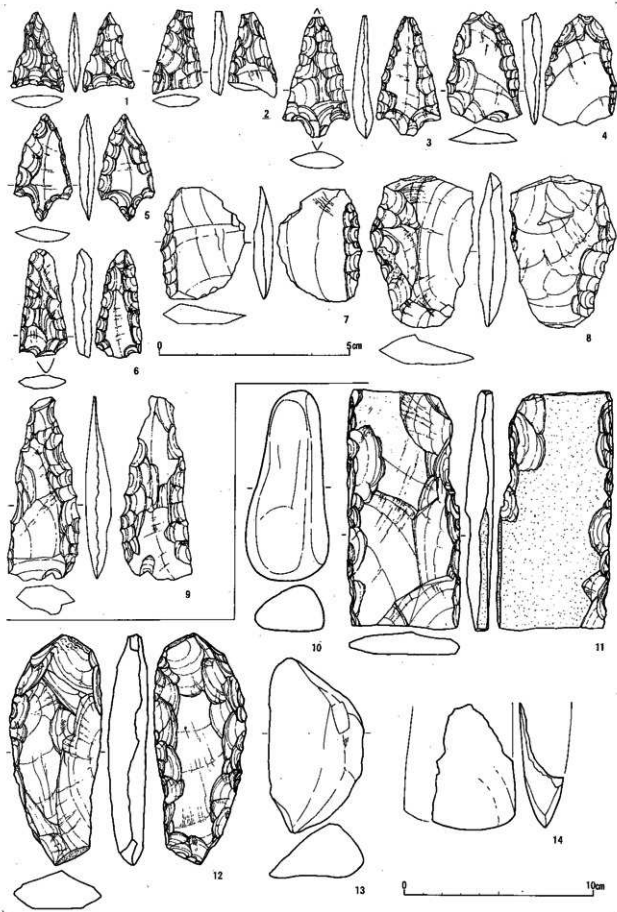


図25 弥生時代の石器 (1 : 1 1 : 2)

第5章 古墳時代

1 遺構

A 方形周溝墓(図6)

平成元(1989)年、117号線バイパス路線の発掘調査で4基の方形周溝墓を検出し、1~4号方形周溝墓と命名した。ただし主体部はなく遺構は溝でありSDで通番としている。その対応は1号方形周溝墓(SD1)、同2号(SD2)、同3号が(SD3)、同4号が(SD5)である。なお、平成元年調査段階では円形に近いプランで浅いSD4を周溝墓とは認定していないが、今回調査のSD10との類似性から一応5号方形周溝墓として含めておきたい。したがって今回は6号方形周溝墓からの呼称となる。

今回の調査で検出した4基の溝の土層観察から、注意される共通点が知られる。それは溝の内側つまり墳丘側の上層に赤みをおびた茶褐色土が堆積している点だ(図26参照)。理由は不明だが、黒色土中のジョレンかけ精査段階から確認されるので、今後の周溝の検出のメルクマールとなろう。

(1) 6号方形周溝墓(SD7)

F~H-17~19区にあり、南半分は調査地外。主軸をほぼ丘陵主軸方向の南北にとる。周溝プランは他の周溝に比べ隅が丸味をおびる。また検出面からの深さが20~35cmと他と比べ浅い。溝の断面形は船底形でシャープでない。溝底が平らでなく凹凸がある点は他と等しい。規模は溝を含めた東西長が11.3m、内法8.0m、南北確認長約10m。周溝墓に伴う出土物はごく少ない。

(2) 7号方形周溝墓(SD8)

C~F-19~1区にあり全形を発掘した。溝内側の肩のラインに比べ、外側がやや外にふくらむ感があるが、ほぼ隅丸方形プランである。規模は溝を含めた東西長が13.4m、同南北長が14.0m。内法で東西長10.0m、同南北長9.8m。溝の断面形は逆台形に近くシャープである。深さは50cm~100cmと深く、底は平らでなく凹凸がある。所々溝底に周溝内墓墟らしき凹みがある。北辺溝内のE・F-1区の凹みは、幅約1.2m、長さ3.2mの隅丸長方形プランで、深さ約20cm。墟底から約20cm上でほぼ完形に復元できる小型の甕が出土している。溝内墓墟の可能性はある。遺物は他にD-19区から台付鉢が出土している。

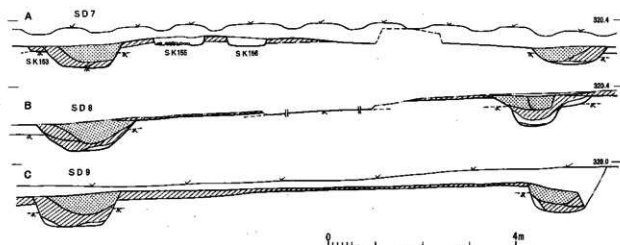


図26 周溝墓 SD7・SD8・SD9土層 1:80

アミ目は茶褐色土 斜線は黒色土 A~Cの位置は図6参照

(3) 8号方形周溝墓(SD9)

SD8の西隣、B・C-20~2区にある。西半分は調査地外。SD8と同様の隅丸方形プランだが、溝はSD8より少し狭い。断面形は逆台形。深さは40~60cm。底は凹凸がある。規模は溝を含めた南北長11.8m、同内法長8.5m。北辺の溝内C-2区で墓域の可能性が高い落ち込みがある(SK154 図27参照)。160cm×85cmの楕円形プランで、船底状に落ち込む。深さ約40cm。中央北寄りで、供献土器が中央に向かって倒れたような恰好で出土している。土器は赤彩された台付鉢で、ほぼ完形に復元された。

(4) 9号方形周溝墓(SD10)

E~H-1・2区にあり、南端の一部のみを検出している。これまでのSD7~9とは趣を異にする。プランはいびつな弧状で、溝の広狭が著しい。用水路を挟んで東西で少しずれる様な感がある。それでも大づかみに見れば、各辺が外にふくらんだ周溝墓の南辺周溝とみることが出来る。今回検出の周溝の底が一定の深さではないこと、平成元年調査で検出した2号方形周溝墓が深さ10~20cmと浅いことを考慮すれば、周溝墓周溝と推定できる。検出された部分での溝を含めた東西長12.8m、同内法約9.1m。溝幅は70cm~2.0m、深さ10~22cm。周溝に伴う出土物はごく少ない。

(5) 3号方形周溝墓(SD3)

平成元年調査で検出したSD3の西南隅を、J-19区で検出した。隅の外側は丸味をおびる。深さ50cm。

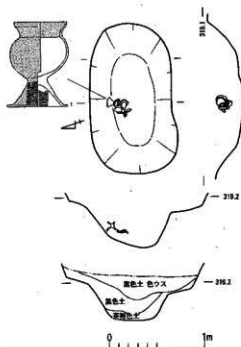


図27 SD9北辺溝内墓域
SK154 1:40 土器は1:8

表1 上野遺跡方形周溝墓一覧

名称	遺構番号	南北 外法 内法 m	東西 外法 内法 m	備考
1号方形周溝墓	SD1	9.4 6.5	— 6.8	
2号 "	SD2	8.2 6.0	7.6 5.5	浅い 南辺から単純口縁埴
3号 "	SD3	12.8 10.2	13.1 10.1	
4号 "	SD5	— —	15.2 11.7	大倉崎館下層 北辺から2重口縁壺出土
5号 "	SD4	(10.4) —	— —	南北に長い楕円形か
6号 "	SD7	— —	11.3 8.0	
7号 "	SD8	14.0 9.8	13.4 10.0	北辺から小型壺 みなみ辺から小型台付鉢
8号 "	SD9	11.8 8.5	— —	北辺に溝内墓域 溝内墓域から赤彩台付鉢
9号 "	SD101	— —	12.8 9.1	楕円に近いプランか 浅い

2 遺物

A 土器 (図28)

1は8号方形周溝墓周溝SD9内墓竈SK154出土品で、ほぼ完形品。稜のあいまいな受け口状の口縁部と球形に近い胴部、大きく広がり先端で上方へ屈曲する脚部をもつ台付鉢である。軟質で器壁の状態が悪いため調整手法は不明だが、外面全面と口縁部内面に赤彩が認められるのでおそらくミガキが施されているものと思われる。素地は黄灰色、砂を多く含む。北陵系のもつと予想しているが、今のところ類別を採す余裕がない。今後の課題である。

2は7号方形周溝墓周溝SD8内の墓竈と思われる落ち込みから出土したもので、残80%。粗製の小型甕で、「く」の字に外反する短い口縁部と、球形に近い胴部をもち平底である。年度紐輪積み痕がよく残る。内面にハケを施すが外面は未調整。軟質で、砂を多く含み、淡褐色を呈する。粗製の「く」の字甕で、東海地方や関東地方にも見られるものである。

3は7号方形周溝墓周溝SD8から出土。残50%。小型の台付碗で、器壁はうすい。粗製で輪積み痕が残り全体にいびつである。口縁部内外に横ナアを施す他は未調整。軟質で胎土に砂を含む。淡黄灰色を呈する。

以上の土器はいずれも方形周溝墓周溝出土品であり、古墳時代初頭に比定される。当地方の古墳文化の成立を知る上で貴重な資料である。これまでの調査で出土した上野遺跡での方形周溝墓出土品を含めて今後の検討課題である。

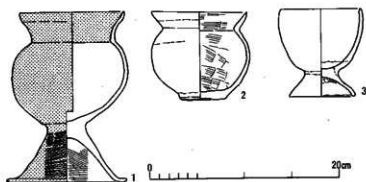


図28 古墳時代の土器 1 : 4

第6章 縄文時代・平安時代

明確な遺構は検出していないが、縄文時代と平安時代の遺物が出土している。

1 縄文時代の遺物

散在的にごく少量出土している。土器と石鏃がある。

(1) 土器(図29 1~10)

1~6は縄文のみのもので、3~5は羽状縄文である。1~5は前期後半のものであろう。6は縄文の一単位が小さく、縄文帯と無文帯を交互に配するかのよう施文される。中期後葉から後期前葉にみられる粗製の深鉢であろうか。

7・8は縄文と隆帯文の凹部をもつ。7は粗い羽状縄文で、器壁はうすい。内湾する浅鉢であろうか。8は6によく似た縄文を施す厚手のもので、6同様に中期後葉から後期前葉におかれよう。

9・10は半截竹管による沈線文をもつ。沈線は押し引きの連続爪形文のように見えるがそうではなく、平行に数本の縦線を引いた後にそれを横に刻み格子状文を作り出している。10は口縁部片で花卉状の文様をめぐるし、端部に先端を輪状にした粘土紐による浮文を貼る。いずれも前期末葉の所産と考えている。

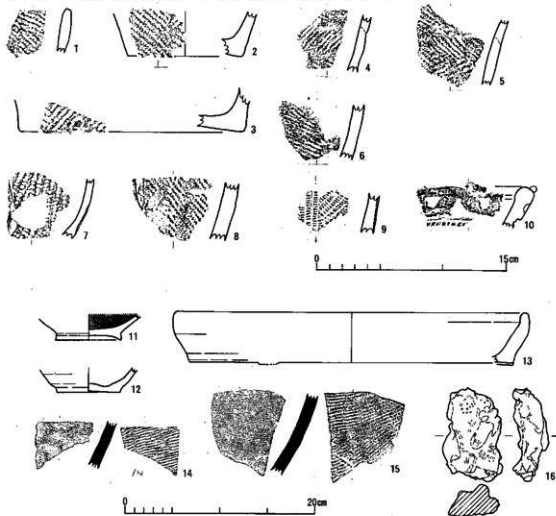


図29 縄文時代・平安時代の遺物 1 : 3, 1 : 4

2 平安時代の遺物（図29 11～16）

散在的にごく少量出土している。

11は黒色土器の高台付碗である。高台は断面三角形で、低い部類のものである。底部の糸切り痕をナデ消している。

12は小型の甕の底部と思われる。底部にロクロ糸切り痕を残す。

13は大型の盤で、推定口径約38cm。低い脚をもつ。平安時代の所産か疑問が残る。

14・15は須恵器甕体部片。いずれも外面は平行タタキ。内面は14がナデ、15がカキ目。

16は鉄滓で、いわゆる椀形滓である。重さ219.5g。

第7章 まとめ

昭和63年の調査以来、今回で7回目となった。今回調査した地点は、上野丘陵の南端部である。この地点は、今までの踏査で最も遺物が濃密に分布していた所である。

地主の小出大暎氏の話によれば、開墾時にかなり深く掘り返したとのことであるが、その折どのような遺物が出土したのだろうか。今知ることが出来ないのは残念である。

さて、今回の調査でも大きな成果が得られた。調査するたびごとに新しい発見があり、上野遺跡の底知れぬ深さと、重要性を認識させられるのである。

今回もまた旧石器時代の遺物の発見があり、上野丘陵全体にわたって旧石器時代の遺跡が分布していることが確認された。遺構としては、3箇所の遺物のまとまり（集合）が発見された。これらのまとまりは、いずれも、石材は安山岩である。これら3箇所のまとまりから出土した礫群及び石器群の他に、方形周溝墓等の遺構覆土より混在した形で旧石器時代の石器が、発見されている。これらの石器は、3箇所のまとまりとは異なり、玉髓、黒曜石製の石器が主であるという。今回の調査で得られた資料をもとに、第3章旧石器時代の小括の項で望月が2点の知見としてまとめている。いずれにしても上野遺跡出土の旧石器は、飯山地域の旧石器時代を究明する上で、多くの問題点を私達に投げかけているといえよう。縄文時代の遺物は、前期、中期、後期の土器破片が若干発見されただけで、遺構の発見はなかった。7回にわたる調査で若干ずつではあるが、縄文土器が発見されている。然るに縄文時代の遺構の発見は皆無である。このことは、いかなる理由によるものであろうか。興味あるところである。

今回の調査で、最も成果があったのは弥生時代と古墳時代の遺構、遺物である。

弥生時代についてみれば、中期後半の竪穴住居址が3軒発見されている。これら3軒の住居址は、古墳時代の方形周溝墓と重複しており、周溝により部分的に切り取られ完全ではない。プランは、飯山地域の弥生中期後半の住居址に普遍的に認められる円形の竪穴住居址である。ただ、直径5m以下の小型の住居址である。掘立柱建物址が8軒発見されている。木棺墓は9基発見されている。木棺墓の中で特記すべきは、2基の竪床木棺墓が発見されたことである。竪床木棺墓は、飯山地域では初めての発見である。ただ、残念なことに副葬品としての遺物が皆無であった。木棺墓のほかには土墓が1基発見され、土墓内より弥生中期後半の土器が出土している。木棺墓と土墓が同時期の所産であるとすれば、何故に異なった埋葬が行われたのであろうか。このあたりも弥生中期の埋葬形式を考える上で重要であろう。

遺物についてみると大部分が弥生中期後半の土器である。土器は、住居址内及び木棺墓群の周辺から発見されている。私達は、またここに弥生中期後半の良好な土器資料を得ることができた。発見された土器は、飯山地域の弥生中期後半の編年編成に重要な役割を果たすことであろう。ほかに紡錘車5点が発見されている。石器については、縄文時代のものも含む可能性はあるものの、打製石斧、磨製石斧、石鏃、編み物石等が発見され、上野遺跡に居住した弥生中期後半の人々の生活の一端を物語ってくれている。

今までの調査を通じて、上野丘陵に弥生中期後半に集落が形成されていたことは、疑いのない事実である。上野丘陵上に集落を形成した人々が、長峰丘陵上や岡田山脈山麓下に形成した集落の人々などのような関連を有していたのであろうか。今後、追求していかねばならない重要な研究課題といえよう。

古墳時代では、方形周溝墓4基が発見されている。周溝内からの遺物の出土は、いたって少量であったが古墳時代初頭の土器が発見されている。従って、これらの方形周溝墓は、古墳時代の初頭に造成されたものであり、飯山地域の古墳成立への研究に重要な資料となるであろう。

ほかに、平安時代の遺物が若干発見されている。

以上が、今回調査した成果の概要である。調査のたびごとに、新しい発見や重要な遺構、遺物の発見があった。そのことは、喜ばしいことであり素直に評価する必要があることはいうまでもない。けれども、新しい発見と同時に、貴重な遺跡が破壊され失われてしまったことも事実である。昭和63年以降の7回にわたる工事施行によって、上野丘陵の森林は大きく変貌した。最早森林というに該当しないほどに貧しい林相と化してしまっている。そして道路沿いに次々と建築物が建とうとしている。一本の幹線道路が通じることは、単に幹線道路に終らず、周辺の自然景観を著しく変え、私達の祖先が残した貴重な文化遺産を根底から破壊してしまうものであることを改めて痛感した。果してこれでよいのであろうか。

末尾ながら、調査にご協力たまわった地元関係者の皆さま、直接作業に従事された作業員の皆さまに心よりお礼申しあげる。

第2編 柳町遺跡

例言

- 1 本書は、長野県飯山市大字寿426-1番地ほかに所在する柳町遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、個人経営によるなめこ栽培施設建設にともない依頼を受けた飯山市教育委員会が調査会を設立して、平成7年6月12日より同年8月23日まで現地において発掘調査を実施した。
- 3 今回の調査で検出されたものは、弥生時代・古墳時代・平安時代・中世の住居址・溝址等で、弥生～古墳時代にかかる土器が特に注目される。
- 4 発掘調査にかかる組織は以下のとおりである。

飯山市遺跡調査会

顧問	小山邦武	市長
会長	滝沢藤三郎	市教育委員長
副会長	水野光男	市社会教育委員長
委員	高橋桂	文化財保護審議会長
〃	藤巻泰雄	市議会総務文教委員長
〃	高橋英吉	市民館長
〃	小川幹夫	市教育委員長職務代理
〃	岩崎彌	市教育長
〃	月岡保男	市教育委員会次長
事務局長	山崎賢太郎	市教育委員会生涯学習課長
事務局次長	町井和夫	市教育委員会社会教育係長
事務局員	望月静雄	市教育委員会社会教育係

調査団

団長	高橋桂	飯山市文化財保護審議会会長
担当者	望月静雄	
調査主任	田村澁城	市埋蔵文化財センター調査員
調査員	常盤井智行	市埋蔵文化財センター調査員
調査員	桃井伊都子	市埋蔵文化財センター調査員

作業参加者

小林経雄・土屋久栄・宮沢豊・小川ちか子・西堀有紀・藤沢和枝

シルバー人材センター派遣

橋山巖・高橋喜久治・竹内大五郎・渡辺金治・服部福夫・服部敏雄・阿部えい・岸田昇・北條辰男・

清水国治・高原弘一・町井まつ・岸田志づこ・岸田昇・石沢悦次・北原清子・宮本鈴子

整理参加者

小林みさを・藤沢和枝・小川ちか子

- 5 報告書の作成は、高橋桂調査団長の指導のもと常盤井智行が中心となり、下記の分担で行った。
(遺構図) 小川ちか子・藤沢和枝 (遺物図) 桃井伊都子・藤沢和枝・小川ちか子
(写真) 田村澁城

執筆については、目次に文責を明記した。

- 6 調査から報告書作成においては、地権者である服部一郎氏より物心両面のご協力を賜った。記して御礼申し上げる。また、下記の諸氏・諸機関よりご指導を得た。記して御礼申し上げる。

中島庄一・外様公民館

- 7 本調査にかかる書類・図面・遺物等は、飯山市埋蔵文化財センターで保管している。

目次

序		
例言		
第1章 調査経過		53
1 調査に至る経過	(望月 静雄)	53
2 調査経過	(藤沢 和枝)	53
第2章 遺跡の概要	(望月 静雄)	56
1 遺跡の位置と環境		56
A 地理的環境		56
B 歴史的環境		56
第3章 遺構	(常盤井智行)	62
1 縄文時代		62
2 弥生時代		62
3 古墳時代		62
A 竪穴住居址		62
B 溝址		62
C 土坑		65
4 平安時代		65
A 竪穴住居址		65
B 竪立柱建物址		66
5 中世		66
A 竪立柱建物址		66
B 土坑		77
C 井戸址		79
第4章 遺物	(常盤井智行)	86
1 縄文時代		86
2 弥生時代		86
3 古墳時代		86
A 土器		86
B 土製品・石製品		88
4 平安時代		89
5 中・近世		89
第5章 まとめ	(高橋 桂)	101

第1章 経過

1 調査に至る経過

平成7年4月10日、服部優一氏より市農業委員会へ農地法第5条による許可申請書が提出された。服部氏の計画によれば、大字寿字柳町426-1番地(1,502㎡)においてなご栽培施設(565㎡)を建設することであった。当該地は柳町遺跡の中心地と考えられ、昭和32年桐原健氏が中心となって調査した地点に南接していた。そのため服部氏に埋蔵文化財の保護について説明し、事前に発掘調査を実施することで理解を得た。同時に県教育委員会に、経費負担について照会を行った。零細農家で経費に協力を求めることが困難なことから国庫補助対象になるとのことであったが、補助の拡大が難しいことから基本的には市の負担で行うこととした。なお、対象面積1,000㎡、総経費約480万円で、そのうち施主には10万円の協力がいただけることとなった。また、一部国庫の補助を受けた。

平成7年5月10日、服部優一氏より文化財保護法第57条の2第1項による埋蔵文化財発掘の届け出が提出される。続いて5月19日付けで、県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」の通知がある。同日、文化財保護法第98条の2第1項による埋蔵文化財発掘通知を提出する。

なお、調査担当は市教委の望月があたり、調査団の組織については、団長に高橋桂飯山市文化財保護審議会長を委嘱し、調査員については市埋蔵文化財センター調査員の田村況城を調査主任、常盤井智行が調査員としてあつた。

2 調査経過

6月12日(月) 調査員で発掘事前準備の打ち合わせを行い、19日頃発掘開始とする。事業主の服部氏と現地協議。排土は調査地内で半分づつ調査して置くこととする。重機表土除去までに、プラムの樹を移動すること、西端のプラムおよび畑作地は掘らないこと(重要遺構が出たら協議)を確認。作業員募集開始。

6月13日(火) 服部氏より、16日にブルーンを移動することと連絡あり、よって予定通り19日から行うこととする。作業員名簿の作成。

6月19日(月) 重機による表土除去開始。ジョレンがけ精査開始。コンテナハウス、テント、トイレ設置。器材の搬入。

6月20日(火) 雨天中止。

6月21日(水) グリット設定。(昨年の境界杭より南へ36m、西へ15m→T-23の西南クイ)3mグリットとし、昨年のグリット番号同一にする。レベル昨年KBM2、323、800より道路EC3(323、4000)調査区内へ2点杭に記入。R-19・20、S112確認作業、Y-C-22、23区精査。

6月22日(木) ジョレンがけ精査、遺構確認。R-Y区遺構上面の写真撮影。A-D区ジョレンがけ精査、遺構深し。1/100略図作成。柱穴、その他の穴がたくさんあり、時代判定(新旧)が非常にむづかしい。

6月23日(金) R-U-21~24区遺構掘り下げ開始。柱穴多数出土、しかも深い。柱穴は白粘土ブロック混じりの埋土、黒色土の埋土、黄色粘土の細粒が混じる埋土の3種類位に分かれる。SK9と確認した土杭は、針金が出土したので新しい。(S-24区) SKはNO12からである。U・V-24区の土杭にSK12と命名。

6月26日(月) 雨天中止。

6月27日(火) R~U-20~24区遺構掘り下げ。S I 12は南北16mの大型堅穴住居址で1間×5間の柱穴あり、時代は中世。S K 12半割土層写真撮影、完測のち完掘写真撮影。当区の柱穴は深いものが多い。埋土は、黒色土、黄色粘土の細粒が入るもの、白色粘土の大塊が入るものに分かれる。高橋団長指導。

6月28日(水) S I 12と南西に重複する住居址らしき遺構の全景写真撮影。これをS I 18と命名。S I 12より古い。R~U-20~24区遺構掘り下げほぼ完了。V~X-22~24区ジョレンがけ精査開始。V・W-23・24区の住居址らしきものをS I 17と命名。V-23区土杭をS K 13と命名。上面輪郭写真撮影。

6月29日(木) S I 18周溝完掘、柱穴掘り下げ。V~X-22~24区遺構上面輪郭写真撮影、のち略図をかき掘り下げにかかす。町井係長視察。

6月30日(金) S I 18柱穴掘り下げ、西側柱列の検出に難渋。S I 17は今のところ3棟の堅穴住居址の重複、新しい方をS I 19と命名。古い方をS I 20と命名。S K 15セクションを残し完掘。

7月3日(月)~7月6日(木) 雨天中止。

7月7日(金) S I 17・19・20掘り下げ続行。S K 14セクションをはずし完掘写真撮影。V-21・22区柱穴掘り下げ。T-19・20区柱穴掘り下げ。

7月10日(月) S I 19・17・20セクション上層図作成、南北セクションはずし、S I 19・17掘り下げ。V~X-20~22区ジョレンがけ精査、上面写真撮影、遺構掘り下げ、柱穴が多い。高橋団長視察。

7月11日(火) 午前中雨天のため中止。午後V~X-19~22区遺構掘り下げ。S I 17セクションを残し完掘。午後3時、雨天のため中止。

7月12日(水) 雨天中止。

7月13日(木) V~Z北よりジョレンがけ精査。柱穴掘り。連日の雨降りのため足元悪し。午後4時より中間慰労会。

7月14日(金) 雨天中止。

7月17日(月) 雨天中止。

7月18日(火) Z区以東柱穴掘り下げ、およびジョレンがけ精査続行、遺構確認。掘立柱建物址3棟確認。午後2時30分、第一中学校生12名現地見学。

7月19日(水) W-20区P1・P2土器出土ピット遺物敷細図作成。X~Z-21~24区ジョレンがけ精査、黄土色の塊が混入した土を下げる。Y・Z-19・20区セクションを残し堅穴住居址掘り下げ、かたい床面が出る。S I 21と命名。南部はちがう住居と重複のもよう。

7月20日(木) 雨天中止。

7月21日(金) 雨天中止。

7月24日(月) R~W-19~24区完掘写真撮影、のち1/40平板図にとりかかす。S I 11、S I 18の柱穴遺物をとりあげる。S I 21掘り下げ続行、南部は別の住居址に切られる。S I 22と命名。S K 20(A-23区)掘り下げ、石製片口鉢出土。午前蘆落山より遺跡遠景写真撮影。

7月25日(火) S I 22掘り下げ続行。南は溝に切られる。S D 10と命名。R~W-19~24区1/40平板図作成続行。X-18~20区の南北溝をS D 8と命名。

7月26日(水) S I 22、S D 10掘り下げ続行。

7月27日(木) S K 20石製片口鉢出土状態写真撮影、のち1/20実測図作成。S I 22を切るS D 10掘り下げ続行。

7月28日(金) S I 21・22遺物出土状態写真撮影。S I 22は南端が切られている。S I 23と命名。S I 22・23の1/20遺物分布略図作成、とり上げ。V~X-19~23区1/40平板図作成。

7月31日(月) B・C-19~21区ジョレンがけ精査。堅穴住居址らしき輪郭あり、S I 24と命名、掘り下げ開始。S K 21完掘写真撮影。S I 22・21・23付近1/40平板図作成。

- 8月1日(火) S I 24掘り下げ、柱穴掘り続行。S I 24東の周溝をS I 25と命名。1/40平板図にレベル入れ。
- 8月2日(水) 雨天中止。
- 8月3日(木) S I 24完掘、写真撮影、S I 25は掘立柱建物の可能性あり。
- 8月4日(金) 北側セクションをカメラで壁切り。器材片づけ。
- 8月7日(月) バックホー入る。コンテナハウス引越し。器材移動。
- 8月8日(火) グリット設定。T~V-14~17遺構精査、のち遺構掘り下げ。
- 8月9日(水) A~C-16~18区ジョレンがけ精査。住居址、溝等切り合う。S I 23掘り下げ開始、土器がま
ま出て出土する。SE 1掘り下げ水死。SE 3・SE 4命名、掘り下げ開始、SK 23は下ビット完掘。
- 8月10日(木) SK 24写真撮影。S I 23続行、床より土器多し。
- 8月11日(金) S I 23は溝のほかに竪穴住居がもう一軒存在している。
- 8月12日(土) SE 1半割分完掘、写真撮影。SD 1はB-17まで完掘。S I 26炭焼き穴取りはずしセクション
実測。SD 15完掘。S I 23写真撮影(完掘、床しっかりしている)
- 8月13日(日)~8月16日(水) 盆休み
- 8月17日(木) Z-14・15切りあい地区掘り下げ。SE 4、S I 23内住居掘り下げ。S I 28をSK 26に変更し完
掘写真撮影。山崎生涯学習課長来跡。
- 8月18日(金) Z・A-12・13区溝検出、SD 20と命名、掘り下げ。S I 29完掘写真撮影、1/40平板図作成。
Z・A-12・13区精査。S I 27輪郭不明瞭、S I 28、B・C-16区掘り下げ開始。B・C-17区下層溝状遺構完
掘。SD 11・12、W-16区土層実測。
- 8月21日(月) 東半分(S~X区) 1/40平板図測量。S I 28下層溝も含めて略完掘。SD 13・14・15掘り下げ
続行。午後2時、雨のため現場中止。
- 8月22日(火) SD 14・15・19掘り下げ略完了。S I 30掘り下げ、南東隅より高杯出土。S~U-17・18区掘り
下げ精査。S I 18の南端検出。
- 8月23日(水) SD 13・14・15完掘。SE 4底確認。肩から5m下。S I 30完掘。S I 28完掘写真撮影。遺物と
り上げ。全景写真、個別完掘写真撮影。器材の撤収。午後4時よりお崎公民館にて終了式。

第2章 遺跡の概要

1 遺跡の位置と環境

A 地理的環境

柳町遺跡は、長野県飯山市大字寿字柳町ほかに所在する。

甲信国境に源を発する千曲川が、信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると、千曲川は信越国境の峡谷地帯（通称市川谷）を下刻曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川と名を改め、いわゆる津南河岸段丘群を形成しやがて日本海に注ぐ（図1）。

飯山盆地は、南北8km、東西4kmの紡錘形を呈しており、そのほぼ中央を千曲川が北流している。河西域はさらに南北に延びる長峰丘陵によって、東側を常盤平、西側を外椽平と呼称している。常盤平は千曲川広い氾濫源とわずかな自然堤防が認められる。一方、外椽平は広井川が形成した肥沃な低湿地を形成し、かつては春先に雪解け水を集めた広井川があふれ、一面湖沼のようになったという。

飯山盆地は、第三紀生水成層を基盤とし、褶曲構造によって形成されたといわれている。すなわち、西縁を画す関田山脈、盆地中央の長峰丘陵が背斜部に相当し、常盤平・外椽平が向斜部に相当する。ただし、断層線も部分的に横走しているため、山地縁辺には断層崖による扇状地や、丘陵の平行移動など複雑な地貌を呈している。

柳町遺跡は、前記した長峰丘陵上に位置する。長峰丘陵は、飯山市街地北部の有尾から戸狩まで約6km続く丘陵で、盆地底との比高差は約100mである。常盤平に面する東側は比較的急斜面であるが、西側はなだらかに外椽平の低湿地に接する。

柳町遺跡は、長峰丘陵が途中で分岐し尾崎で終わる支脈の先端に位置している。地形は北に向かって収束しているが、東・北・西に向かってそれぞれ緩やかに低地に移行している。遺跡の中心地帯は、このうち西側に面した部分で、総面積は100,000㎡に及ぶものと思われる。標高は約330mで、外椽平との比高差は15mである。

長峰丘陵の支脈の分岐点には弥生時代の集落である小泉遺跡や、それに接して東長峰遺跡など弥生・古墳時代の遺跡が密集する場所でもある。さらに、外椽平をはさんだ西の関田山脈の山麓沿いには、弥生～古墳時代の遺跡が密集している。

B 歴史的環境

飯山盆地の中心部に位置する柳町遺跡周辺の遺跡分布は、古くからの調査によって密集していることが判明している（図2）。

旧石器時代の遺跡としては、千曲川の段丘や丘陵に立地する日焼（12）・屋株（14）・上野（15）・瀬付遺跡（18）や長峰丘陵上の大塚遺跡（19）がある。日焼は黒曜石製のナイフ形石器や搔器に代表される石器群で、ナイフ形石器を指標とする時期の末期に位置付けられている。屋株では安山岩製の横倉型ポイントと製作に伴う剥片類が小範囲より発掘されている（飯山市教委1989）。上野では玉髓製の搔器が多量に発見されこれにポイントが伴うものと考えられており、類型の少ない注目すべき石器群であるといえる。このような遺跡の石器群は、ナイフ形石器終末期から旧石器時代末期の石器群と考えられるが、各方面からの文化的影響を受けながら変遷していったことが特徴といえるのではあるまいか。

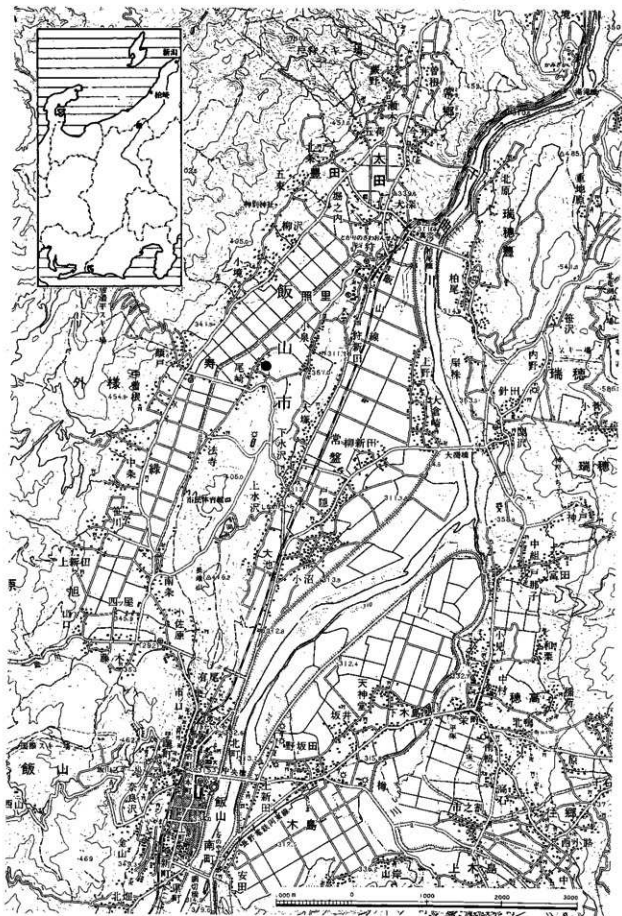


図1 柳町遺跡の位置 (1 : 50,000)

縄文時代になっても、千曲川沿いに分布する遺跡が多い。南原・屋株・大倉崎・有尾・須多ヶ峯遺跡などが著名である。南原では前期諸磯Ⅱ式期の一群が発掘されている(飯山市教委1994)。また、大倉崎では諸磯Ⅱ式期後半に比定した良好な土器群を検出している(高橋・中島・金井1976)。有尾遺跡は、有尾式土器の標識遺跡として著名である。須多ヶ峯遺跡は全体が明らかにされていないが、中期前葉に位置付けられる土器がまとまっている(飯山市1993)。

柳町遺跡を中心とした長峰丘陵の北半部には、弥生時代から古墳時代前期にかけての遺跡が密集していることで知られている。調査された遺跡では、柳町遺跡に隣接する東長峰(24)、小泉(20)、照丘(11)の各遺跡がある。

この丘陵上には弥生時代の遺跡として小泉・尾崎・東長峰・照里・下林などの遺跡が知られている。古くは北沢量平・栗岩英治両氏らによって弥生式土器・石器が長峰丘陵の尾崎や法寺から採集されていた。藤森栄一氏はこのうちの石器を『千曲川下流長峰、高丘の弥生式石器』と題して報告している(藤森1937)。戦後、飯山北高等学校郷土研究会により次々に発掘調査が実施され、弥生期の住居址も多く発見された(森山 1950、清水 1950、森山 1951、東・清水・森山・寺崎 1951、飯沢 1954)。こうした一連の報告により長峰丘陵上の弥生遺跡が注目されるようになり、宮坂英次氏(宮坂 1954)や桐原健氏(桐原 1955)によってその重要性が指摘された。昭和三十年代にはいつて、桐原健氏や高橋桂によって精力的に調査や踏査が行われた。その成果は、柳町遺跡の発掘調査(桐原 1957 1959)、照丘遺跡(高橋1962 1968)などの調査報告で示されている。

近年に至り、開発に伴う緊急発掘調査が増加し、再び柳町遺跡の周辺の発掘調査が行われるようになってきた。昭和62年、農村総合モデル事業に伴う釜淵遺跡の発掘調査では住居址が発見され、関田山麓に多くの弥生時代遺跡が点在することを改めて証明した。とくに、昭和63年より発掘調査が行われた小泉遺跡では、弥生集落が広範囲に発見されている。また、平成元年に行われた上野遺跡の発掘調査では、弥生時代中期・後期の竪穴住居址が発見されたとともに、平成5年の調査では約40基の木棺墓群が発見されている。数次の発掘調査で、上野遺跡は大規模な弥生集落であることが判明してきた。さらに、照丘遺跡は平成2年に発掘調査が実施され、中期の竪穴住居址群が発見された。

続いて古墳時代の遺跡や古墳も多い。上野遺跡では、前期の住居址が1軒発見され、北陸・新潟系の土器が一括して検出されている。また、方形周溝墓も4基発見されている。柳町遺跡では(21)前期住居址、須多ヶ峯遺跡でも同様に住居址が発見されている。一方、古墳は照里古墳群(53)や大塚古墳(53)、大塚古墳群(55)、上野古墳(58)、有尾古墳(57)があるが、いずれも発掘調査はなされていない。なお、有尾古墳は帆立貝式古墳と考えられてきたが、最近では前方後方墳とする意見が強くなっている(松沢 1983)。

奈良・平安時代の遺跡では、各所に遺跡が点在するようになるが、岡峰(2)、上野(15)、北原(40)が特に著名である。平安時代の鍛冶炉を多数検出した北原遺跡は、当時飯山地方が盛んに開拓されていた一端を語る資料として重要である。また、土壌墓(木棺墓)が岡峰、上野、小佐原(44)で発見されており、当時の墓制も明らかになりつつある。

中世では、集落遺跡として釜淵(34)がある。祭祀遺構より永仁四年の木簡が発見されている。また、城館跡としては尾崎館(28)、大倉崎館(59)昭和63年に発掘調査を行った大倉崎館では、火災に遭ったと思われる館内より、青磁・白磁、越前系・珠洲系陶器、瓦器製火炉をはじめとする多くの遺物が発見されている。14世紀後半より15世紀前半の所産と考えられているが、館主については現在のところまだ明らかとなっていない。

以上、旧石器時代から平安時代までを簡単に触れてきた。縄文時代までは千曲川沿いの段丘や丘陵に占拠し、以降長峰丘陵や関田山麓、あるいは湧水帯の認められる上野の丘陵を中心として、低湿地に接した地域に占拠するようになる。このことは、飯山盆地が真に開拓されていたのは、平安時代に入って漸く広い区域が開拓されていたことを伺わせるのである。

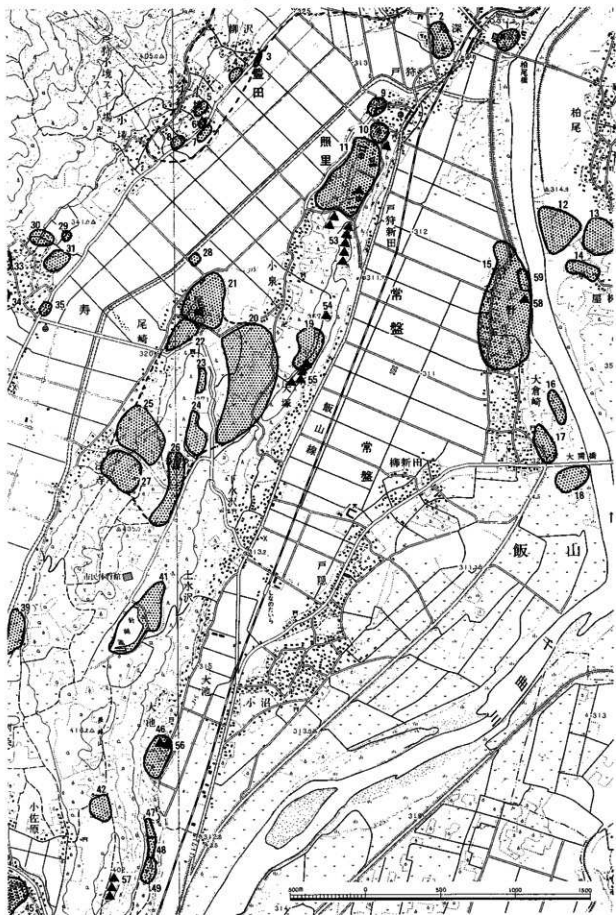


图2 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

引用・参考文献

- 飯沢澄男 1954 『長峰第12号住居埋蔵文化財発見届出書』
- 飯山市 1993 『飯山市誌』歴史編上巻
- 飯山市教育委員会 1989 『国道117号線小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』飯山市埋蔵文化財調査報告第19集
- 飯山市教育委員会 1990 『国道117号線小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ』飯山市埋蔵文化財調査報告第21集
- 飯山市教育委員会 1994 『南原・深沢遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告第37集
- 飯山市教育委員会 1988 『釜淵・北原戸遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告第16集
- 飯山市教育委員会 1991 『小佐原遺跡・関沢遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告第25集
- 飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告第14集
- 飯山市教育委員会 1980 『北原遺跡調査報告書』飯山市埋蔵文化財調査報告第4集
- 飯山市教育委員会 1996 『柳町遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告書第44集
- 桐原 健 1955 『長峰尾崎遺跡の重要性』若木考古38・39合併号
- 桐原 健 1957 『北信濃長峰丘陵柳町遺跡調査概報』信濃9-12
- 桐原 健 1959 『北信濃長峰丘陵における弥生式遺跡』考古学雑誌48-3
- 清水 亨 1950 『外椽村尾崎東長峰発掘調査報告(二)』下水内郡遺跡発掘調査報告書
- 高橋 桂 1962 『飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について』信濃14-11
- 高橋 桂 1968 『長野県飯山市照里環状周溝遺跡調査略報』信濃20-4
- 高橋 桂・中島正一・金井正三 1976 『北信濃大倉崎遺跡発掘調査報告』信濃28-4
- 東 道雄・清水 亨・森山茂夫・寺崎昭夫 1951 『下水内郡外椽村東長峰遺跡3・4・5・6・7号住居址』下水内郡遺跡調査報告2
- 藤森栄一 1937 『千曲川下流長峰・高丘の弥生式石器』考古学8-8
- 松沢芳弘 1983 『飯山・中野地方の前半期古墳文化と提起する諸問題』信濃35-3
- 宮坂英式 1955 『長野県下水内郡長峰遺跡』日本考古学年報3
- 森山茂夫 1950 『外椽村尾崎東長峰発掘調査報告(一)』下水内郡遺跡発掘調査報告書
- 森山茂夫 1951 『外椽村尾崎長峰遺跡第7号住居址』下水内会会報



図3 調査区および周辺地形図（1：2,000）

（图中昭和32年調査区は桐原健氏測量図をもとに位置を示したものである）

第3章 遺構

1 縄文時代(図5)

調査地南部で、動物の落し穴と推定される土坑が2基、等高線に直交する形で2基並列して検出されている。検出位置は南に小さな沢をひかえた所にあたる。形状は異なるが、やはり落し穴と推定されている溝状土坑が平成6年(1994)調査でも沢にのぞむ位置で検出されている。

2 弥生時代(図6)

中期土器を埋納した柱穴2基を検出した。埋納は柱穴抜きとり後である。2基ともW-20区にあり当柱穴が竪穴住居あるいは掘立柱建物址の柱穴と予想されるが、建物址としてまとめられなかった。

3 古墳時代

遺跡の中心的な時代であり、竪穴住居址7軒、溝址11条、土坑5基を検出した。

A 竪穴住居址(図7~図10)

主軸方位は、S I 20がやや異なる他は、等高線に対して平行ないし直交している。

プランは大型のS I 23が隅丸長方形。他は正方形に近い隅丸長方形である。柱穴は原則として4本で、プランが正方形に近くても、柱穴の並びは長方形であり棟方向を意図している。

小泉遺跡では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、竪穴住居址のプランが、小半形→隅丸長方形→方形と推移することが確かめられている。また出土遺物から当遺跡よりも新しい古墳時代前期の須多ヶ峯遺跡検出例は、プランが略正方形で、柱穴も正方形に近い形で壁ぎわ寄りに設けられている。当遺跡例は小泉遺跡例から柳町遺跡例へと推移する中間の形態であり、弥生時代後期から古墳時代への過渡期的様相といえる。

周溝は、一周するもの(S I 22・24)、一部のみ検出されたもの(S I 23・30)、検出されないもの(S I 21)と、バラエティがある。S I 23は床面下に凹部がめぐる特異な構造である。

炉は弥生時代後期に通有な奥の柱の間にあるもの(S I 21・S I 30)と、中央にあるもの(S I 22・23)がある。

面積はS I 23が49.6㎡(畳約30畳)と大型で、他は27.0~36.2㎡(16~22畳)である。

S I 21・22・23は重複し、S I 21→S I 22→S I 23の切り合い関係が確かめられているが、出土土器に明確な年代差は認められない。

飯山市教育委員会・飯山市土地開発公社 1995 『小泉弥生時代遺跡』

飯山市教育委員会・長野県北信地方事務所 1995 『須多ヶ峯遺跡』

B 溝址(図4・図11)

検出された溝址すべてを古墳時代とする確たる根拠はないが、形状・方位などが類似していること、出土遺物に平安時代以降のものが認められないこと、古墳時代の竪穴住居址を切り、中世以降の遺構に切られることから、一応すべて古墳時代に含めておいた。

S D 5のみは丘陵を斜面方向に縦走する溝で、調査地北端部で南肩が検出されている。前年度調査で幅2.2mと



図4 圓臺地全体図 1:200

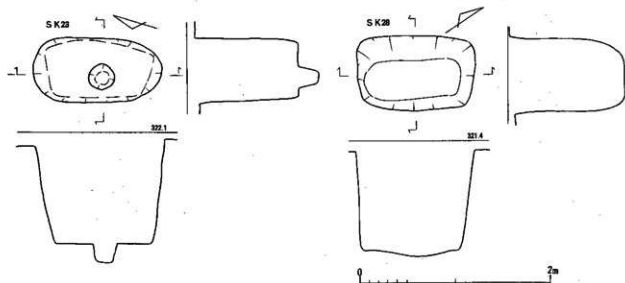


図5 縄文時代の土坑 1:40

確認されている。

他は調査地西部に集中する。

SD13は一辺6.5mの方形にめぐる溝で、他の溝に比べ壁は垂直に近く、幅もせまい。切り合いでは最も古い、SI30より新しい。

SD10とSD11、SD14とSD12は東角で接続する。SD15とSD19はSD14に接続し、SD20はSD15とSD19をつなぐ。これらの溝は関連をもって機能していたものと考え、SD11がSD12に切られているので、まずSD11とSD10が東、北を区切る区画溝としてあり、後にやや南に下がりSD12とSD14が掘られたと考えることもできる。

SD17・SD18は北東に起点をもち南西へ延びる溝で、接続する溝を調査地内ではもたない。

以上の溝の性格は、SD13は不明、他は排水と区画の溝と考えている。ただし、溝の内側に建物等の構造物は検出していない。

C 土坑 (図12)

中世と考えている方形土坑と形態が異なるので、SK16・17・21・22・27を古墳時代の土坑としておいた。SK16・17・27は楕円形プランで、SK17は平安時代住居址SI19に切られる。SK27は底面の凹凸が著しい。SK21・22は長方形土坑である。断面形は溝に等しい。いずれも弥生時代と古墳時代の土器が出土している。

4 平安時代

竪穴住居址2軒・掘立柱建物址1軒がある。

A 竪穴住居址 (図13)

SI17・SI19の2軒が重複して検出された。SI17がSI19に切られている。

プランはSI17が隅丸長方形、SI19が隅丸方形で、いずれも支柱穴は検出されない。床面に炉と思われる焼床があるほかに、両者ともに南壁に接して焼土が埋っていた小ビットをもつ。面積は18.2㎡(畳約11畳)、13.3㎡(8畳)と小さい。

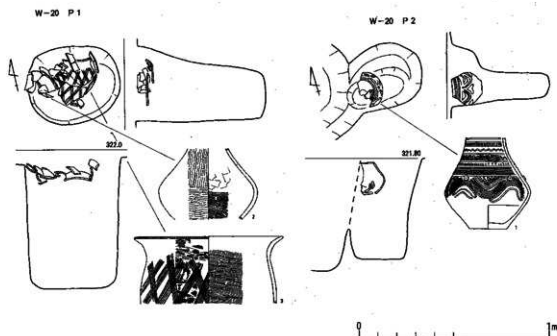


図6 弥生時代中期の柱穴 1:20 土器は1:80

B 掘立柱建物址 (図13)

中・近世とした掘立柱建物址と比べ柱穴の規模が小さく、埋土も異なるので平安時代のものでした。2間×4間の南北棟である。P1から須恵器類が出土している。

5 中・近世

掘立柱建物址6軒、土坑9基、井戸址5基を検出した。

A 掘立柱建物址 (図14~19)

斜面高位側に溝をもつ S I 12・18・25・29は当初竖穴住居址と考えたが、規模・形状などから掘立柱建物址とした方がより妥当と考えた。遺構略号はそのまま S I としている。

S I 12・18は重複し、S I 12が新しい。周溝間の規模は16.5mと14.5mをはかり大型である。周溝で画された床面は水平で、S I 12などは周溝東壁の高さが50~60cmもあり、かなり斜面を削平したことがうかがえる。柱穴は建物の規模に比べるとやや小さい感がある。S I 12は母屋の周囲に廂状に柱穴がめぐる。S I 18は東側柱列の柱穴に方形と円形があり、また周溝も2重となっているので、立て替えが行われたものと考えている。西側柱列の柱穴は東側列に対応する様相でなく一応推定してみたものである。

S I 25・29も S I 12・18とよく似た形態である。

これらの周溝をもつ建物址は、S I 18の柱穴や S I 12の埋土から中世陶磁器が出土しているので、中世の所産と考えている。

主軸が等高線に直交する S B 8・S B 10は柱穴が大きく深い。そして柱痕跡が明瞭なものが多い。いずれも母屋の梁行は1間でしかも間隔が広い。S B 8は一回り小さな柱穴を廂列としてもつ。

S B 10は一応この形でまとめてみたが、もう一間東北へ延びる可能性があり、また2軒の建物とすることも可

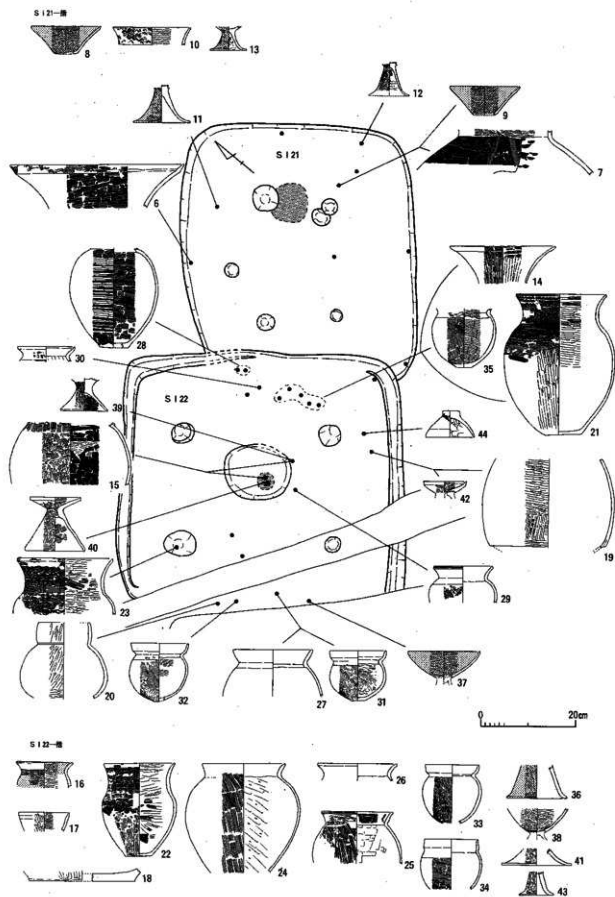


图7 S 121·22 遺物分布图 (1 : 80 1 : 8)

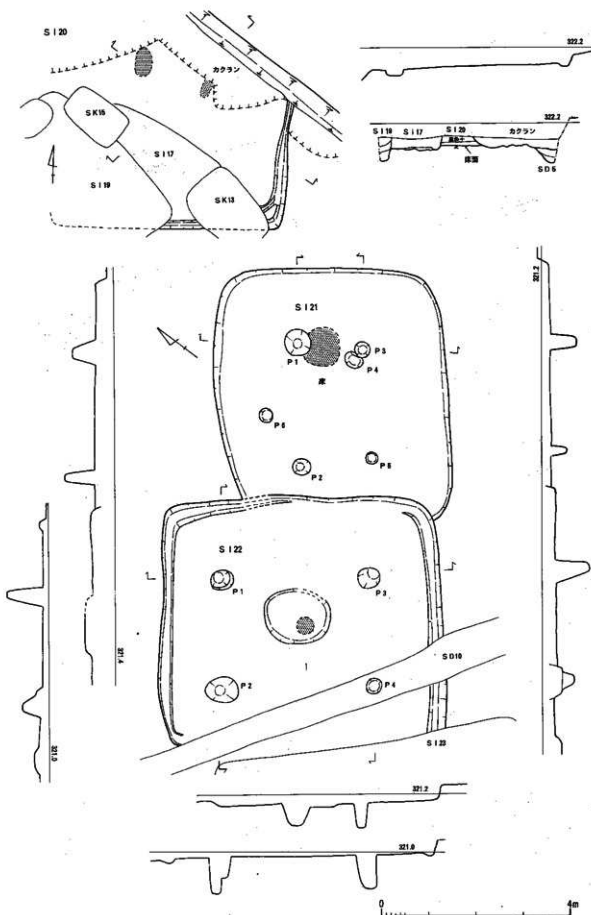


図8 古墳時代の竪穴住居址(1) 1 : 80

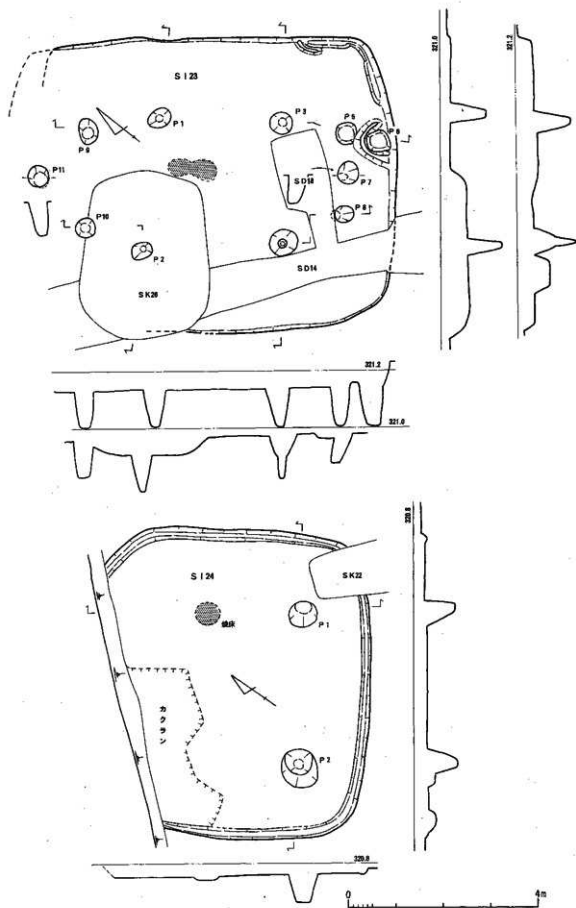


図9 古墳時代の竪穴住居址(2) 1:80

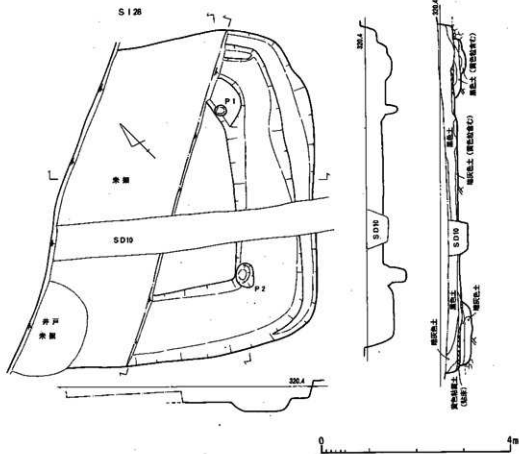
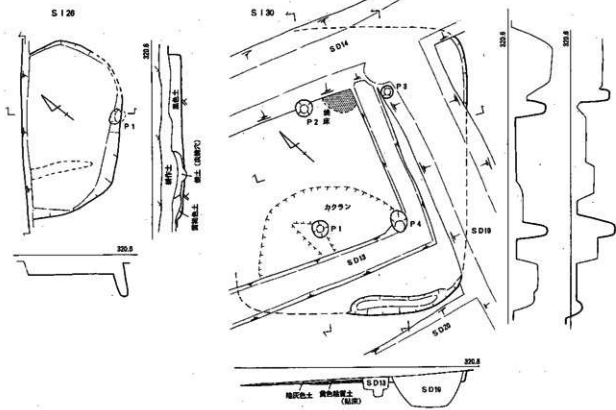


図10 古墳時代の竪穴住居址(3) 1 : 60

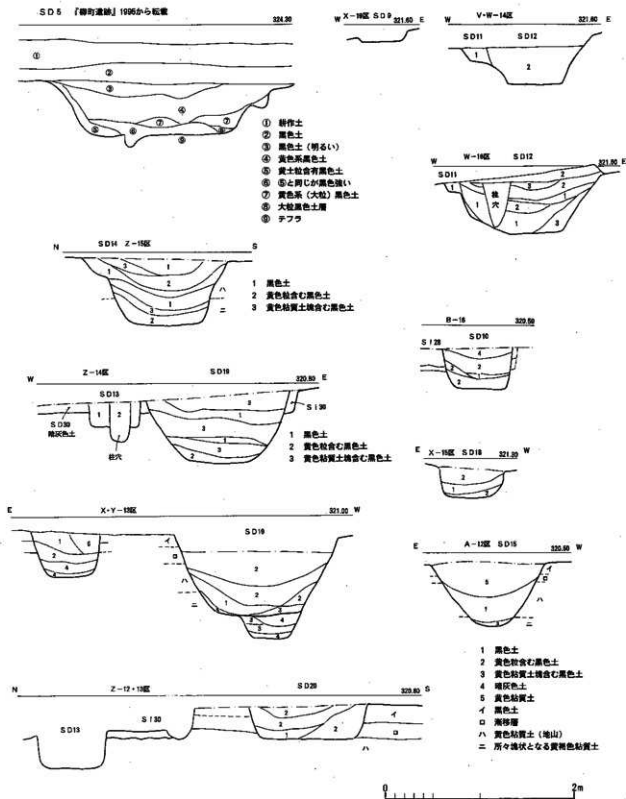


図11 溝土層 1:40

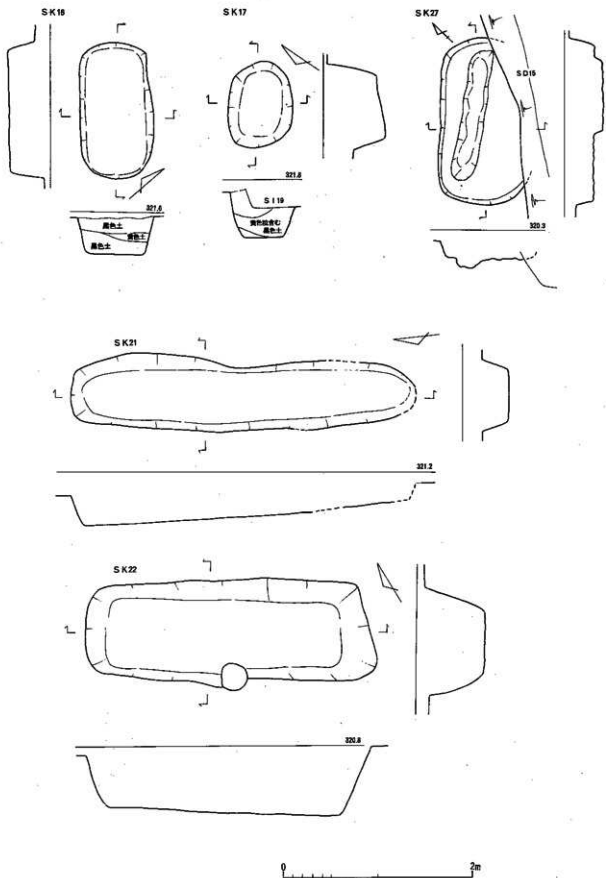


図12 古墳時代の土坑 1 : 40

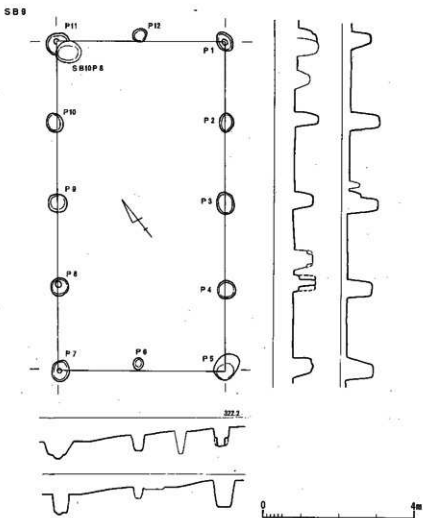
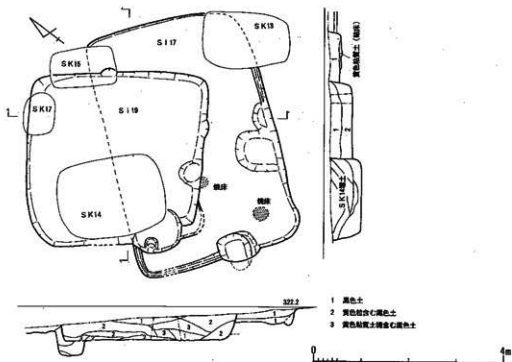


図13 平安時代の竪穴住居址・掘立柱建物址 1 : 80 1 : 100

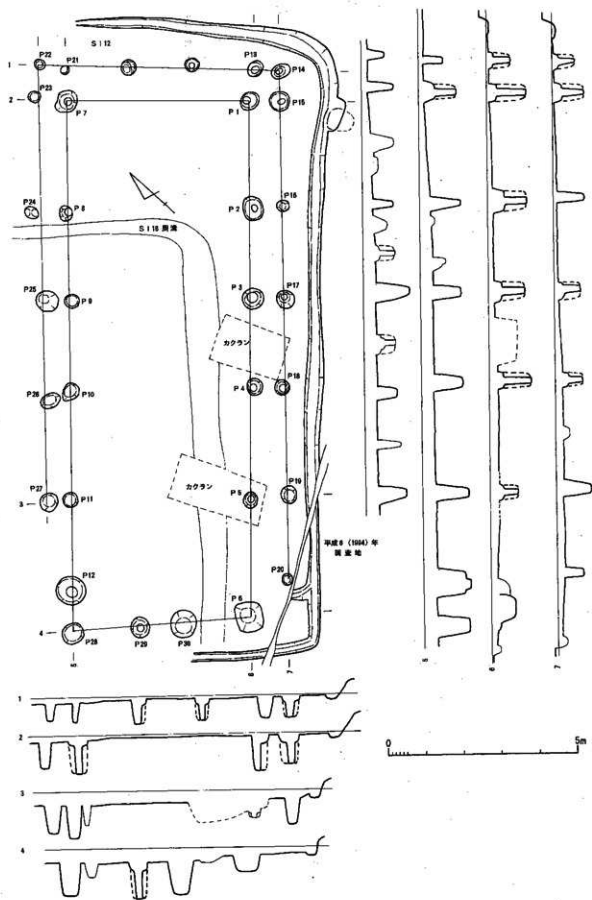


図14 中・近世の掘立柱建物址 1:100 水系レベル付322.6m

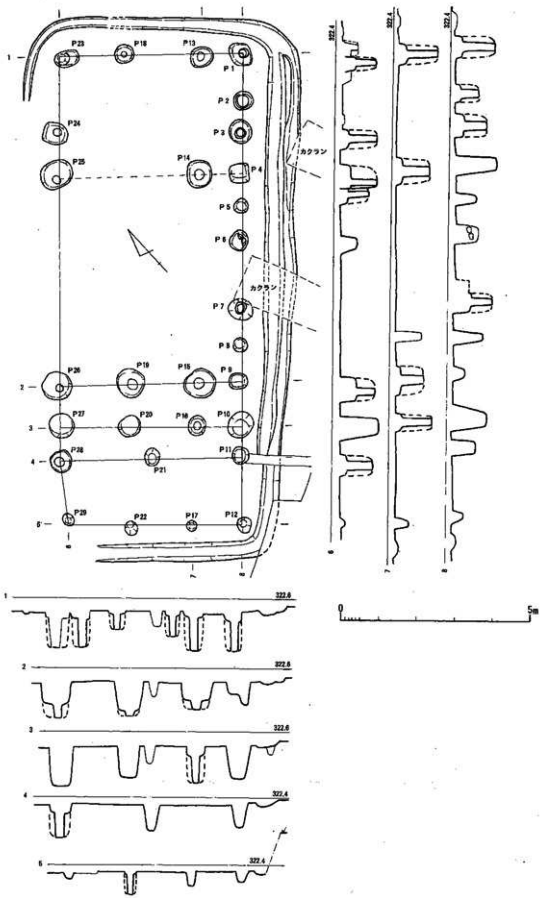


図15 中・近世の掘立柱建物址 1 : 100

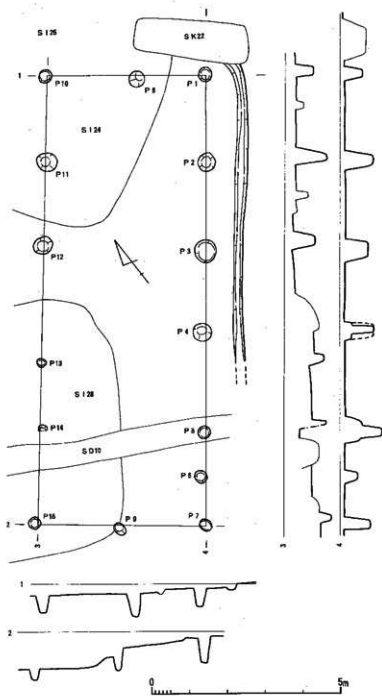


図16 中・近世の掘立柱建物址 1 : 100 水系レベル320.8m

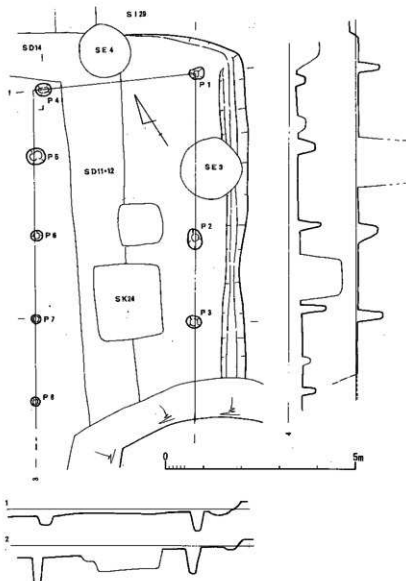


図17 中・近世の掘立柱建物址 1:100 水系レベル321.6m

能である。柱穴の数が多いため、現場でのまとめ方に難渋した。一つの可能性を提示したと理解していただきたい。

SB8・SB10ともに柱穴から近世の陶磁器類が出土しているので近世の所産と考えている。

B 土坑 (図20・図21)

調査地北部にSK12~15・20があり、南部に24~26・29がまとめてある。

形状から4種に分類できる。1類はSK12~15で、隅丸長方形プランで、壁が垂直に近く立ち上がるもの、中世陶器、銭貨、石臼が出土している。

2類は、SK20で、長方形プランで断面逆台形。完形の石製播鉢が出土している。

3類は、SK24・29で、方形に近い長方形プランで、底は平らなもの。

4類は、SK25・26で貼床をもつ。SK26は壁面にまで貼床がある。

1・2類は墓坑の可能性がある。3類は城郭址などでみられる方形堅穴遺構とよく似ている。4類は貯蔵穴の類であろうか。

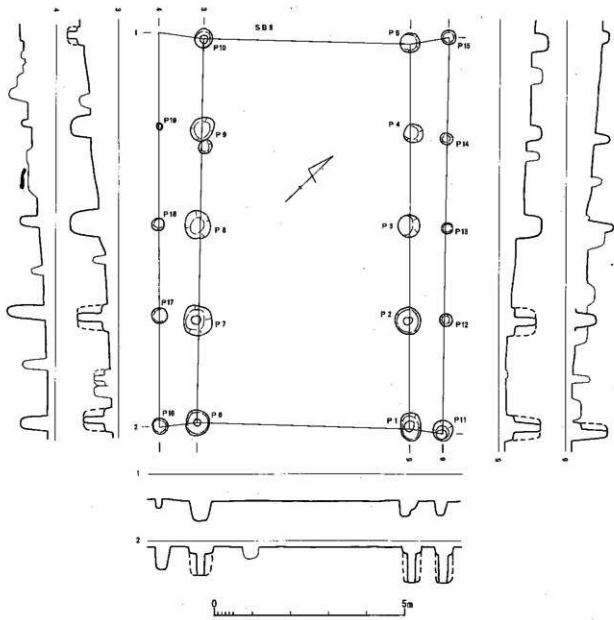


図18 中・近世の掘立柱建物址 1:100 水系レベル322.4m

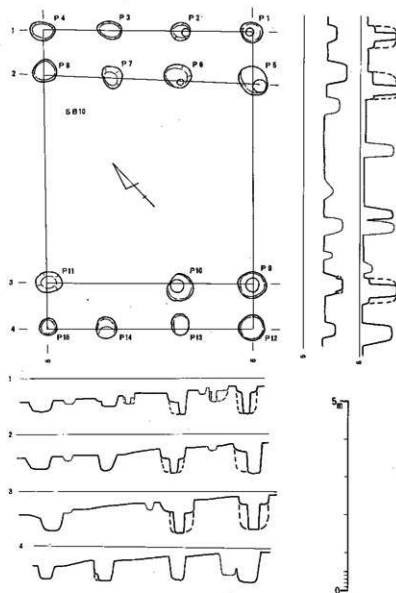


図19 中・近世の掘立柱建物址 1:100 水系レベル322.2m

C 井戸址 (図22)

円形素掘りの井戸址が5基検出されている。出土遺物がごく少なく年代を特定できないが、切り合い関係から中世以降のものと考えている。底まで調査したのはSE1・4の2基のみである。SE1は浅く潜水層に達していない。掘りかけの井戸かもしれない。

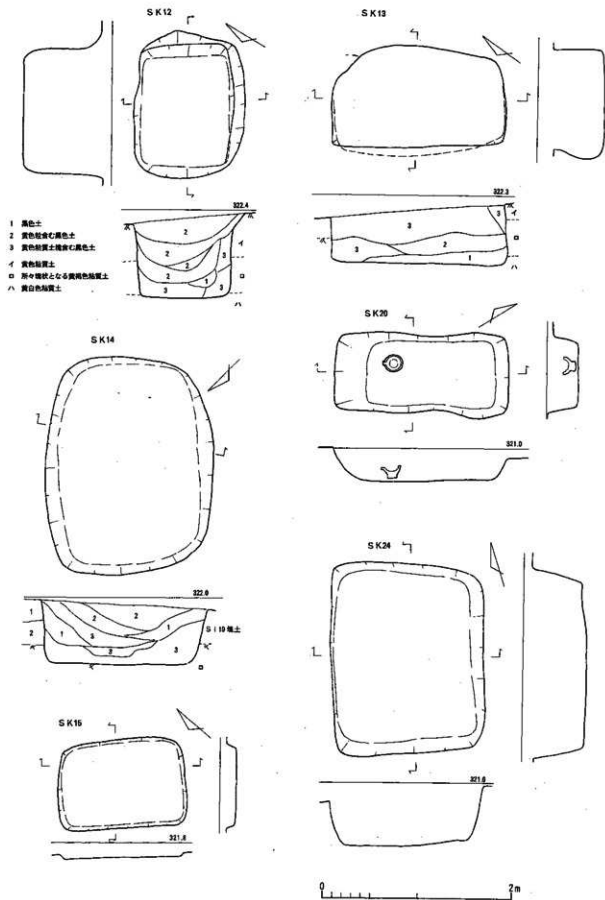


図20 中世の土坑(1) 1 : 40

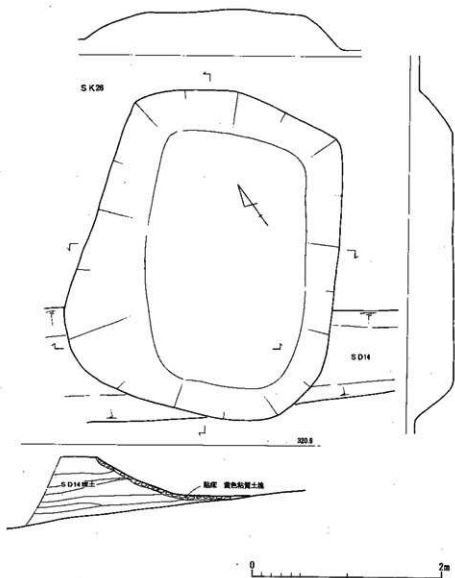
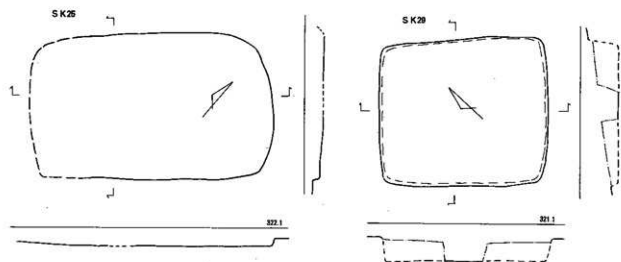


図21 中世の土坑(2) 1 : 40

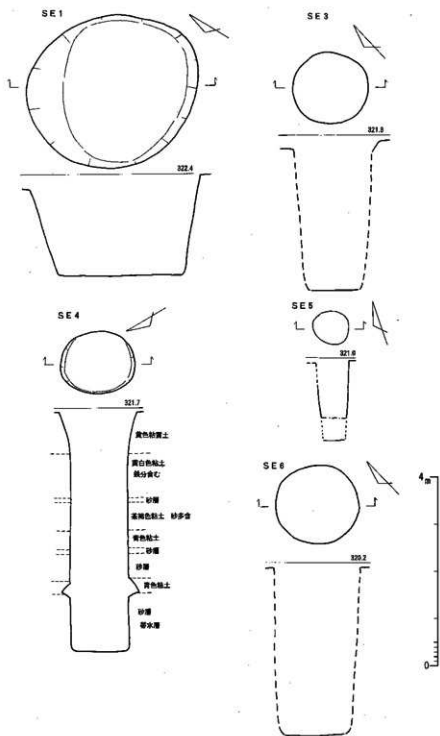


図22 中・近世の井戸址 1:80

表1 遺構一覧表

竪穴住居址

古墳時代

()は確認延長

番号	位置	方位	規模				備考
			長軸	短軸	深さ	面積(㎡)	
S I 20	V・W -23・24	N 0° E	-	-	0.26	-	一部検出 炉2か所 周溝あり
S I 21	Y・Z -19・20	N50° E	(5.5)	4.9	0.25	27.0	S I 22に切られる 主柱穴4本 周溝なし
S I 22	Y・Z -18・19	E52° S	5.94	(5.3)	0.30	31.5	S I 21を切る S I 23に切られる 主柱穴4本 周溝あり
S I 23	X・Y -15・16・17	E52° S	(8.0)	6.2	0.56	49.6	S I 22を切る 大型住居 主柱穴10本 周溝一部
S I 24	B・C -19・20	N60° E	6.5	(5.8)	0.14	37.7	主柱穴推定4本 周溝あり
S I 26	B・C -12・13	N56° E	3.7	-	0.20	-	小型住居 平面形不定形 主柱穴未検出
S I 28	B・C -16・17	N44° E	(6.62)	(5.5)	0.48	36.4	掘り込み2段 西半分未掘
S I 30	Z・A -13・14・15	N48° E	(6.3)	(4.8)	0.10	30.2	主柱穴4本 一部検出
S I 27	A・Z -12	-	-	-	-	-	土器集中地点 輪郭未検出

平安時代

S I 17	V・W -22・23	N37° E	5.2	(3.5)	0.32	18.2	S I 19に切られる
S I 19	WX -22・23	N52° E	3.64	3.66	0.70	13.3	S I 17を切る

溝

()は確認延長

番号	位置	方位	規模(m)			備考
			幅	深さ	長	
SD 5	P~D -23~25	E45° S	2.2	0.98	(41.5)	調査地北壁に沿う SK20に切られる
SD 9	X -18~20	N34° E	1.0	0.15	6.2	SD11の北延長部
SD10	X~C -17~18	E32° S	0.85	0.45	(14.8)	SD11と東隅で直交して接続 S I 22、S I 28を切る
SD11	VWX -13~18	N30° E	1.05	0.15	(15.5)	SD12、SE4に切られる
SD12	VW -13~16	N30° E	1.35	0.40	(8.8)	SD11に東接平行 SD14と東隅で直交して接続
SD13	ZABC -14~16	N35° E	0.85	0.65	28.0	一辺6.5mの方形 SD14、SD15に切られる
SD14	X~C -15~16	E31° S	1.50	0.70	(17.7)	SD19と直交して接続 SK26に切られる S I 23を切る
SD15	A~C -12~14	N30° E	1.0	0.68	(8.1)	SD13を切る SD20と直交して接続
SD17	Y -13~15	N29° E	0.85	0.48	(6.7)	Y-15区から南へ延びる 南半部から深くなる
SD18	W~Y -13~17	N30° E	0.8	0.30	(13.5)	X-17区から南へ延びる S I 23を切る SD14との切り合いは未確認
SD19	YZ -13~15	N30° E	1.5	1.05	(7.7)	SD14と直交して接続し底面も同レベル
SD20	ZA -12・13	E28° S	1.4	0.35	5.4	SD19・SD15と直交して接続

掘立柱建物址

平安時代

番号	位置	方位	規模 (m)			母屋面積 (m ²)	備考
			桁行	梁行	柱穴直径		
SB 9	V~X -18~21	N39° E	4間 8.7	2間 4.4	0.3~0.5	38.3	SB10に切られる P1から須恵器瓶片出土

中・近世

SI12	R~U -19~24	N46° E	5間 13.7	1間 4.7	0.4~0.6	64.4	備考
SI18	S~V -18~22	N42° E	7間 12.4	3間 4.8	0.4~0.8	59.5	SI18を切る。廂あり 周溝あり。中世陶磁出土
SI25	B・C -16~20	N39° E	5間	2間	0.3~0.6	51.2	建て替えあり 周溝あり 中世陶磁・ふいご羽口出土
SI29	V~X -13~16	N34° E	4間以上	1間	0.3~0.4	42.0以上	SE3、SE4に切られる 周溝あり
SB8	U~X -20~23	E44° S	4間	1間	0.3~0.7	56.1	廂あり 元豊通宝・近世染付出土
SB10	V~X -19~22	E44° S	3間	1間	0.5~0.7	29.8	廂あり 近世染付・天目出土

土 坑

縄文時代

番号	位置	方位	規模 (m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
SK23	U -15・16	N16° W	1.34	0.7	1.12	中心に小穴あり。
SK28	W-14	N35° E	1.22	0.79	1.07	

古墳時代

SK16	X・Y -23	N49° W	1.44	0.67	0.35	土器1.5kg出土
SK17	X-23	N57° E	0.9	0.68	0.47	S I19に切られる 土器両掌一坏出土
SK21	Z・A -21・22	N7° E	3.62	0.75	0.30	土器1.0kg出土
SK22	B-20	N58° W	3.0	1.1	0.73	SK24、S I25と重複、切り合いは未確認 土器両掌半分出土
SK27	A・B -12	N43° E	1.76	(0.95)	0.17	SD15に切られる 底面凹凸はげしい 土器1.0kg出土

中世・近世

SK12	U・V -24	N59° E	1.55	1.16	0.83	
SK13	V・W -23・24	N34° W	1.83	1.15	0.50	S I17を切る 中世陶器大甕片出土
SK14	W -22・23	N44° W	2.3	1.75	0.60	S I19を切る 熊享元宝出土
SK15	W・X -23	N40° W	1.3	0.93	0.10	S I19を切る 石臼出土
SK20	A -23・24	N32° E	1.83	0.82	0.25	石製台付片口鉢出土
SK24	X-14	N15.5° E	2.0	1.6	0.60	SD12を切る
SK25	U -14・15	N50° E	2.53	1.5	0.90	貼床あり 珠洲焼すり鉢出土
SK26	Y・Z -15・16	N38° E	3.43	2.65	0.46	貼床あり SD14・S I23を切る
SK29	X・Y -14	N42° W	1.78	1.55	0.24	未掘 中央で深さを確認

井戸

中・近世

番号	位置	規模(m)			備 考
		長径	短径	深さ	
SE1	S・T -15・16	3.56	3.24	2.14	素掘り 水湧かず
SE3	V -15・16	1.6	1.5	3.2	“ S I17を切る 重機で深さ確認
SE4	W -16	1.6	1.3	5.8	“ 水湧く SD11・12を切る
SE5	X -13	0.74	0.7	(1.22 以上)	“ 小型未掘
SE6	W・X -12・13	1.78	1.64	3.54	“ 重機で深さ確認

第4章 遺物

1 縄文時代 (P L27)

図示していないが、調査地西部から散在的に土器小片9片が出土している。1点 (P L左上) は絡状体圧痕文をもち内面に条線が施されるもので胎土に繊維を含む。外表面からの焼成前の穿孔がある。早期の所産であろう。他はいずれも斜縄文、羽状縄文が施され、胎土に繊維を含むものであり前期前半のものであろう。

2 弥生時代 (図23・1～3、図1～4)

土器と石器が少量ある。土器はW-20区の柱穴出土品で、中期粟林式のものである。石器は5点あり、石鏃と石斧がある。4が黒曜石で、他は安山岩である。

3 古墳時代

壱住居址および溝を中心に多量の土器と、少量の土製品が出土した。土器は柳町式と型式設定されている古墳時代初頭の所謂庄内式併行期のもので、良好な資料が得られた。

A 土器 (図24～図30)

在地の弥生時代後期の箱清水式の要素をもつものがある。

(1) 壺

箱清水系 大きく外反する口縁部と、明瞭な稜をもつソロバン玉状の胴部を特色とする大型品 (6・7・14・15・19・45～51・80・81・86) と、短い口縁部をもつ小型品 (16・54) がある。

大型品は形態的には肩が張る傾向にあるもの (7) や、胴部がソロバン玉状をなす長胴下ぶくれに近い形態となるもの (15・19・80・81)、胴部の稜が突出した段をなすもの (19・81) があつたり、赤彩が原則だが、赤彩されないもの (6・7・14・15・19など) が目立ち、典型的な箱清水式の壺とは様相を異にしている。

外来系 箱清水系に比べ出土量は少ない。

17・20・123は内湾口頸壺と通称される東海系のものである。典型的なものとは形態が少し異なるが、口縁部が胴部に比べて小さいものは廻間Ⅱ式に特徴的なものである。

53・96は棒状浮文をもつ二重口縁壺で、口縁端面に刺突文がめぐる。口縁部が内湾することや、頸部径が大きいことなど形態的には東海西部のものと同異なるが、東海系に含めて良いと考えている。

95も直線的に開く口縁部をもつもので外来系のものであろう。

52の底部も内湾する点で外来系と思われる。

(2) 甕

箱清水系 単純に外反する口縁部をもち、不連続な瓣描波状文と頸部の縷状文を特色とするものである (21～23・66～72・88～90・110～112など)。

外来系との比率は厳密に計量していないがおよそ半々ぐらいである。

形態的には球胴化が目立ち(21・66)、施文が粗雑になる傾向がある。70~72は形態的には箱清水系の要素をもつが、櫛指波状文をもたず、口縁端部への強い横ナデや頸凹線文を施すという外来の要素が認められる。

外来系 24・25・26~30・73~74・113~116は「く」の字口縁の壺で、北陸系と思われる。口縁部が直立ぎみに立ち上がったのち外反する73・115や、口縁端をつまみ上げる76、口縁端面をもつ29などは能登型壺と呼ばれるものの系統である。

10は形態的には北陸系の有段口縁壺であるが、波状文を施し、内面はヘラミガキされる箱清水系の要素をもつ。31~35も有段口縁の小型壺で、口縁部の横ナデと短いハゲが特色である。北陸系の範疇に入らと思うが、北陸での類例は希少である。

75・117は東海系の「S」字口縁壺の系統だが、口縁が直立する点で典型例とは異なっている。

台付甕119・120も東海系範疇に入れておく。

(3) 高坏

箱清水系 大きく外反する坏部と、直線的に開く脚部をもち、赤彩されるもの(36・37・57~62・97・128・132・147)である。口縁端部が水平に外へ屈曲するもの(57・58)と、しないもの(59など)がある。脚部の通し穴は無いが三角形である。量的には外来系より多い。

外来系 有段口縁をもつ131は北陸系の要素をもつが赤彩されている。坏部に突帯をもち小孔を穿つ135、有段の端部をもつ134も北陸系ととらえられよう。

小型の84・101・125・126は東海系の形態をもつ。有段の坏部をもつ129・137も東海系の範疇であろう。

(4) 器台

箱清水式には明確な器台という器種は伴わないので、器台は外来の器である。ただし脚部のみでは高坏との判別がむずかしい。

外来系 40・42・136が東海系の器台である。ただし北陸でも出土例が多い。これらの小型器台は東海では廻間遺跡器台Bにあたり、Ⅱ式以降に出現する。北陸では漆町遺跡器台Iにあたり5群以降に出現する。

(5) 鉢

箱清水系 単純に外反する体部をもち、赤彩されるもの(4・8・9・92)と、赤彩されないもの(83)がある。形態的に両者は等しい。

外来系 有段口縁をもつ56は北陸系と思われるが、赤彩されることや胎土・調整などは箱清水系に等しい。形態的には漆町遺跡鉢Jに近似する。鉢Jは7群から出現する。

(6) その他

44・63は蓋であり箱清水式に入る。55・93は有孔鉢で、これも箱清水式の範疇に入る。

64は粘土紐輪積み痕と指窪痕が明瞭に残る土器で、類例が中野市七瀬遺跡にある。

65は把手付の口縁部片で赤彩されている。

(7) 小結

今回出土の土器群は述べたように在地の弥生時代後期の土器である箱清水式に、外来系の土器が混入した土器群である。外来系の占める割合は、もともと系譜をもたない器台は別として、壺において約半数である他は顕著ではない。箱清水式の要素が濃厚な土器群である。

外来系の内容では壺において北陸系が顕著であり、それも能登以東の越中・越後に分布する系統を引く。なお、北陸に系統をもちながらも当地独特の壺31~35の存在も注意される。

東海系の「S」字口縁壺や、内湾口頸壺、櫛状浮文をもつ壺も、典型的なものとは異なり変容している。東海系の器台も北陸でも類例が認められるものである。

編年的には東海の廻間Ⅱ式、北陸の漆町5~7式、中野市七瀬遺跡第3段階を中心とした年代に比定できる。

畿内では庄内式の新しい段階を中心とした年代となり、古墳時代初頭の土器群と位置づけられる。

以上大づかみに述べてきたが、十分な観察・分析を経たものではなく、県内他地域との比較も不十分なままである。今後の課題は多い。

表2 編年対照表

柳町遺跡 (飯山市の遺跡)	北信濃(赤塩 1994) 七瀬遺跡		北陸(田嶋 1986) 漆町遺跡		東海(赤塚 1990) 廻間遺跡		畿内(石野・関川) 纏向遺跡	
(上野遺跡9号住) 柳町遺跡 (須多ヶ峯遺跡6・8号住)	第1段階	第3号住	法 仏					V様式
	第2段階 (古)	第4号住	月 影	漆町3	廻間I式	1	纏向1	庄内
		第13号住				2		
		第14号住				3		
	第2段階 (新)	第16号住 第17号住	白 江	漆町4	廻間II式	4	纏向2	
						1		
	第3段階			漆町5		2	纏向3	
						3		
						4		
						4		
				漆町7	廻間III式	1	纏向4	布留
						2		
3								
4								
			漆町8		1			
					2			
					3			
			漆町9		4			

赤塚次郎 1990 および 赤塩 1994 を引用して作成。

赤塩 仁 1994 『弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相』『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書—長野県中野市内—栗林遺跡 七瀬遺跡』 嶋長野県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1990 『考察』『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

石野博信・関川尚功 『纏向遺跡』

田嶋明人 1986 『考察』『漆町遺跡I』 石川県立埋蔵文化財センター

B 土製品・石製品 (図30 150・151 図33)

(1) 土製品

紡錘車が2点ある。150は製品で10.8g、151は未製品で15.8g。

(2) 石製品

溝址から扁平な河原石が出土している。用途は不明。

4 平安時代 (図31)

竪穴住居址S I 17・19を中心に土器・陶器、石製品が出土している。

S I 17・19ともに須臾器の坏が多く、竪に口縁端面をもつ越後型の甕(12・13・19)を含む点で、市内の平安時代遺跡では古相を呈している。切り合い関係はS I 17がS I 19に切られ、S I 17がより古い。S I 17の方が須臾器坏の比率が高く古相を示し、切り合いと矛盾しない。

石製品(図33・5)はS I 19出土で、側面を磨って形を整えている。上端に両面から穿孔しているが貫通していない。おもりというよりペンダントの類の感がある。平安時代の所産かどうかについても疑問が残る。

5 中・近世

陶磁器・鉄製品・ふいご羽口・石製品・銭貨がある。

(1) 陶磁器(図32・1~10 P L28・29)

1は天目茶碗である。口縁形態や底部の作りは後出的で近世に降るものと考えている。SB10 P 5出土。2~5は青磁の碗・皿である。中世の所産か。2はS I 18出土。6は白磁の小坏で、器壁がごく薄い。

7~10は珠洲焼である。7は片口鉢で口縁端部を内側につまみ出し、御し目の間隔が広い。13世紀に溯るものであろう。8は口縁端面が水平、9は御し目が密になる。14世紀代であろう。

なお、図示していないが、中世の内耳土器と近世の染付片がSB8 P 6などの柱穴から数点出土している。

(2) 鉄製品・ふいご羽口(図34・1~8)

1~5は釘である。角釘で、頂部は扁平にされたのちに折り返されている。6は小刀、7は用途不明。掘立柱建物がある調査地東部を中心に出土している。

8はふいご羽口で、S I 18 P 9出土。直径8.0cm。先端が熔変している。

(3) 石製品(図33・12・13)

12は石臼で、SK15出土。粉挽き臼の下臼である。13は台付擂鉢で片口が付く。完形品でSK20出土。黒灰色多孔質安山岩系で、重さ3.7kg。15・16世紀に中心年代がある佐久市大井城跡に数例がある。

(4) 銭貨(表2・図35)

調査地東半分から散在的に出土している。いずれも北宋銭である。

吉岡康暢他 1976 『日本陶磁全集7 越前珠洲』 中央公論社

佐久市教育委員会 1986 『大井城跡(黒岩城跡)発掘調査報告書』

表3 銭貨一覧

図版番号	名称	初 鑄 年	備 考
1	元祐通宝	北宋 元祐元年 1086	W-20
2	元豊通寶	" 元豊元年 1078	X-23
3	嘉祐通宝	" 嘉祐年間 1056~1063	U-21
4	熙寧元宝	" 熙寧元年 1068	SK14
5	元豊通宝	" 元豊元年 1078	U-19
6	皇宗通宝	" 元豊2年 1039	A-24
7	祥符通宝	" 大中祥符元年 1008	A-24

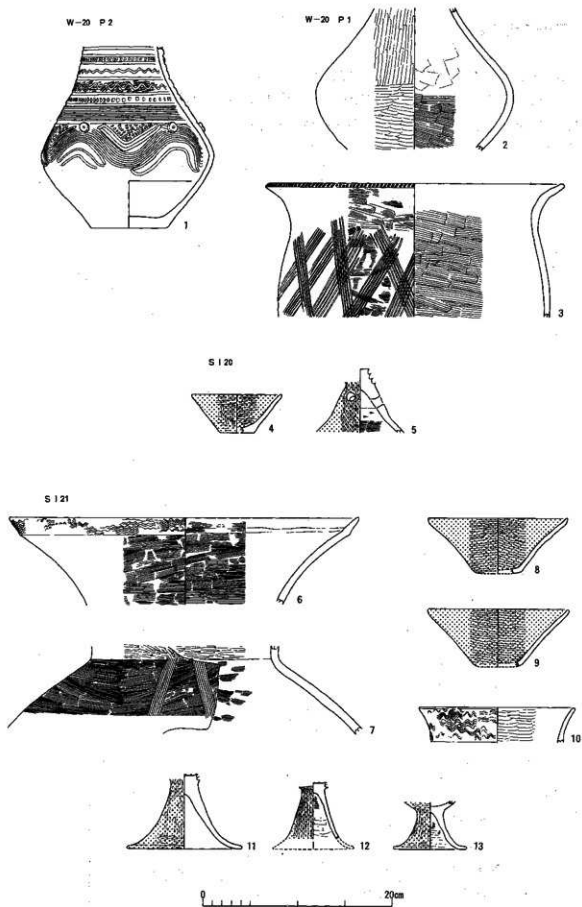


図23 弥生・古墳時代の土器 1 : 4

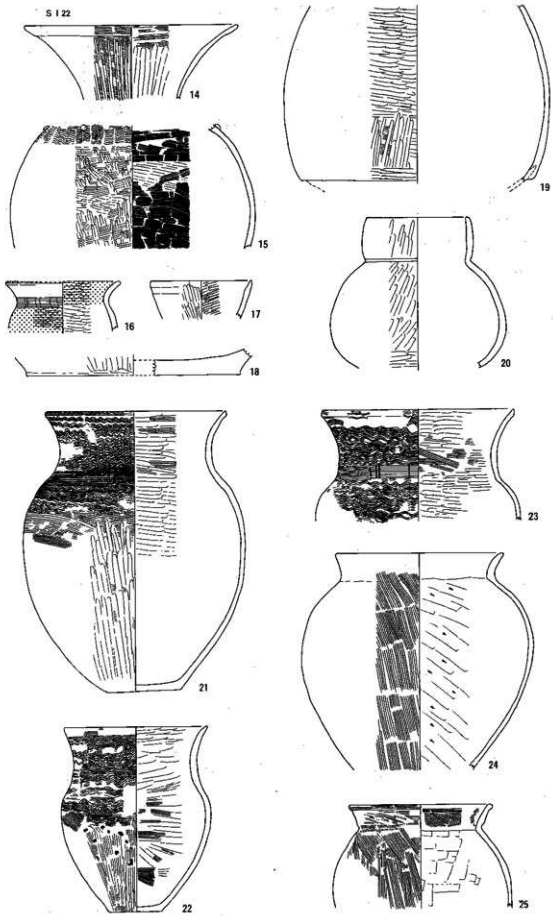


図24 古墳時代の土器(1) 1 : 4

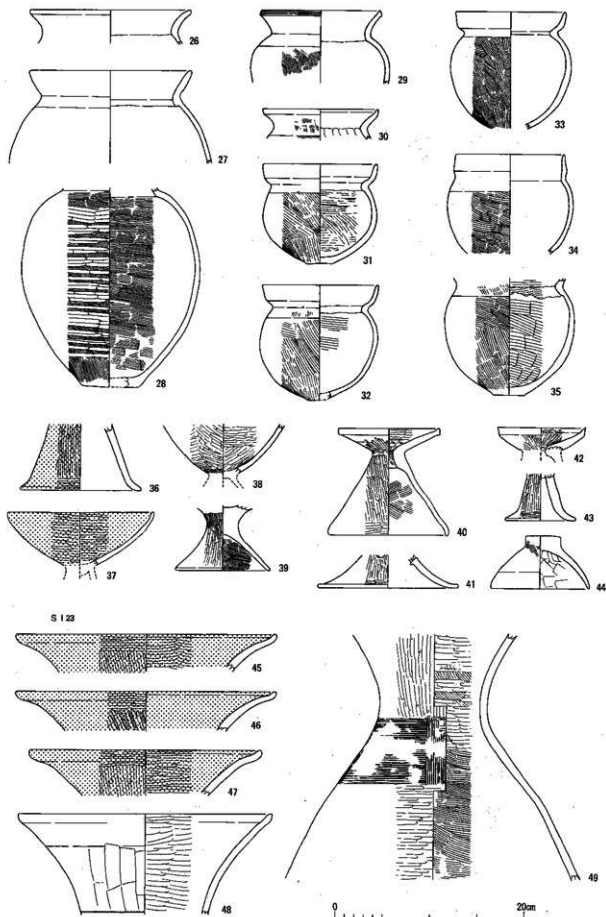


図25 古墳時代の土器(2) 1:4

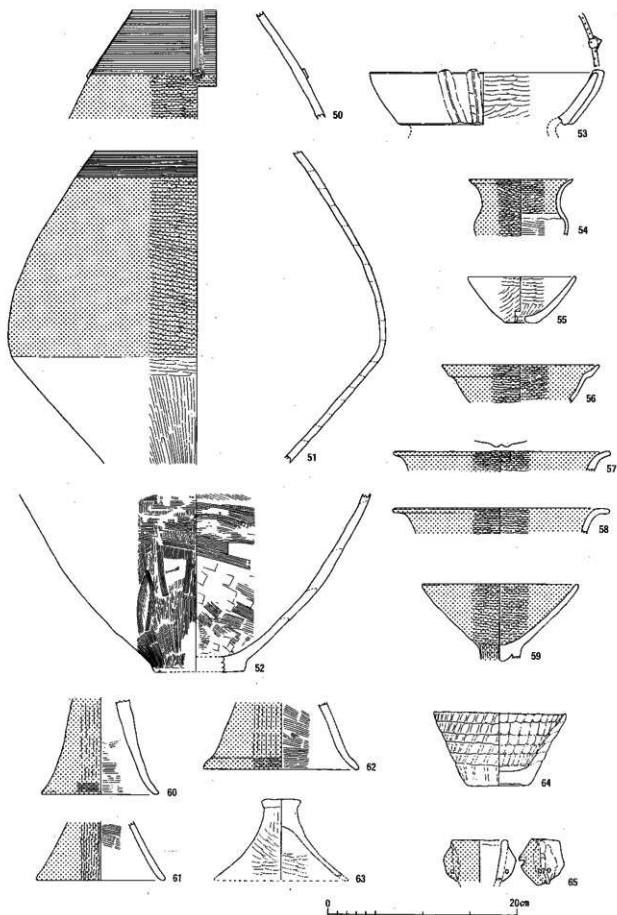


図26 古墳時代の土器(3) 1 : 4

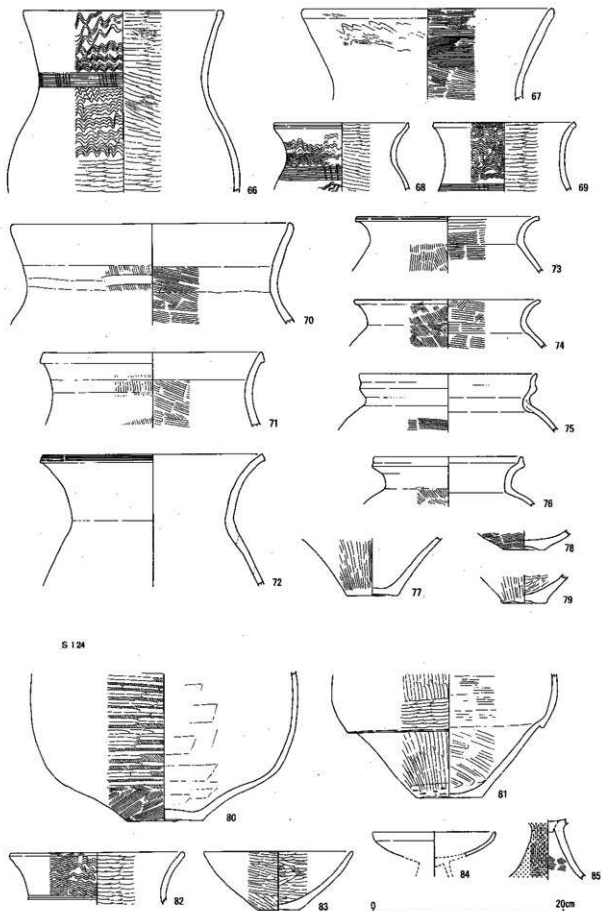


図27 古墳時代の土器(4) 1:4

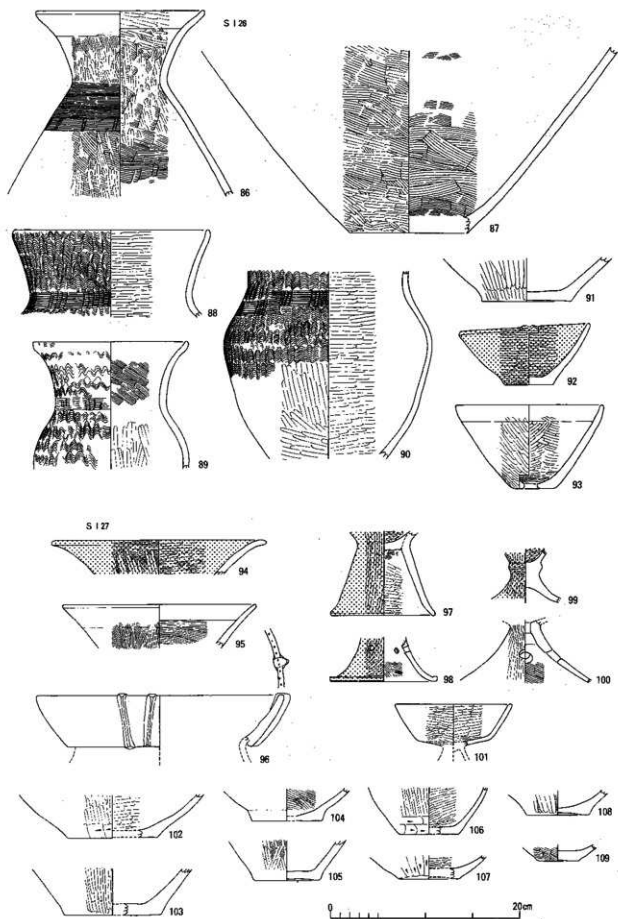


図28 古墳時代の土器(5) 1:4

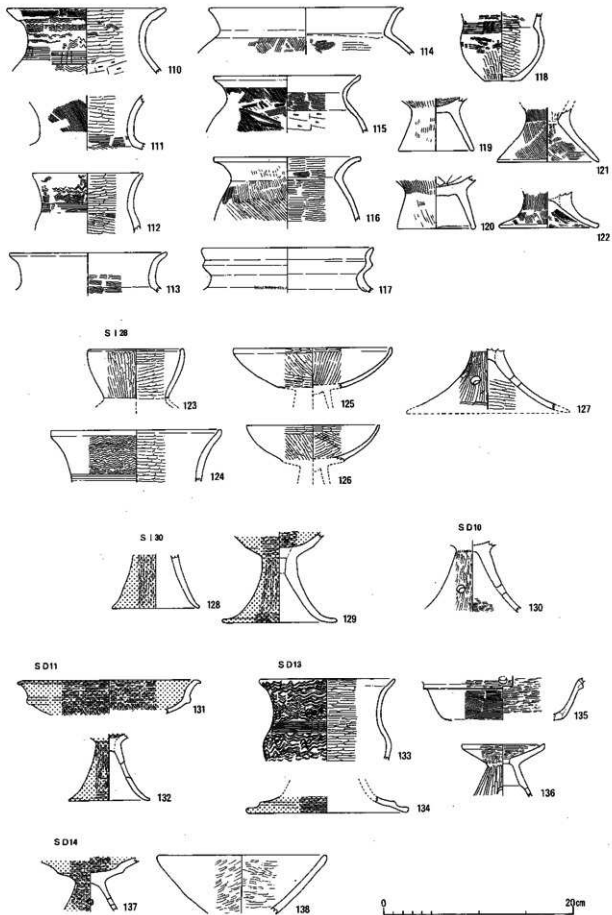


図29 古墳時代の土器(6) 1 : 4

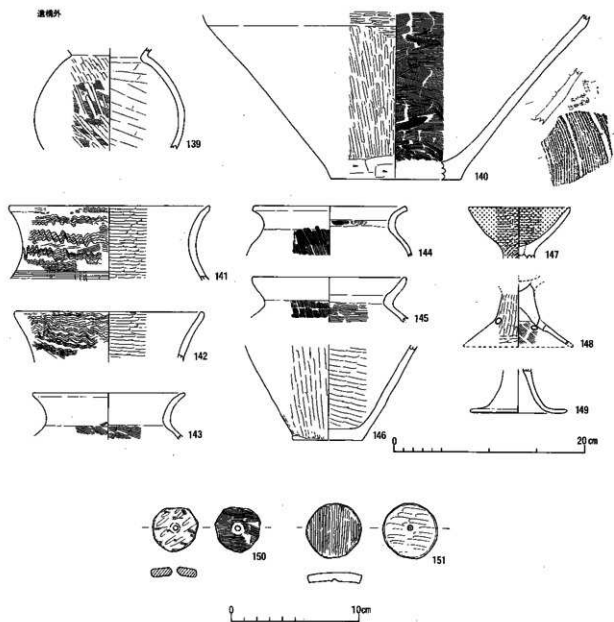


図30 古墳時代の土器(7) 1 : 4 土製品 1 : 3

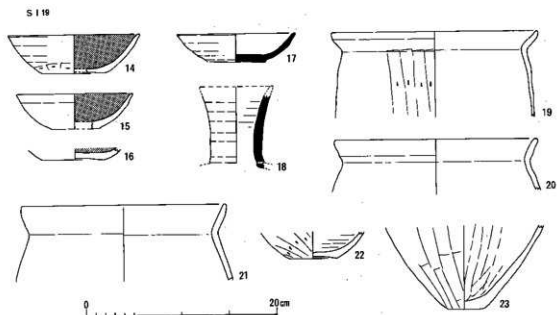
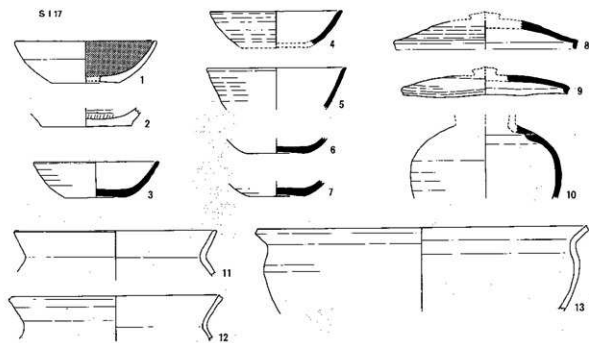


図31 平安時代の土器、陶器 1 : 4

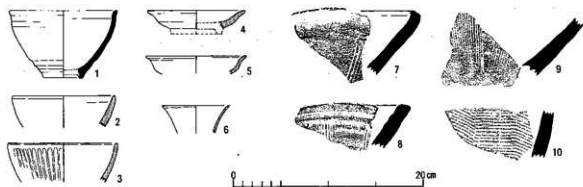


図32 中・近世の陶磁器 1 : 4

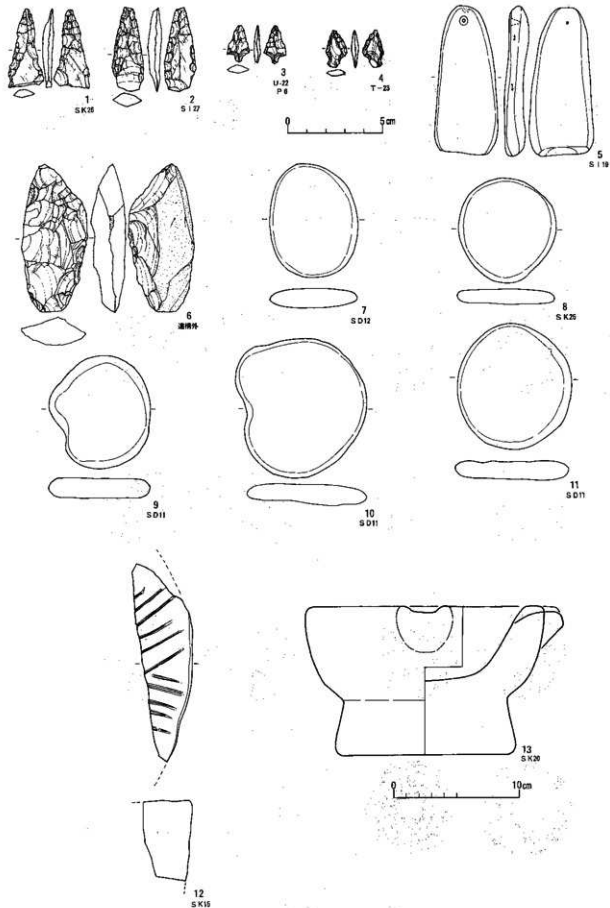


圖33 石器・石製品 1:2 1:3

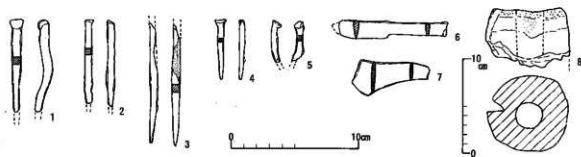


图34 铁製品・土製品 1:3 1:4

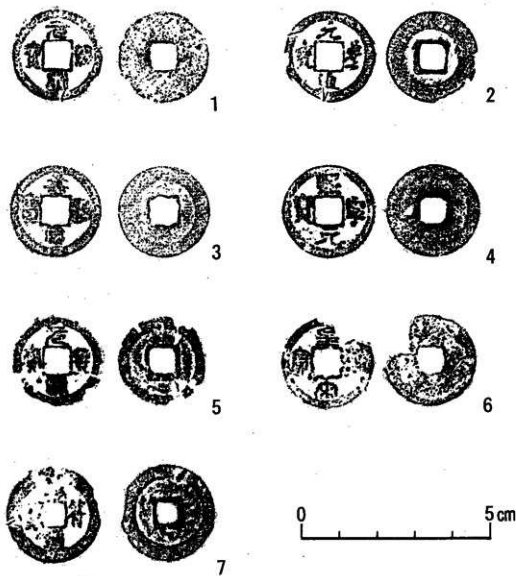


图35 钱货 拓影图 1:1

第5章 まとめ

春遅き北信濃の地、外様平の田植えも終り、早苗が植付き野山の緑が一段と濃さをまし、文字どおり緑したたる6月中旬末発掘調査が開始された。

今回調査の地点は、昭和32年春相原健氏が調査し、その資料をもとに柳町式を設定した地点に南接し、調査前から古墳時代初頭の柳町式期の遺構、遺物の発見が予想され期待された場所であった。

調査の結果は、予想に違わず古墳時代初頭の遺構遺物が数多発見された。そのほかに縄文時代、弥生時代、平安時代、中世、近世の遺構、遺物が発見され悠久の時代にわたって、外様平に突出した長峰丘陵が人々に生活の場として利用されていたことを如実に物語る。

以下、今回の調査で得られた成果を簡単にまとめてみよう。

縄文時代では、落し穴と推定される土坑が2基発見された。遺物は、縄文早期の絡状帯瓦痕文土器及び縄文前期前半の土器が若干発見されたのみであるが、絡状帯瓦痕土器は当地域では数少ない縄文早期の資料として重要である。

弥生時代では、目立った遺構の発見はなかったが、注目すべきは住居址の柱穴か掘立柱建物址の柱穴かは不明であるが、柱穴の柱を抜き後柱穴に弥生中期の壘、甕が埋納された状態で発見されたことである。弥生中期の人達の精神生活の一旦を示すものといえよう。

古墳時代では、壘穴住居址7軒、溝址11条、土塚5基と今回調査の仲では遺構の発見が目立って多かった。飯山地域の古墳時代初頭の型式たる柳町式土器の出土に相応しいということができよう。

壘穴住居址7軒の内、大型のS123の隅丸長方形のプランを除けば、他は全て正方形に近い隅丸長方形のプランを有する住居址である。柱穴は4本を原則としている。第3章3項一で常盤井は、今までの飯山地域の調査例を基に弥生時代後期から古墳時代前期までの壘穴住居址のプランの変遷について述べている。そこに弥生中期を加えれば、飯山地域の弥生時代から古墳時代前期までの住居址プランの変遷は次のようである。

円形—小半形—隅丸長方形—(隅丸)方形—(正)方形へと推移する。

遺物では、柳町式土器が住居址及び溝状遺構から多量に発見されている。これら発見された土器は、箱清水式土器の要素をもつ在地性の土器の他に東海系、北陸系の要素をもつ外来系の土器の存在が指摘されている。このことについては、小括の項で常盤井が触れている。いずれにしても、今回の調査で発見された土器資料は、柳町式土器の研究ひいては飯山地域古墳時代初頭文化の研究に重要な資料となるであろう。

溝状遺構が11条と多く発見されている。この溝状遺構は、大部分が排水溝と区画のための溝と考えられている。柳町遺跡の存在する外様平一帯は積雪量が多く、春先の雪解期の融雪水はいたって多いことを考慮すれば、排水溝は必要不可欠な施設であったことであろう。

平安時代では、壘穴住居址2軒、掘立柱建物址1軒が発見されている。

中・近世では、掘立柱建物址6軒、土塚9基、井戸址5基が発見されている。遺物では各種の陶磁器、銭貨、鉄製品、鞆の羽口、石臼、台付櫛鉢等が出土している。

以上のように、今回の調査においても種々と貴重な資料が得られた。その反面、飯山地域で数少ない古墳時代初頭の遺跡地の主要部分が、消え去ったことも事実である。残された部分は、今後開発されることなく、安らかに地下に眠っていてほしいと切に願っている。

それにしても、雨の多い年であった。雨のため何回となく調査は中断した。更に7・8月は晴れば酷暑。このような悪条件の中で、黙々と発掘作業に従事された作業の皆さんに心より感謝申上げるとともに、本調査に理解を示された地権者の服部一郎氏に深甚なる謝意を申しのべる次第である。

P L A T E

PL 1

上野遺跡



発掘前現場整備（南西から）

雪で倒れた木のかたづけ
手前の発掘地は前年の
試掘調査地



発掘作業風景（東から）

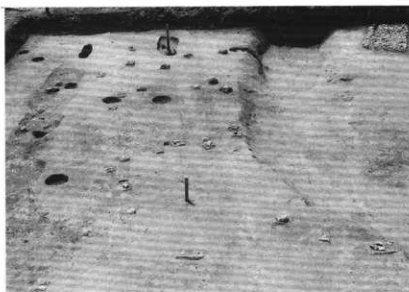
方形周溝墓周溝SD8
掘り下げ



発掘現地見学会

PL 2

上野遺跡

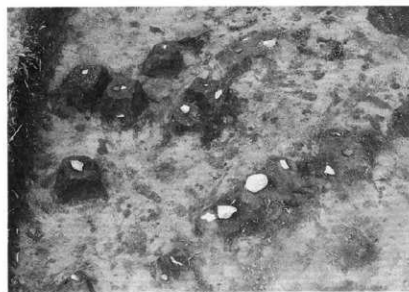


旧石器第11地点

石器分布状態（北から）
右は方形周溝墓周溝S D 7



旧石器第11地点内磔群
（北から）



旧石器第13地点（南から）

PL 3

上野道跡



木棺墓群分布状態（北から）

礎床木棺墓SK155



全景（南から）



四分割（北から）

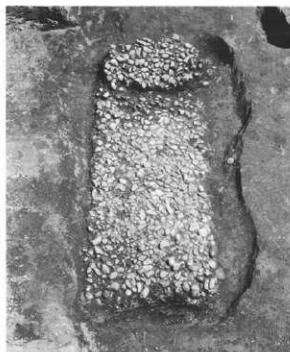


完掘状態（北から）

北壁内で枕状の礎の高まりを確認

PL4

上野遺跡



磯床木棺墓SK157
全景（南から）



同上 四分割（東から）



同上 完掘状態（南東から）

PL 5

上野遺跡



土城墓SK154（東から）



Y12号住居址（東から）
中央を方形周溝墓周溝
SD10に切られる



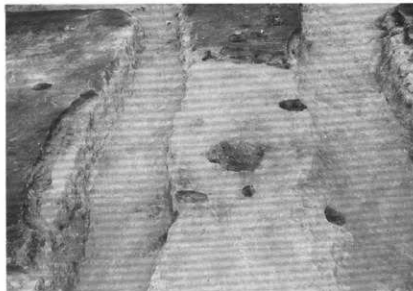
同上 土器出土状態
（東から）

PL 6



上野遺跡

Y13号住居址
遺物分布状態（東から）



Y13号住居址
完掘状態（南から）
方形周溝墓周溝SD8（右）
SD9（左）に切られる



Y14号住居址
完掘状態（西から）
方形周溝墓周溝SD8に切ら
れる

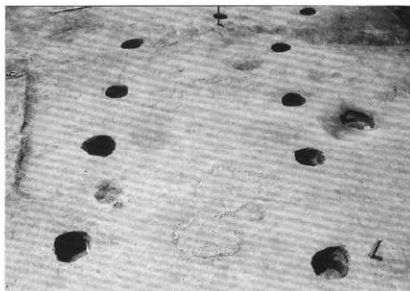


掘立柱建物址

SB23 (柱穴大)

SB24 (柱穴小)

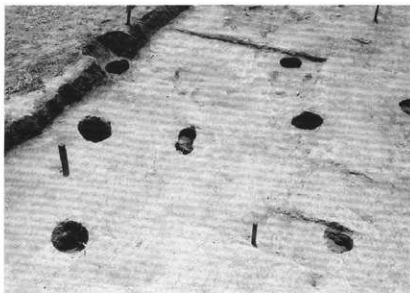
(北から)



掘立柱建物址

SB25 (北から)

奥の凹みは方形周溝周溝



掘立柱建物址

SB28 (北から)

PL 8

上野遺跡



7号方形周溝墓 (SD 8)

上面輪郭 (東から)

黒色土層中で輪郭を確認



7号方形周溝墓 (SD 8)

完掘状態 (東から)

周溝底は平らでなく凹凸がある



8号方形周溝墓 (SD 9)

完掘状態 (北から)

手前の北辺溝中央の凹みが

溝内墓域 S K152

PL9



上野遺跡

方形周溝墓周溝土層（南から）
SD8（右） SD9（左）



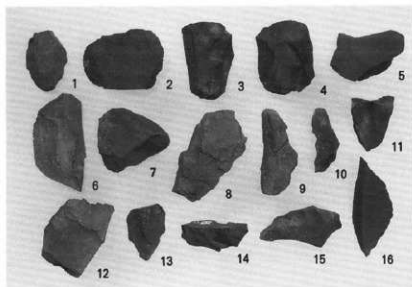
8号方形周溝墓周溝内墓壇
SK152上面輪郭（南東から）



同上
台付鉢出土状態（南から）

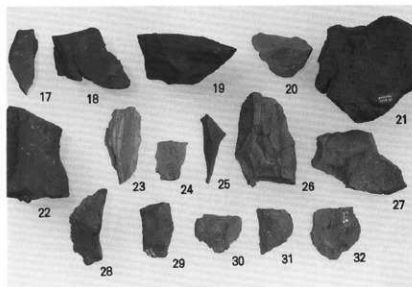
PL10

上野遺跡

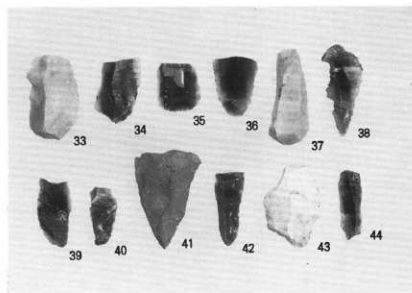


旧石器

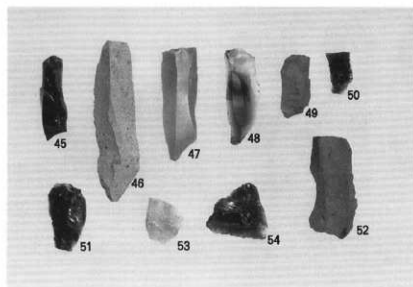
(右下数字は挿図番号に同じ)



旧石器

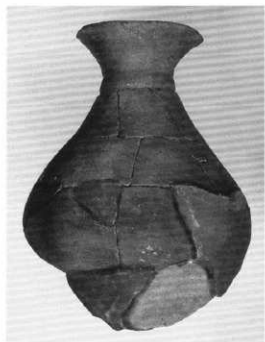


旧石器

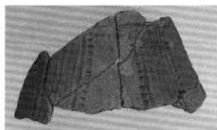


旧石器

Y12号住居址



1



3



5



2



6

PL12

上野遺跡

Y13号住居址



その他

16



Y14号
住居址

25



31

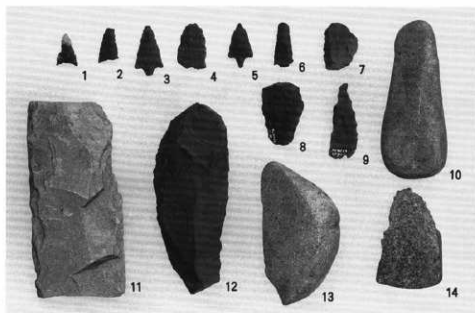


その他

39



33



石器

PL13



1

古墳時代の土器

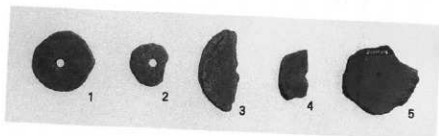


2

上野遺跡



3



1

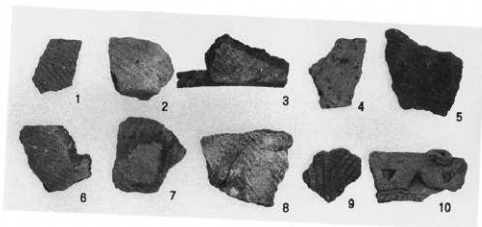
2

3

4

5

紡錘車



1

2

3

4

5

6

7

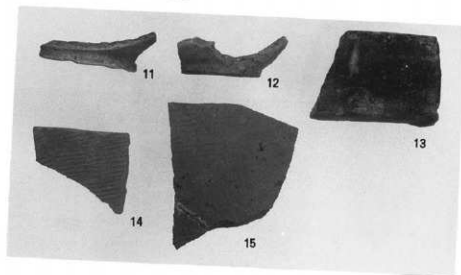
8

9

10

縄文土器

平安時代の土器・陶器



11

12

13

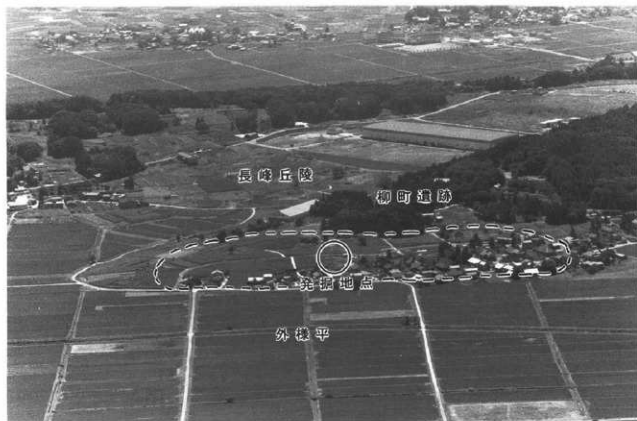
14

15

鉄滓



16



遺跡遠望 鷹落山より 1995.7.24



発掘調査風景（南西から）

PL15

縄文時代の土坑 左SK23 (北から)

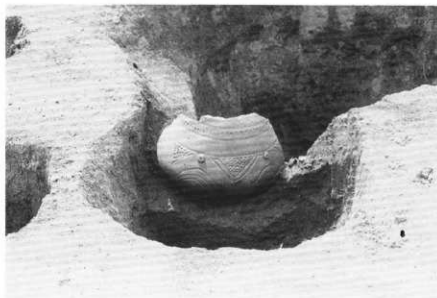


柳町遺跡

右SK28 (北から)



弥生時代土器埋納柱穴
W-20区P1 (北から)



同上
W-20区P2 (東から)

PL16



柳町遺跡

古墳時代
竪穴住居址
S I 21、S I 22 (南から)
奥がS I 21
手前がS I 22



同上
S I 22遺物出土状態
(南から)



同上
S I 24 (南から)

PL17

柳町遺跡



古墳時代
竪穴住居址
S I 23 (東から)



同上
S I 23遺物出土状態
(南西から)



同上
S I 28 (南から)
床面下に凹部がめぐる

PL18

柳町遺跡



古墳時代

溝SD10・11-12・14・18

(南から)



同上

SD13・14 (東から)

方形に囲繞するのがSD13

同上

下左SD17・19 (北から)

下右SD15土層 (北から)



PL19



柳町遺跡

掘立柱建物址柱穴検出状態
(南西から)

埋土のちがいが重複
関係がある



掘立柱建物址S112

(南から)

側柱が2列

中央黒色部分がS118

周溝



同上

S118 (北から)

PL20



柳町遺跡

掘立柱建物址柱穴群

(北から)

手前は平安時代竪穴住居
址S I 17・19



同上(南西から)



同上(南から)

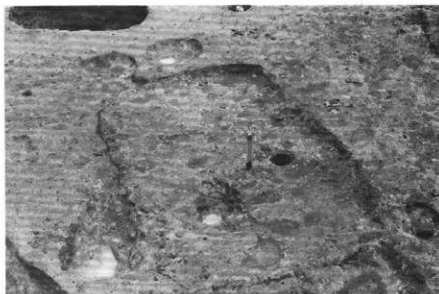
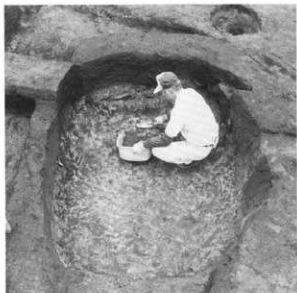
PL21

中・近世の土坑

左SK14 (西から)

右SK20 (南から)

柳町遺跡



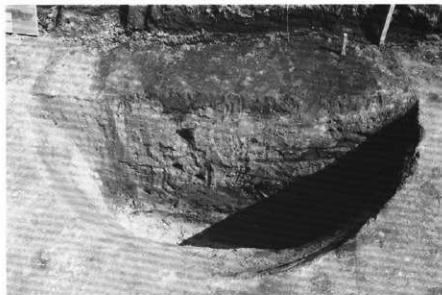
貼床のある堅穴遺構
SK25 (南西から)



同上
SK26 (南西から)



中・近世の土坑
SK24 (西から)



井戸SE1土層
(西から)



井戸SE4
(西から)

PL23

W-20 P 2



1

柳町遺跡

W-20 P 1



2

W-20 P 1



3

S I 21



7



6



11



12

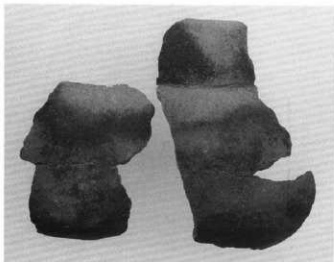


13

弥生・古墳時代の土器（右下数字は挿図番号と同じ）

PL24
S I 22

柳町遺跡



20



21



22



23



24



25

古墳時代の土器

PL25

柳町遺跡



27



28



29



30



33



31



32



36



34



35



40



41



43



44

古墳時代の土器



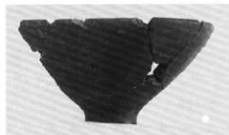
48

52

54



56



55



57



63



60



62



64



71



74



72

PL27



68



75

柳町遺跡



73



76

S I 26



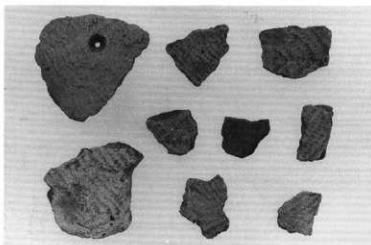
89



92

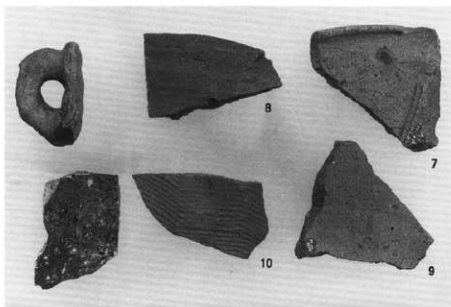


93

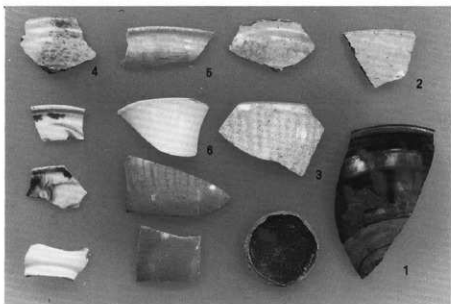


縄文時代の土器
(写真のみ)

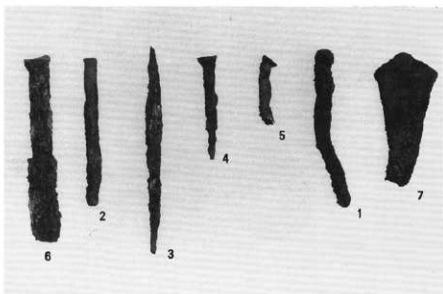
古墳時代の土器・縄文時代の土器



中世の土器・陶器



中・近世の陶磁器



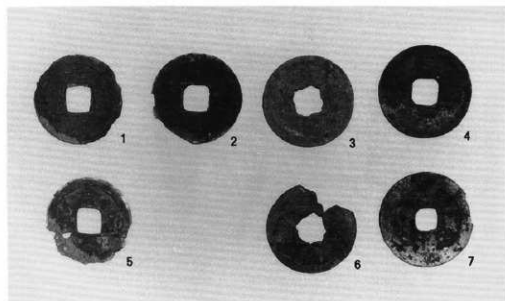
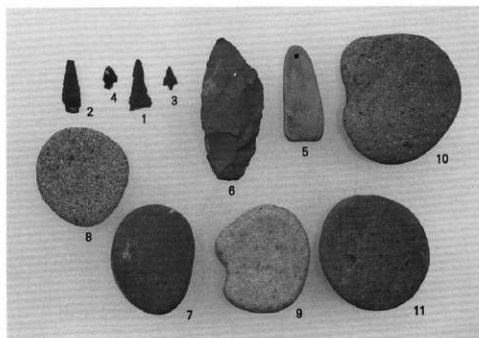
鉄製品

中・近世の遺物

PL.29

石器・石製品

柳町遺跡



石器・石製品錢貨

飯山市埋蔵文化財調査報告 第53集

上野Ⅷ・柳町遺跡

平成8年3月10日

編集・発行 長野県飯山市教育委員会

長野県飯山市大字飯山1.110-1

印刷 ㈱足立印刷所

長野県飯山市大字常盤581-1